

シアケ遺跡発掘調査報告書

主要地方県道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2002年3月

伯太町教育委員会

シアケ遺跡発掘調査報告書

主要地方県道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2002年3月

伯太町教育委員会

序 文

伯太町は原始・古代より文化の栄えた地域で、出雲の東端にあたり、とりわけ隣国伯耆との密接な交流もうかがわれ、現在でも数多くの文化遺産が残っています。

ここに報告するシアケ遺跡は鳥根県広瀬土木事務所の委託を受けて伯太町教育委員会が平成12年～13年度に実施した主要地方道県道安来伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果であります。

町内には要衝の地として安田要害山をはじめたくさんの方城跡があります。シアケ遺跡は、調査前から繩張りが鮮明に読み取られる山城跡で伯太川の上流域を監視する上で絶好の場所に立地しています。調査の結果、曲輪や建物跡、堀切、横堀状造構などの遺構が確認され、当時使われていた土器などの遺物も発見され、山城の実態を知る上で貴重な手がかりを得ることができました。

この調査地はやむを得ず現状を失うことになりましたが、その記録や掘り出された出土品は貴重な文化財として私たちの郷土を知り、愛する一助となれば幸甚と存じます。

調査に際しては、土地所有者、日次地区的皆様に一方ならずご理解とご協力を頂くとともに、県教育委員会文化財課をはじめとする関係各機関、各位のご指導ご助言を賜わりました。心から感謝し厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

伯太町教育委員会

教育長 山崎 丈治

例　　言

1. 本報告書は主要地方道県道安来伯太日南線改良工事に伴い、島根県広瀬上木事務所の委託を受けて伯太町教育委員会が実施した伯太町大字日次の地名「シアケ」の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本書の作成は次のように行なった。
報告書本文については松本が主として執筆し、氏名を日次に記載した。挿図のうち、遺構実測は松本、福田、川本。浄写は福田、川本が行った。遺物の実測は松本、福田、川本、田中、前田。浄写は福田、前田が行った。遺構写真・遺物写真是福田、石門が撮影した。全体の編集は松本、妹尾が行なった。
3. 本報告書に掲載の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1、及び5,000分の1の地形図「伯太」を使用した。
4. 図面、写真類・出土遺物の保管は、伯太町教育委員会で行っている。
5. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。

〈調査指導〉

足立 克己（島根県教育委員会文化財課）
池淵 俊夫（島根県教育委員会文化財課）

〈指導・助言〉

東森 市良・佐古 和核・西尾 克己・中原 齊

凡　　例

1. 本報告書は収載した遺物の記述は、本文中の観察表にかえ、遺物には観察表中の取上番号をネーミングしている。
2. 本報告書における実測図は、下記の縮尺で掲載した。
（遺構図・遺物出土状況図）
トレンチ・掘立柱建物跡・柵列・堀切1/80、土坑・溝状遺構1/80・1/40、段状遺構1/160・1/80、曲輪1/200・1/100・1/80・1/40、横幅状遺構1/130・1/60、遺物出土状況1/40・1/20
（遺物実測図）
弥生土器・土師質土器・須恵器・陶器1/3、上製品1/1、石製品1/4・1/1、鉄製品1/2・1/1
3. 本報告書の上器尖測図において、その断面は弥生土器・土師質土器・陶器は白抜き、須恵器は黒塗りとした。土器実測図中「—○」は、ケズリによる砂粒の動きを示す。
4. 本報告書の遺構挿図中セクションエレベーションの基準線標高は[H=]の記号で表す。
5. 本報告書における遺構略記号は次のように表わす。
S B : 掘立柱建物跡 S A : 柵列 S D : 溝状遺構 S S : 段状遺構
S K : 土坑 S X : 古墳 P : ピット
6. 本報告書における遺物記号は次のように表わす。
P o : 土器・土製品 S : 石器 F : 鉄器
7. 本報告書におけるピットの計測値は（長径×短径×深さ）cmで示した。

目 次

序文

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・図版目次・付図目次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 (妹尾) 1

第2節 調査の経過 (妹尾) 2

第3節 調査体制 (妹尾) 2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (松本) 4

第2節 歴史的環境 (松本) 4

第3章 シアケ遺跡の調査

第1節 調査の概要 (松本) 6

第2節 曲輪 (松本) 15

第3節 段状造構、櫓列 (松本) 24

第4節 掘立柱建物跡 (松本) 35

第5節 溝状造構 (妹尾) 44

第6節 土坑 (妹尾) 47

第7節 堀切 (松本) 57

第8節 横堀状造構 (松本) 59

第9節 古墳 (松本) 63

第10節 その他の遺構外造物 (松本) 66

第4章 まとめ

第1節 遺構 (松本) 68

第2節 遺物 (松本) 68

出土遺物観察表

出土土器・陶磁器・土製品観察表

出土石製品観察表

出土金属製品観察表

写真図版

挿 図 目 次

挿図 1	シアケ遺跡調査地位置図	1	挿図 31	第 1・2 挖立柱建物跡遺構図	35
挿図 2	伯太町遺跡分布図	3	挿図 32	第 3・4 挖立柱建物跡遺構図	36
挿図 3	シアケ遺跡調査前地形測量図並びにトレ ンチ位置図	7	挿図 33	第 5・6・7 挖立柱建物跡遺構図	37
挿図 4	第 1・2・3 トレーンチ遺構図、第 1 トレ ンチ出土土器実測図	8	挿図 34	第 8 挖立柱建物跡遺構図・出土土器実測 図	39
挿図 5	第 4・5・8・12・13 トレーンチ遺構図	9	挿図 35	第 9 挖立柱建物跡遺構図・出土土器実測 図	39
挿図 6	第 6 トレーンチ遺構図	10	挿図 36	第 10・11・12・13 挖立柱建物跡遺構図	41
挿図 7	第 7 トレーンチ遺構図(1)	11	挿図 37	第 14・15 挖立柱建物跡遺構図	42
挿図 8	第 7 トレーンチ遺構図(2)	12	挿図 38	第 1 溝状遺構遺構図	44
挿図 9	第 9 トレーンチ遺構図	13	挿図 39	第 4 溝状遺構遺構図	45
挿図 10	第 10・11 トレーンチ遺構図、第 10 トレ ンチ山上上器実測図	14	挿図 40	第 5 溝状遺構遺構図	45
挿図 11	第 7 トレーンチ集石状況図	15	挿図 41	第 1 土坑遺構図	47
挿図 12	曲輪 1 北東側遺構図・山上遺物実測図	16	挿図 42	第 2 土坑遺構図	47
挿図 13	曲輪 2 全体遺構図	17	挿図 43	第 3 上坑遺構図	48
挿図 14	曲輪 2 出土遺物実測図(1)	18	挿図 44	第 4 土坑遺構図	48
挿図 15	曲輪 2 出土遺物実測図(2)	19	挿図 45	第 5 壁坑遺構図	48
挿図 16	曲輪 2 出土遺物実測図(3)	20	挿図 46	第 6 土坑遺構図	49
挿図 17	曲輪 2 出土遺物実測図(4)	21	挿図 47	第 7 土坑遺構図	49
挿図 18	曲輪 2 出土遺物実測図(5)	22	挿図 48	第 8 土坑遺構図・出土遺物実測図	49
挿図 19	玉砂利出土状況図	22	挿図 49	第 10 上坑遺構図	50
挿図 20	第 17 上坑集石状況図	23	挿図 50	第 9 土坑遺構図	50
挿図 21	第 1 段状遺構遺構図	24	挿図 51	第 11 土坑遺構図	51
挿図 22	第 8・9・11・12 段状遺構遺構図・出土 遺物実測図(1)	27	挿図 52	第 12 土坑遺構図	51
挿図 23	第 9 段状遺構出土遺物実測図(2)	28	挿図 53	第 13 土坑遺構図	51
挿図 24	第 13 段状遺構遺構図・出土遺物実測図、 第 6 構状遺構遺構図・出土遺物実測図	29	挿図 54	第 14 土坑遺構図・出土土器実測図	52
挿図 25	第 14 段状遺構遺構図、第 7 溝状遺構遺構 図	30	挿図 55	第 15 上坑遺構図	52
挿図 26	第 15 段状遺構遺構図	31	挿図 56	第 16 上坑遺構図	53
挿図 27	第 1 檜列遺構図、第 16 段状遺構遺構図・ 出土遺物実測図(1)	32	挿図 57	第 17 土坑遺構図	53
挿図 28	第 16 段状遺構出土遺物実測図(2)	31	挿図 58	第 18 土坑遺構図	53
挿図 29	第 17 段状遺構遺構図	32	挿図 59	第 19 土坑遺構図・出土遺物実測図	54
挿図 30	第 2 檜列遺構図	34	挿図 60	第 20 土坑遺構図	54
			挿図 61	第 21 上坑遺構図	55
			挿図 62	第 22 土坑遺構図	55
			挿図 63	第 1 墓切 東側遺構図・山上上器実測図、 第 23 土坑遺構図	57
			挿図 64	第 2 墓切 東側遺構図、第 19 段状遺構遺 構図	58

挿図 65 第1横堀状遺構遺構図(1)・集石状況図	60	挿図 68 日次1号墳第1埋葬施設遺構図・遺物出土状況図	65
挿図 66 第1横堀状遺構遺構図(2)・出土遺物実測図	61	挿図 69 日次1号墳第1埋葬施設出土遺物実測図	65
挿図 67 日次1号墳遺構図	64	挿図 70 遺構外出土遺物実測図	67

挿 表 目 次

挿表 1 伯太町遺跡一覧表	3
挿表 2 トレンチ計測表	6
挿表 3 堀立柱建物跡計測表	43
挿表 4 溝状遺構計測表	46
挿表 5 土坑計測表	56

図版目次

一遺構写真一

- 図版 1 シアケ遺跡調査前全景
図版 2 シアケ遺跡調査地全景
図版 3 調査前曲輪 1、第 1・2・3・6 トレンチ、SK-01
図版 4 第 6・7・8・9 トレンチ、土塁、第 2 横堀状遺構
図版 5 第 7・11・13 トレンチ、第 1 堀切、SK-23
図版 6 調査区南側、第 2 堀切、曲輪 1、SK-23
図版 7 曲輪 1、SX-01、SX-01 第 1 墓葬施設、SS-04・05・06、SB-01、緊急防災工事施工状況
図版 8 曲輪 2、SS-09・11・12
図版 9 曲輪 2、SB-14・15、SD-06
図版 10 調査区東側、曲輪 2、SS-17、SD-04・05、SK-01・04
図版 11 SK-05・06・07・08・09・10・11・12

図版 12 SK-11・12・13・14・15・18・20・21

図版 13 SK-22、第 1 横堀状遺構

図版 14 第 1 横堀状遺構

一遺物写真一

- 図版 15 第 1・10 トレンチ、SB-08・09、SS-07・08・09・10、SK-14
図版 16 第 1 堀切、SS-10・12・16・18、SK-08
図版 17 曲輪 2、SS-04・06・09・10・16・18
図版 18 曲輪 2、SS-10・13・14・16・18、SK-19、SX-01 墓葬施設
図版 19 遺構外

付図目次

- 付図 1 シアケ遺跡全体遺構図
付図 2 シアケ遺跡調査区地形測量図

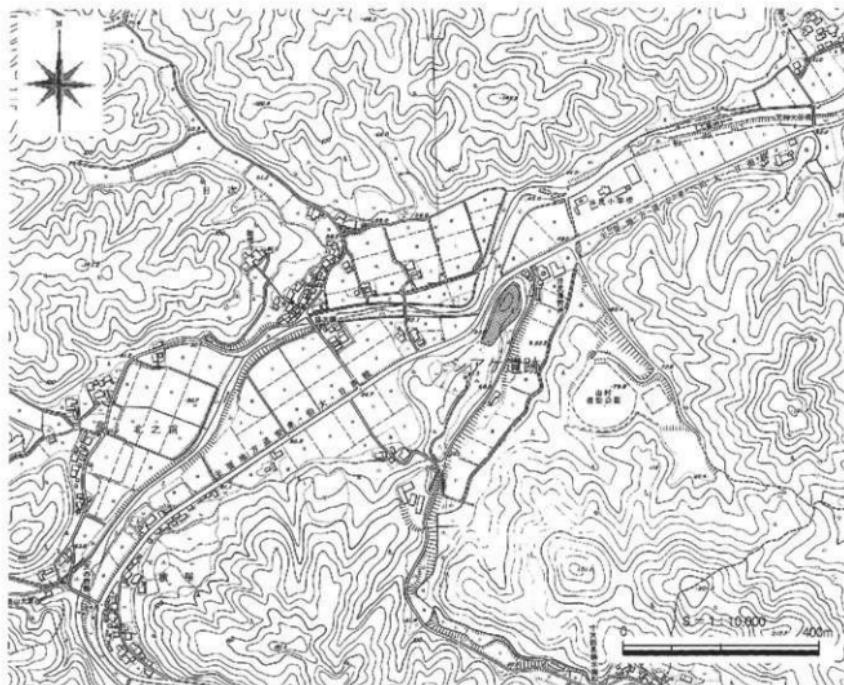
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

主要地方道県道安来伯太日南線改良工事に係るシアケ遺跡の取り扱いについては、数年前から関係諸機関で協議、調整が重ねられ、この事業によって損なわれる山城の丘陵部を対象として発掘調査が実施されることとなった。

これに先立ち、平成12年度に伯太町教育委員会が島根県広瀬土木事務所から委託を受け発掘調査を実施することになった。平成12年6月、現地調査に先立ち、事業主体の島根県広瀬土木事務所並びに島根県教育委員会文化財課と調査の実施について具体的な協議を行った。

その結果、平成12年8月1日から調査員が現地を踏査して事業計画のうち西側から北側にかけての急斜面を除く地域を伐開の範囲として広瀬土木事務所に立木伐採を依頼することになった。立木伐採後、現地調査を開始する運びとなった。



挿図1

シアケ遺跡調査位置図

第2節 調査の経過

平成12年8月22日に伐採された立木が搬出されたのを確認後、8月24日から調査員が調査区設定を行い、並行して国土立体杭の設定、調査前地形測量を測量業者に委託して実施した。なお、災害対策として県道沿いの内側から北側にかけての急斜面には防護柵の設置を行なった。

調査はまず調査区全体に地形に応じて12本のトレントを設定し、9月4日から地表面清掃と遺構検出を人力で行なった。なお、地表面清掃においては相当量の雑草、小雑木が生じたため、これらの撤去、集積には困難を極めた。曲輪平坦面のトレント調査実施中の10月6日(金)午後1時30分頃震度6以上の大地震(鳥取西部地震)にみまわれた。丘陵頂部曲輪平坦面には10人以上の作業員、調査員、補助員が発掘作業中であった。全員が目前で地表に何条もの大きな地割れと丘陵全体が前後左右にゆれるという異常事態に遭遇したにもかかわらず災害対策に万全の注意を払っていたため、幸いにも全員が無事であった。10月11日、これを受け、広瀬土木事務所、県教育委員会文化財課、伯太町教育委員会は、今後の調査計画について協議を重ねた。その結果、当初は遺構が確認された全域についての調査を予定していたものの、地震により南西から北東にかけての西側半分は危険地帯と判断され、調査は丘陵の東側半分に計画変更された。なお、10月10日から10月12日までの3日間は好天にもかかわらず、地震灾害防止の観点から現場作業を休止した。10月13日からトレント調査を再開し、10月19日、全てのトレント調査を終了した。地震により危険地帯とかした西側半分が緊急防災工事地域となった為、10月24日から11月10日の間でこの部分の一角を緊急調査することになった。11月20日、調査変更計画に基づいて、本格的な発掘作業を開始した。翌13年1月から3月上旬は積雪の為、現場作業休止日が続いた。雪解け後、3月14日から曲輪等の遺構掘り込みが実施され、5月14日をもって遺構完掘が終了した。その後、遺構実測を続け、5月19日現場調査を全て終了した。

調査面積は当初約2,500m²を予定していたが、変更後は1,392m²となった。5月25日から本格的な整理作業を実施し、その後、6月18日、島根県教育委員会文化財課の指導により第2堀切の一角の追加調査をする運びとなり、6月27日をもって終了した。

第3 調査体制

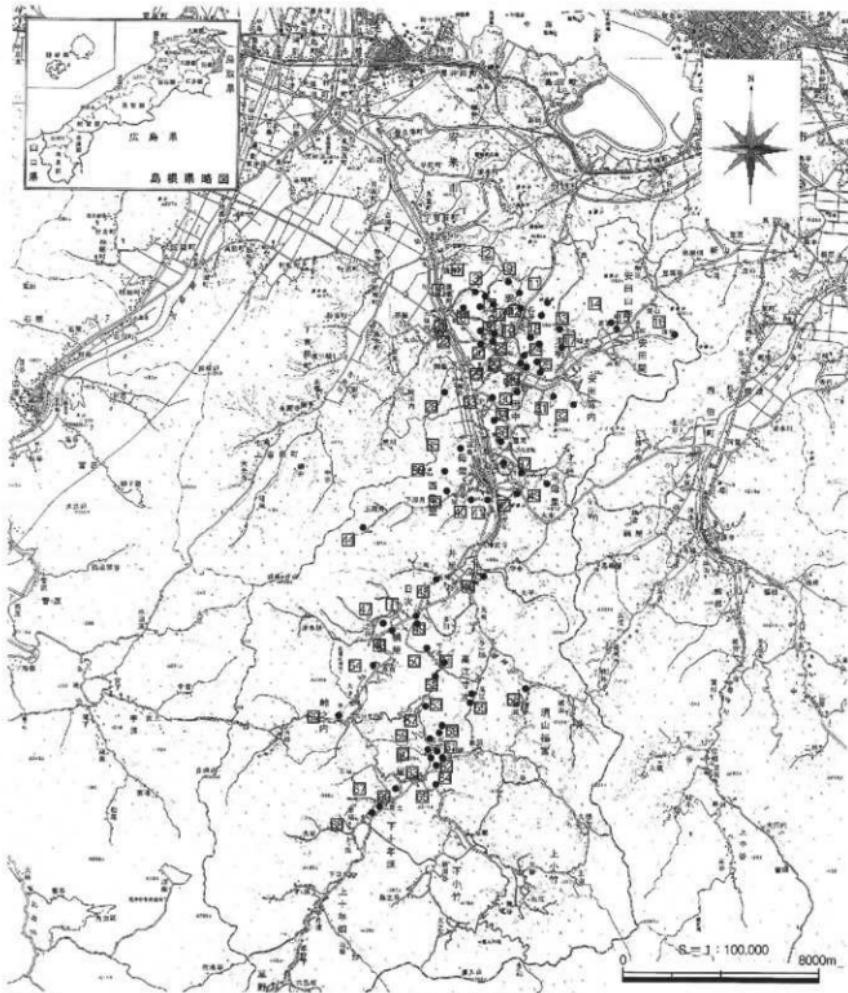
島根県教育委員会文化財課、島根県埋蔵文化財調査センターの指導のもと、下記の体制で実施した。

調査主体 伯太町教育委員会

調査担当	調査団長	山崎 弘治(伯太町教育委員会教育長)
	調査主任	妹尾 秀樹(伯太町教育委員会文化財保護係長)
	調査員	松本 哲
	調査補助員	福田 寛子、川本 美佐子
	整理補助員	石門 安定、田中 セキ子、前田 慶子、 仲山 節子、細田 久美子、

下記の方々に発掘作業員として協力していただいた、記して謝意を表したい。

赤名幸次、秋間エツコ、安部章夫、安部悦子、安部恒子、岩佐忠信、遠藤廣子、塙見敏行、塙見正子、長谷繁、長谷玉江、細田さなえ、細田重美、細田壽美子、細田暖子、細田雅秋、山岡信子、山岡峯子、山岡美登



插図2

伯太町遺跡分布図

1 シアク遺跡	13 長尾名古墳群	25 東山城古墳	37 中村茶臼古墳群	49 植木古墳群	61 小松伏古墳群
2 真の生糞遺跡	14 倉戸古墳	26 萩原熊穴古墳	38 朝霧山古墳群	50 田村御室古墳群	62 天神城古墳群
3 佐東古墳群	15 あ山谷古墳	27 石井古墳	39 町古墳群	51 上原田古墳	63 小丸子山古墳群
4 金鶴古墳群	16 刈庄横穴群	28 施山古墳群	40 御茶古墳群	52 油の内塙古墳	64 のろ山古墳
5 佐久島古墳	17 小舟はた古墳群	29 木戸古墳群	41 伊田古墳群	53 上の台古墳	65 北山廻三郎古墳群
6 佐緒山古墳群	18 佐古古墳	30 大森古墳群	42 伊吹津社跡遺跡	54 有間丸山古墳	66 赤坂筑山古墳群
7 中山古墳群	19 佐野古墳	31 佐野古墳群	43 佐野御室古墳群	55 有間丸山古墳	67 佐野御室古墳群
8 佐野古墳	20 佐野古墳	32 佐野古墳群	44 佐野御室古墳	56 佐野御室古墳	68 下七年古墳
9 佐ヶ神古墳	21 佐野古墳	33 佐野田古墳群	45 佐野古墳	57 三河原根古墳	69 佐原古墳
10 長田八幡宮長穴	22 田中古墳群	34 中山古墳群	46 三手古墳群	58 三向澤古墳群	
11 林伏塚古墳	23 曾地古墳群	35 梅森寺古墳群	47 犬伏が平古墳	59 高木塚古墳群	
12 カワカツ古墳	24 月部古墳群	36 飯淵山古墳群	48 二見田古墳	60 六角塚古墳群	

插表1 伯太町遺跡一覧表

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

伯太町は、島根県の東端に位置し、北は安来市、西は広瀬町に接している。東と南は鳥取・島根の県境であり、東には米子市と西伯町、南には日南町がそれぞれ接している。

町域の南端より伯太川及び支流が流れ、集落も川沿いに営まれている。伯太川に沿うように中央軸として主要地方道安来伯太日南線が縱貫している。これを主軸にして、主要地方道溝口伯太線、一般県道米子伯太線、同米子広瀬線、などとそれぞれ米子自動車道、山陰自動車道などに連結している。伯太町から近隣主要地への距離は松江32km、安来11kmである。

伯太町の面積は昭和29年の旧村別集計では95.06km²であったが、国土地理による平成元年10月の修正結果では、現在97.87km²となっている。

伯太町の地質は山間部の大半が花崗岩で、母里、井尻は安山岩類が分布する。南部には鷹入山(706m)、葛野山(737.8m)がそびえている。葛野山は『山雲風土記』に葛野山(かどのやま)として記されている。

シアケ遺跡は伯太川西側の横屋集落の西側から井尻集落に向かって延びる尾根の先端部に位置する遺跡である。

第2節 歴史的環境

伯太町は中心を伯太川が流れ、これに合流する支流も多くみられる。これらを挟むようにして成立した沖積地が多くみられ、遺跡も主としてこの低地及び河岸段丘に立地する。

縄文時代は豊かな海、山の幸を求めて人々が広く活動した時代であるが、この時代の遺物として伯太町からは赤屋地区の下十年畑(68)の水田下の黒色土中から、土削器と共に出土した十器の中に縄文土器片が1片含まれている。器形は深鉢と考えられ、表面には縄文がめぐらされている。赤屋地区は伯太町の最奥部であるが、縄文時代の人々が伯太町において生活した証である。

弥生時代に入ると、大陸から伝來した水稻耕作と金属器の普及により、縄文時代とは異なった社会構造が成立し、階級社会を成立していくことはすでによく知られていることである。伯太町内の弥生時代の遺跡は丘陵、山裾に多くみられるが、弥生時代前期まで遡る遺跡は今のところは確認されていない。弥生時代中期の遺跡としては、昭和34年に壺形土器、黒曜石が出土した安田中地区の丹部遺跡(24)、田面崎遺跡(22)が挙げられる。後期になると、稻作可能地を追って奥地部へと弥生時代の人々は生活の場を拡大するようになっていくことが、後述する後期遺跡の分布からうかがい知ることができる。弥生時代後期の時期の遺跡として田面崎遺跡(22)、安山小学校校庭裏遺跡、平成4年にゴルフ場建設予定地に伴う試掘調査によって、四隅突出型墳丘墓の確認されたカウカツ遺跡(12)、同調査によって住居跡が確認された丹部遺跡(24)などを挙げることができる。

古墳時代に入ると多くの古墳が伯太町内に造られるようになる。古墳の所在については、大規模な古墳が独立していることはなく、その大半は数基単位となって平地を望む尾根上に点在している。6世紀～7世紀の築造の後期古墳が大半とみられている。時期の明らかな古墳は、『伯太町史』によると長尾古墳群(31)から出土した須恵器が、出雲における須恵器編年の第2～第3前半形式に相当することから、最も古い時期のものとされている。その他に、文殊山古墳群(6)、益田谷古墳群(41)、極楽寺山古墳群(35)、矢原古墳(69)、上の台古墳(53)、日向峰古墳群(58)、森木峰古墳群(59)、天神堀古墳群(62)、小松伏古墳群(61)、のろ山古墳(64)、穴烟峰古墳群(60)、小丸小山古墳群(63)、などがあげられる。横穴群は母里地区に多く確認されており、井尻、赤屋、安田においても確認されている。安山の中山横穴

(7) は昭和 14 年に発見され、胴地金銅張りの圭刀太刀、馬具等が出土している。その他に、長田八幡宮横穴(10)、坊床横穴群(16)、石堂横穴群(26)、佐古横穴群(44)、比田啓三郎氏裏横穴群(65)などがあげられる。

天平 5 年(733 年)に記された『出雲風上記』によると、現在の伯太町は意宇郡に入り屋代郷、母里郷に該当すると考えられる。これら郷の位置についても記述がみられる。『風土記』には記されていないが、安山閣には坊床寺跡、岡の原廃寺跡、古御堂の寺跡があり、塔の心礎、布目瓦が出土していることから氏寺の建立が早い時期から行わされたと考えられる。この時代における古代山陰道の手間割は伯太町安田園にあった関所で、今でも閑・閑山などという地名を残している。平安時代になると安来荘、母里莊は京都の賀茂神社の荘園に、更に安田荘は石清水八幡宮の仕置となる。

一般的に中世といわれているのは、鎌倉幕府の成立(1192 年)から室町幕府の滅亡(1573 年)までの 380 年間であり、政権の所在地によって、鎌倉、南北朝、室町と 3 時代に分けることができる。伯太町にあるシアケ遺跡(1)は鎌倉時代の山城跡である。この時代は貴族に代わって武家が支配するようになつた時代である。「承久の乱」の後は戦功のあった武士に地頭職を与えた。出雲では 7 箇所の地頭補任地があるが、その中に安田荘がある。任命された地頭の中に江戸四郎太郎重持の名前が見えるが、地頭は從來の慣行を破ることが多く、幕府の裁定により「安田荘」の南側は領家清水谷分と北側は地頭分とに分かれることになった。この結果により莊園領主側の収益は大きく後退し、地頭側は大きく前進する結果となつた。しかし、こうした支配もその後も長期安定したものではなかった。「元弘の変」(1331 年)において、後醍醐天皇は捕らわれの身となり、隠岐の国に配流となった。翌年の 3 年 2 月には隠岐島を脱出し、名和凜に上陸した。そして、名和凜に勢力をもつ名和長年の加勢によって船上山に兵を上げた。この挙兵を知った出雲守護の塙谷高尚、その一族、富士名義綱などの近國の武士は船上山にはせ参じた。後醍醐天皇にまつわる伝承として、伯太町内の「安田の闇」を通過され、現在の未明集落のあたりにこられた時に、ほのぼのとした夜明けを迎えた。後醍醐天皇は「ほのかに明けたり」と言われたことから未明(ほのか)の地名がついたと言われている。伝承されている後醍醐天皇の鎌倉幕府討伐の戦いが進められていたとき、安田荘に動搖が起きている。今までの地頭の江戸氏が領地を取り上げられ、代わって別の地頭が補された。後醍醐天皇はいったん勝利を収めて中央政権を打ち立てたが、この間に「安田荘」は光守僧都という人物に横領されてしまった。南北朝の動亂に乗じて「安田荘」の横領をもうろんだのである。中央では足利尊氏の挙兵から建武 3 年(1336 年)に帰ってきていている。南北朝の争いは、この山雲の国も巻き込んで、安米・能義の地も戦に巻き込まれたが、南朝勢力と北朝勢力が相対しながら、中央における南朝勢力の衰退と共に出雲の南朝勢力も消滅していったと考えられる。江戸氏の弟とみられる人物は建武 5 年(1338 年)南方神領も横領してしまったために足利氏からお互いに違乱のないようにと採決されている。応永 13 年(1406 年)室町幕府の斯波義重は、南「安田荘」について備王守の開拓を退けて、難掌に返させるように守護である佐々木氏に命じている。このように鎌倉時代から室町時代にかけても社会は在地領主、荘園、地頭などの関係から不安定な要素を含んでいた。

応仁の乱(1463 年)以降になると各地で乱が勃発し、城郭、砦が方々に多く築かれるようになり、戦国時代へと続き、各地の土豪は尼子と毛利の戦いへと巻き込まれ、白鹿城の落城で宍道湖岸が毛利方になつた。輸送手段も弓ヶ浜から富田城の陸路に代わるために、伯太地域の安田要害山城、亀遊山での戦いが激しくなっていく。

近世になると母里藩となる。この時代には伯太地域の山間部においてたら製鉄が行われたが、シアケ遺跡(1)の伯太川をさむ西側には金屋子神社がある。

第3章 シアケ遺跡の調査

第1節 調査の概要

1. 構造

シアケ遺跡は地表面観察においても曲輪と考えられる削平地、土壘、堀など人工の凹凸が明瞭に確認できる山城跡である。城域は南北に蛇行する伯太川を直ぐ眼下に望み、南西—北東方向に先細り気味に形を変えながら延びる尾根上先端部に展開する。

全体の構造は尾根上最高所に主郭と考えられる曲輪（標高約80m）とやや高い台状部（標高80.6m）を設け、その北側から南側にかけて幅狭な削平地（付属的な機能をもつ帶曲輪）を一段下って主郭に沿う形で「?字形」に隣接させている。その為、広義的には複郭とみなすことができる。主郭の南側に続くやせ尾根上には主郭との最大比高差約8mを測る第1堀切、さらに南方に最大比高差約5mを測る第2堀切と2条の堀切が尾根の鞍部を切断する形で東西方向に設けられている。

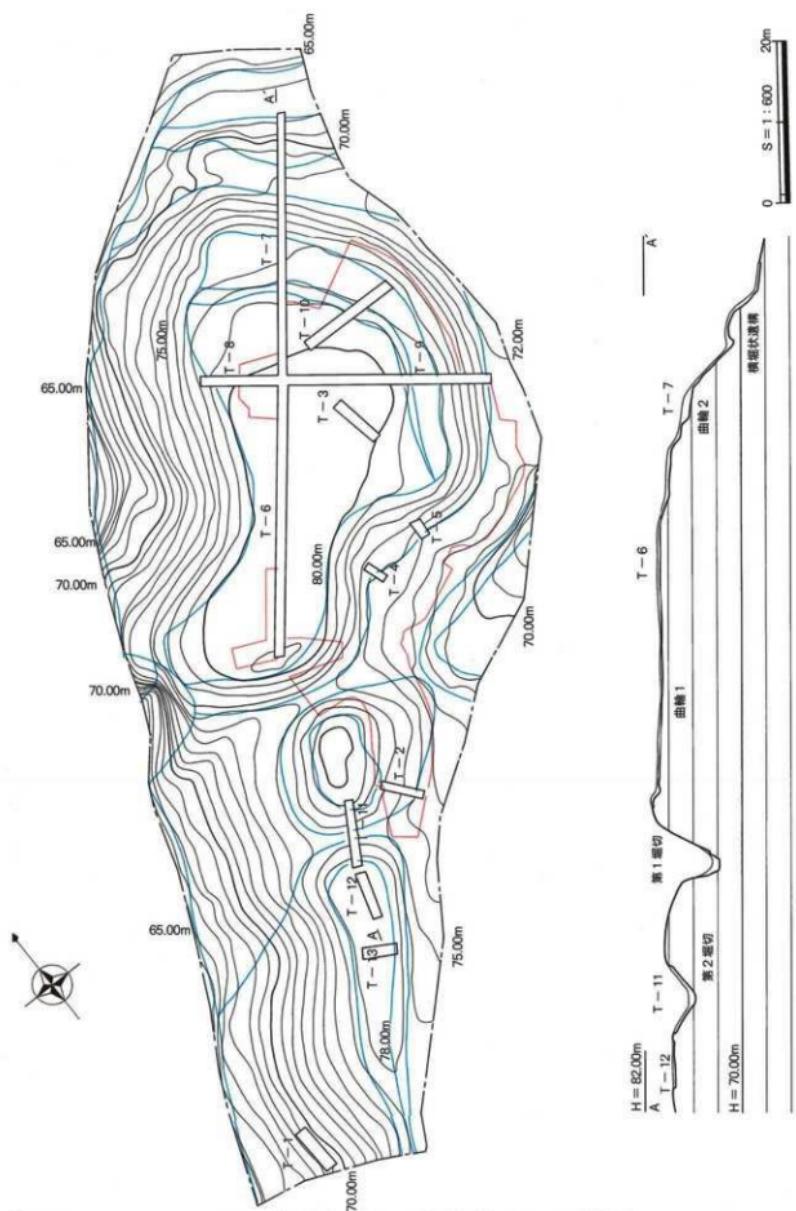
第1堀切の東端からは主郭との最大比高差約7mを測る横堀状造構を帯曲輪に沿う形で巡らしているが、南東側で一旦終焉し、やや東寄りから再び派生し、規模を大きくながら北側で終焉している。

2. 遺構面

トレンチ（第1～13トレンチの計13本）及び面検出調査の結果、遺構面としては、重複した状態で表土下の整地された造成面とその下の地山面の2面が確認された。前者では主に帶曲輪状造成面において掘立柱建物跡、柵列、段状遺構、溝状遺構、土坑、柱穴などの遺構が重複した状態で検出された。後者では帶曲輪部において段状遺構、溝状遺構、土坑、柱穴などの遺構が検出された。なお、主郭部は地山掘削であり、ここからは柱穴、溝状遺構、土坑が検出されている。また、やせ尾根鞍部や斜面部で検出された堀切や横堀状遺構は地山掘削により造成されている。その他に主郭部北側の台状部からは古墳の痕跡が確認された。

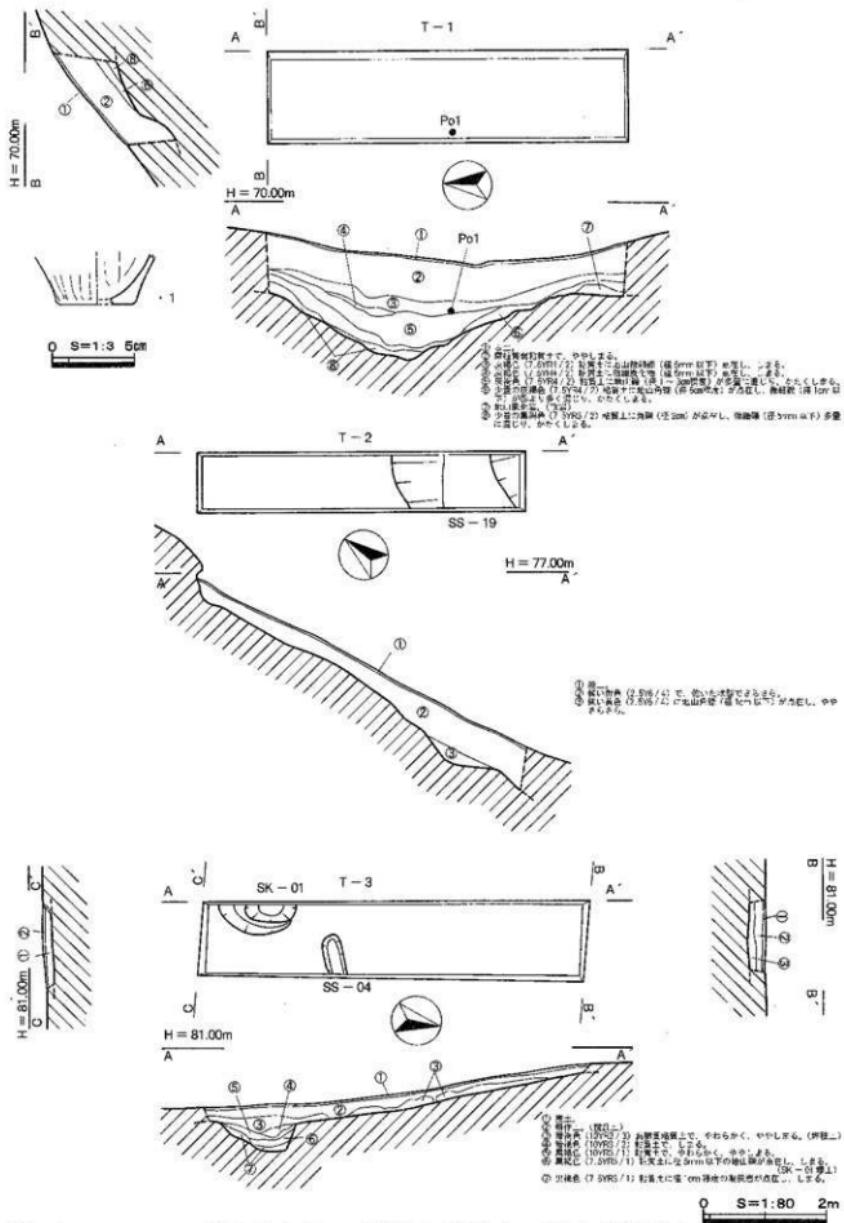
トレンチ番号	規模(m)	検出遺構	出土遺物	トレンチ番号	規模(m)	検出遺構	出土遺物
T-1	5.90×1.50	—	弥生土器	T-8	9.40×1.20	SX-01 前方部・ピット・段状遺構	—
T-2	5.40×1.00	段状遺構	—				
T-3	6.30×1.30	土坑・溝	—	T-9	25.00×1.20	段状遺構	—
T-4	2.70×1.00	段状遺構	—	T-10	12.64×1.30	段状遺構	須恵器
T-5	2.60×1.00	—	—	T-11	8.30×1.10	堀切	—
T-6	32.86×1.20	ピット・土壘	—	T-12	5.90×1.30	—	—
T-7	32.34×1.20	集石・ピット・横堀状遺構	—	T-13	4.40×1.40	溝・土壘状遺構	—

挿表2 トレンチ計測表



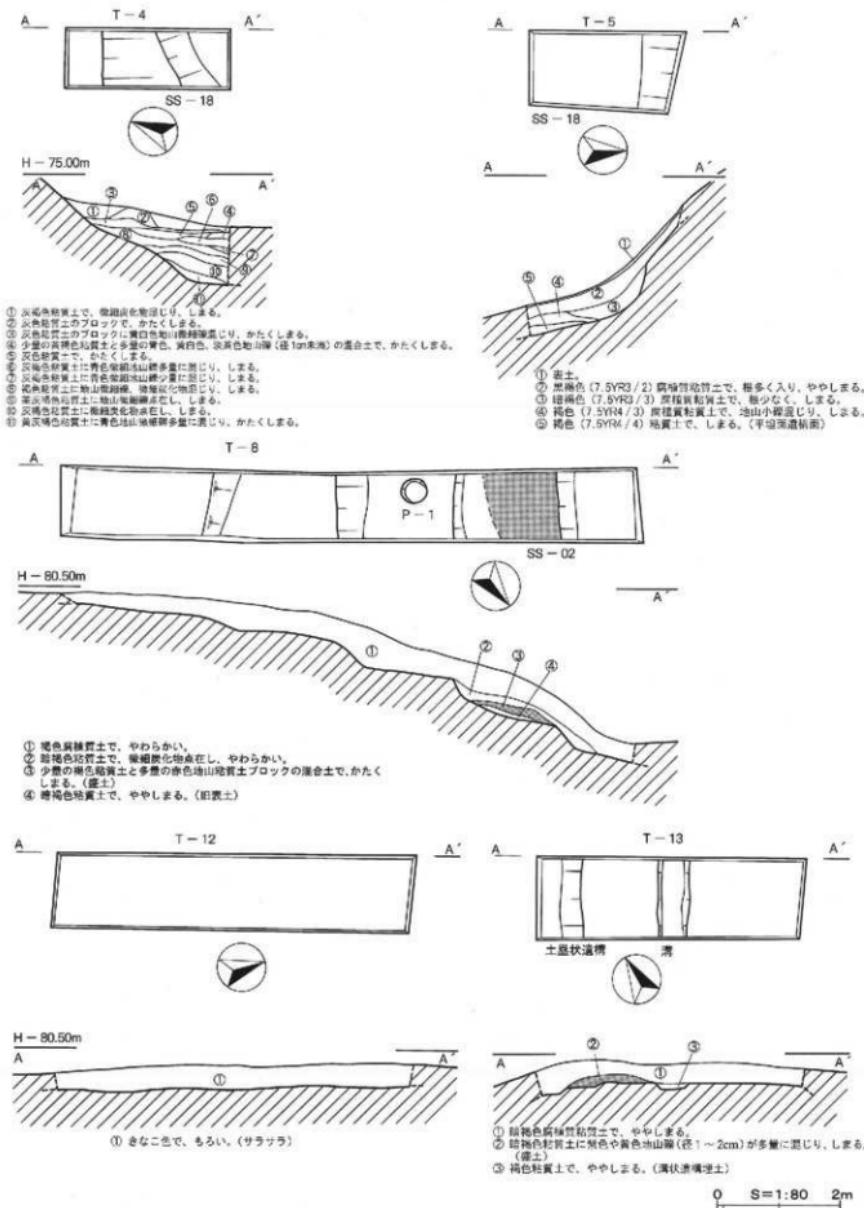
挿図 3

シアケ遺跡調査前地形測量図並びにトレチ位置図



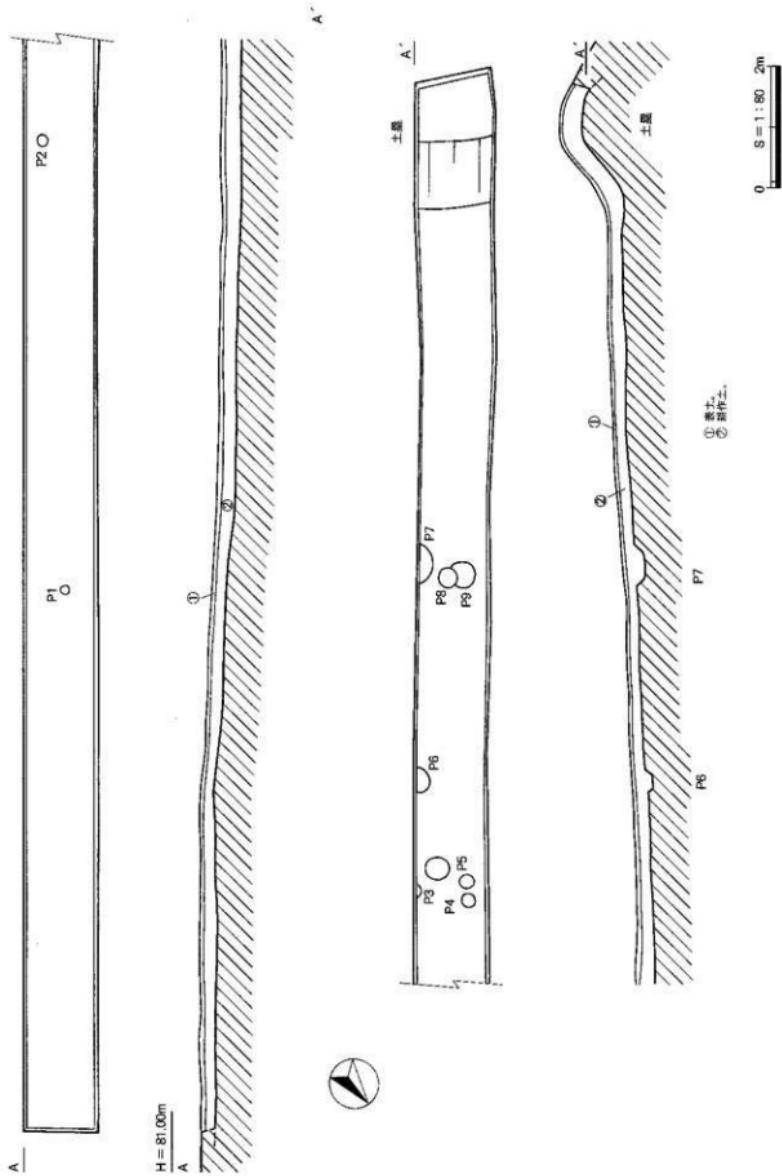
挿図4

第1・2・3トレンチ遺構図、第1トレンチ出土土器実測図



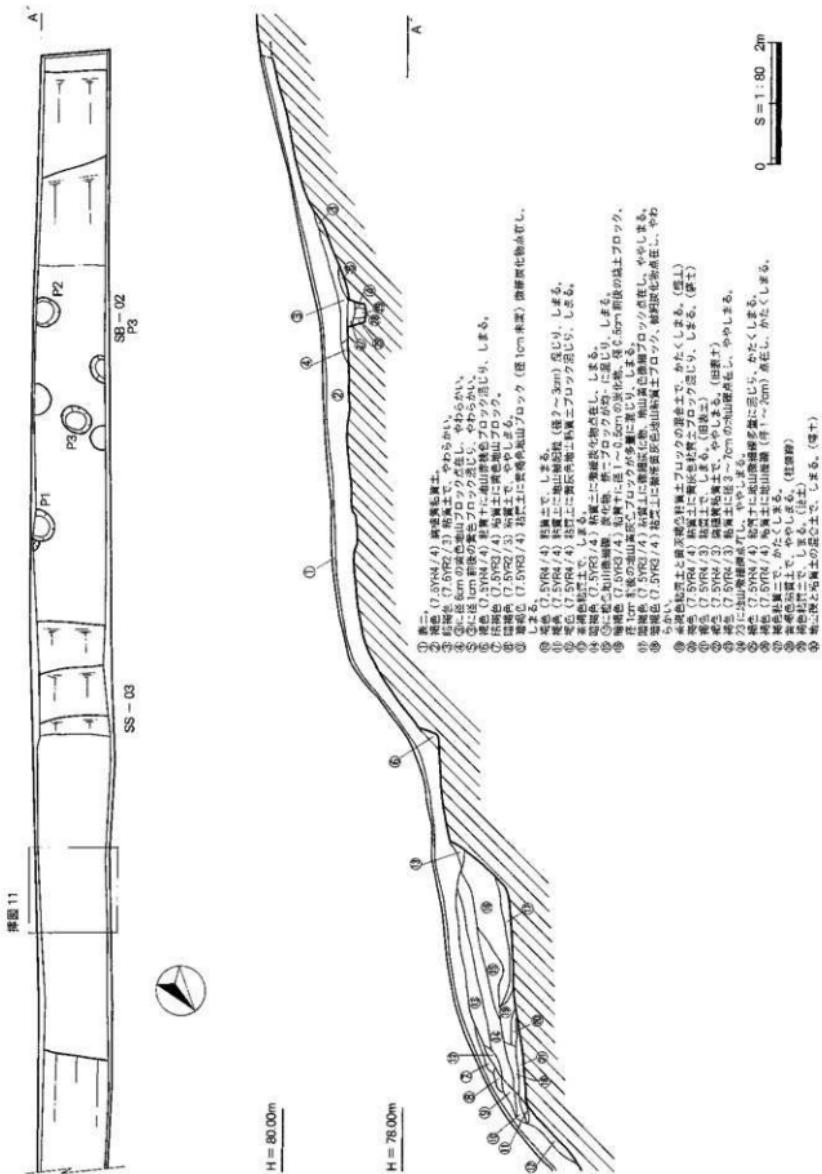
挿図5

第4・5・8・12・13 トレンチ遺構図



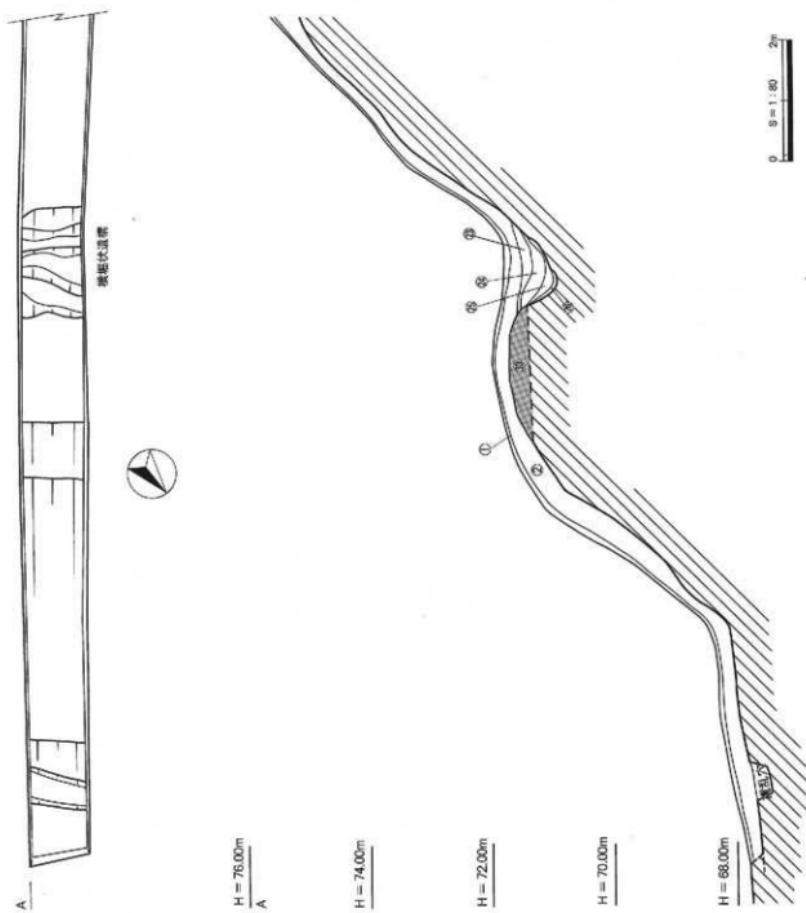
挿図 6

第 6 トレンチ遺構図



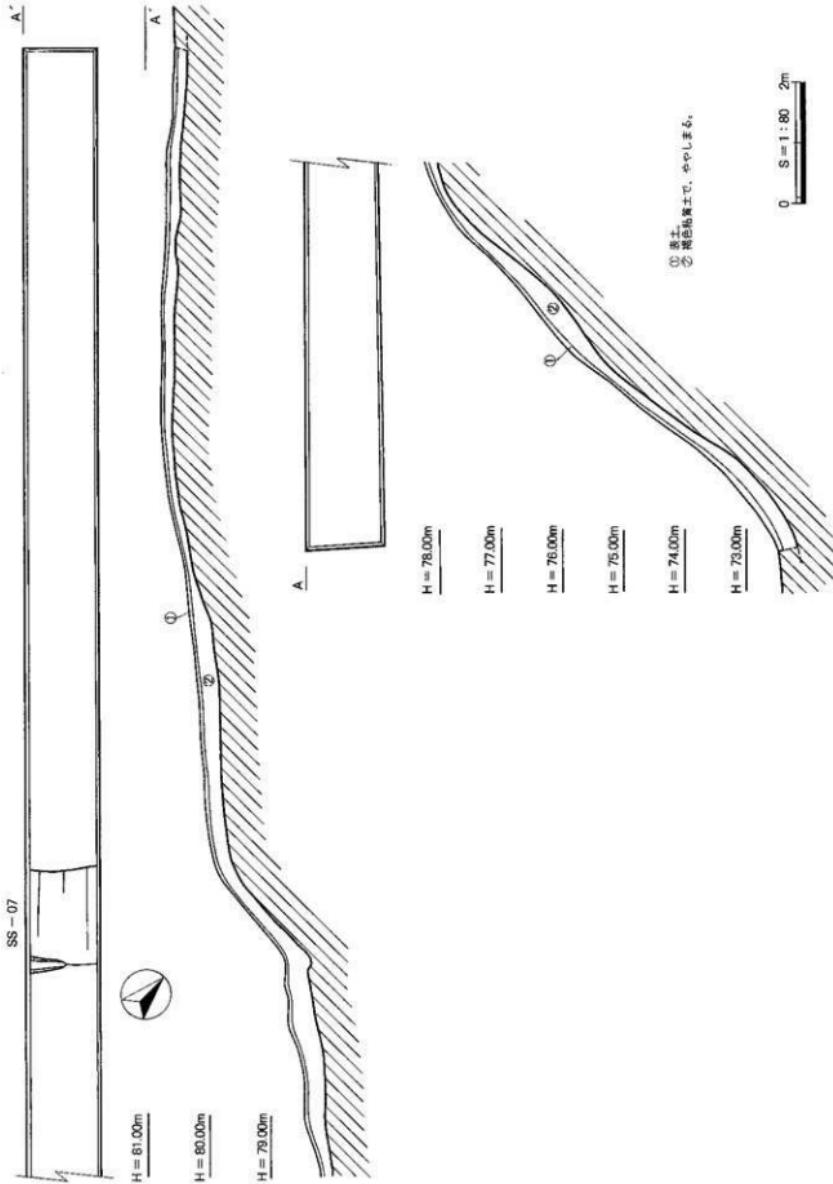
挿図 7

第7トレンチ遺構図(1)



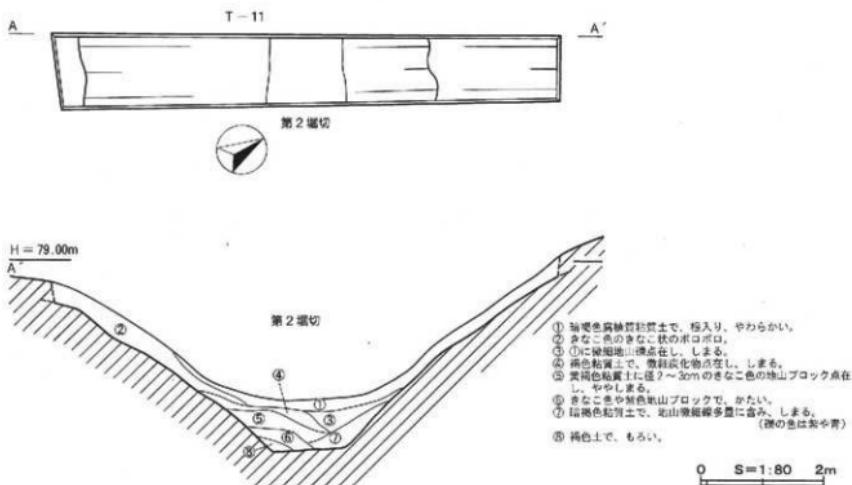
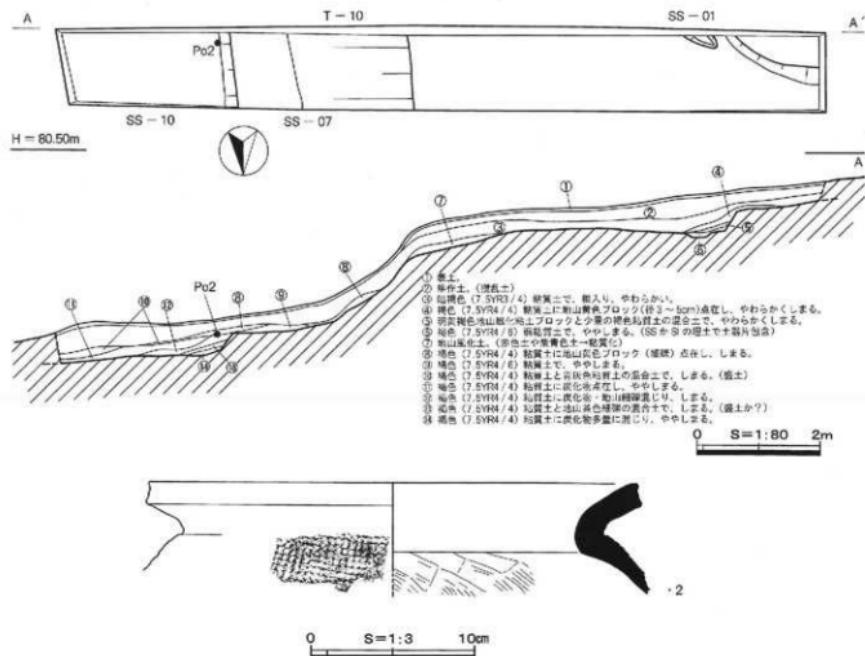
拂図 8

第 7 トレンチ遺構図 (2)



挿図 9

第 9 トレンチ遺構図



挿図 10

第 10・11 トレンチ遺構図、第 10 トレンチ出土土器実測図

第2節 曲輪

曲輪は2ヶ所で確認された。(ここでは便宜上、曲輪1、曲輪2と呼称する。)

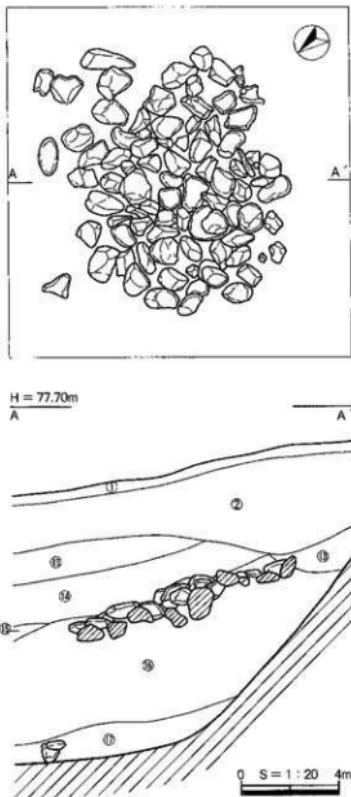
曲輪1（挿図12）

曲輪1は立地、規模等から主郭と考えられ、尾根上先端部の最高所に位置し、南北方向長さ約40m、東西方向幅約7~20mを測るやや歪な平面ひょうたん形を呈する。南北側は平坦に地山を削平し、北側にはやや高い台状部を設けている。なお、この台状部は緊急調査区域のため時間の制約等からピット等は検出できなかった。標高は前者が約80m、後者が約80.6mを測る。面積は約520m²と推定され、そのうち調査を行ったのは緊急調査を含めて東側半分以上の約380m²である。

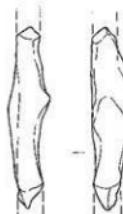
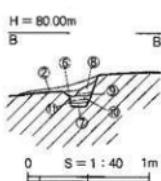
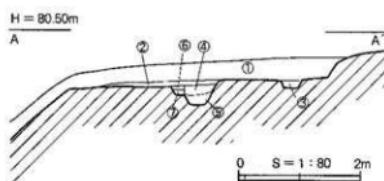
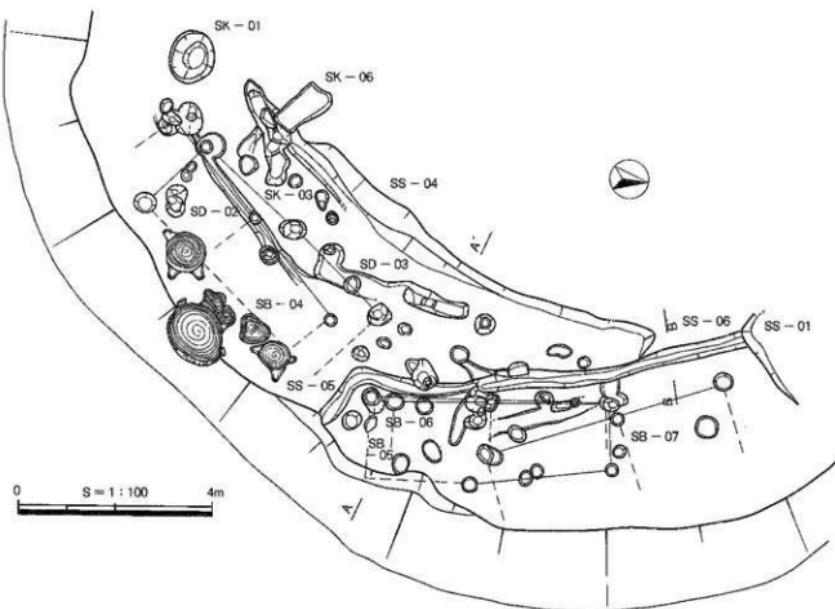
曲輪1の周囲をみると南端部には橢円形を呈する土壠（東西方向長さ推定9.0m、南北方向最大幅推定1.8m、高さ約0.7m）を地山掘削にて造成し、外方には深さ8mを測る第1堀切を付設している。南西側から北側一帯はかなりの急斜面となっており、容易には攻め込み難い要害となっている。なお、曲輪1からは南側平坦面で12個のピット、溝状造構1本、土坑5基、台状部の外方北側から東側にかけて段状造構を伴う掘立柱建物跡7棟などが検出されたが、これらのうち、同時期と推定されるものは曲輪1のピット群、掘立柱建物跡7棟などと推定される。

曲輪2（挿図13）

北側から南東に一段下って曲輪1に沿う形で帶状の曲輪2を巡らしている。その外方も西側ほどではないものの、急斜面となっており、容易には進入し難い要害を呈している。この曲輪2は幅3~1.5mの平坦面で、さらに外方に一段下った状態で北側から南東側にかけてやや幅狭な（幅4~1.5m）平坦面を造成している。したがって曲輪1からみると二段に階段状に段が付く形態をとるが、ここではこれらを含めて曲輪2と呼称する。曲輪2からは平坦面で同時期と推定される掘立柱建物跡6棟、段状造構5基、溝状造構2本、土坑10基、側壁際で櫛列1本などが確認された。

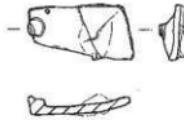


挿図11 第7トレンチ集石状況図



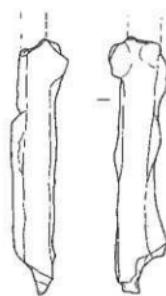
F1

- ① 暗褐色土で、ややしまる。
- ② 黄褐色土に黒褐色化水、堅硬地山質混じり、しまる。
- ③ 黄褐色土に黒褐色化物点在し、しまる。(SD - 02 埋ニ)
- ④ 黑褐色土に地山質混跡点在し、しまる。
- ⑤ 黑褐色土質土に黒褐色化物点在し、しまる。
- ⑥ 黑褐色地山質土に黒褐色化物点在し、ややしまる。
- ⑦ 黑褐色地山質土と多量の樹皮色地山質土ブロックの混合土で、かたくしまる。(SD - 03 埋ニ)
- ⑧ 黄褐色土質土に少量の地山質混じり、しまる。(SD - 04 埋ニ)
- ⑨ 黄褐色土質土に少量の地山質混じり、しまる。(SD - 05 埋ニ)
- ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 同じ洗き上。(盛土)



F3

0 S = 1: 2 5cm



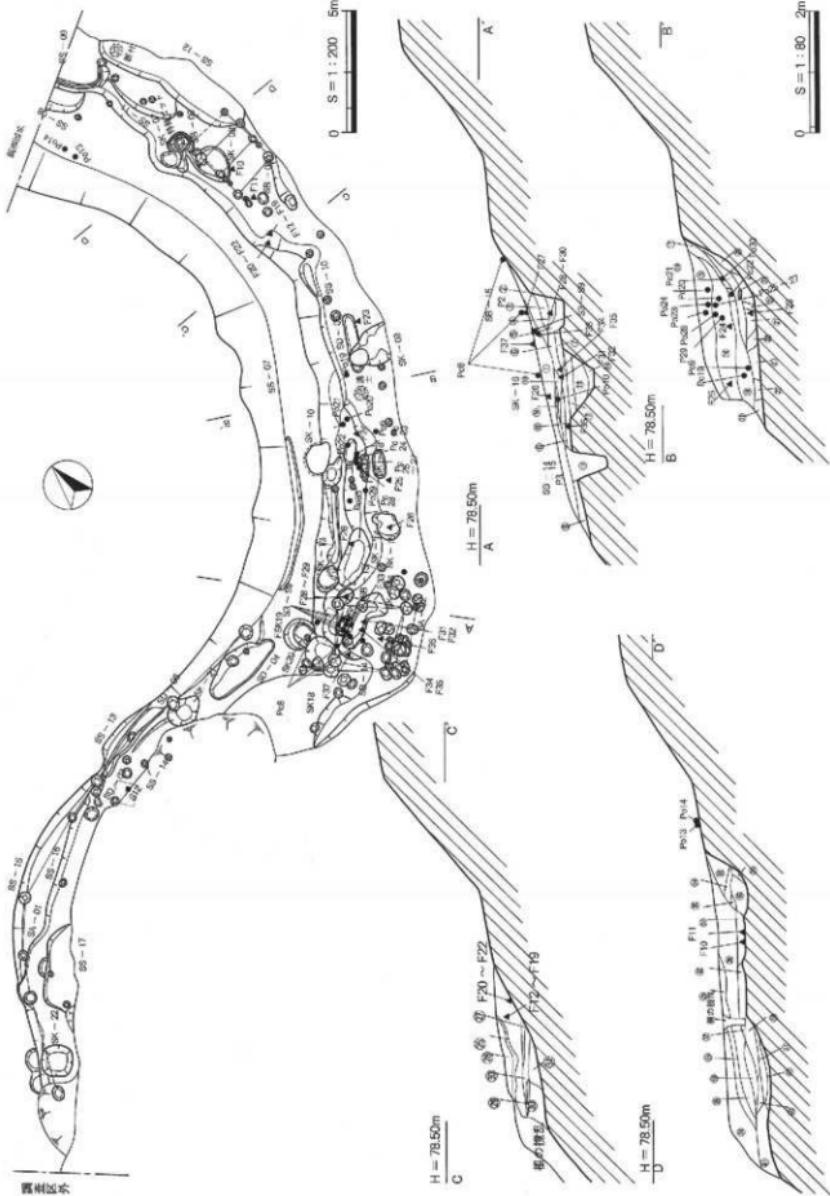
F4



0 S = 1: 1 2cm

挿図 12

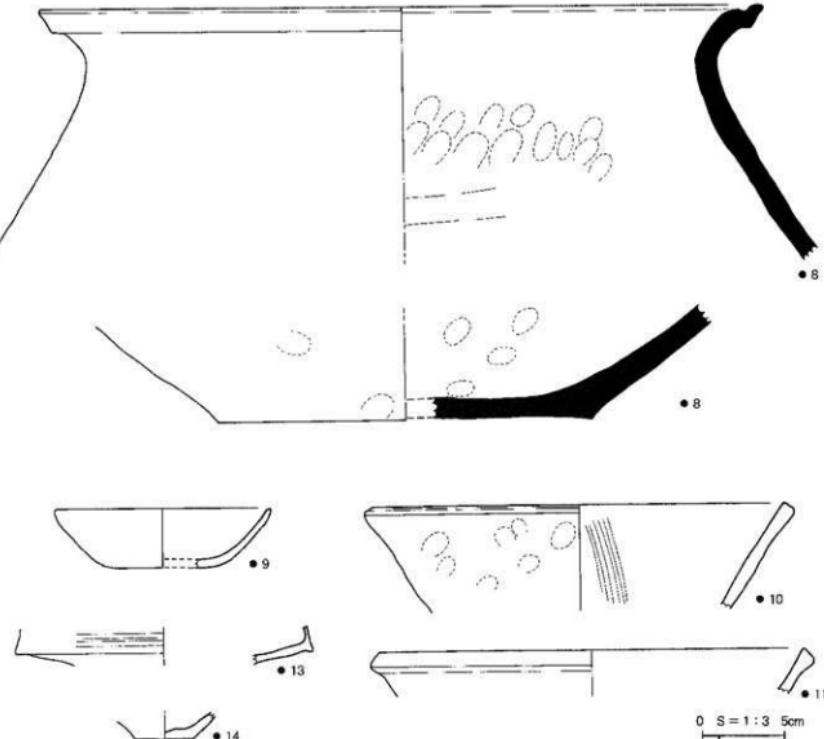
曲輪 1 北東側遺構図・出土遺物実測図



挿図 13

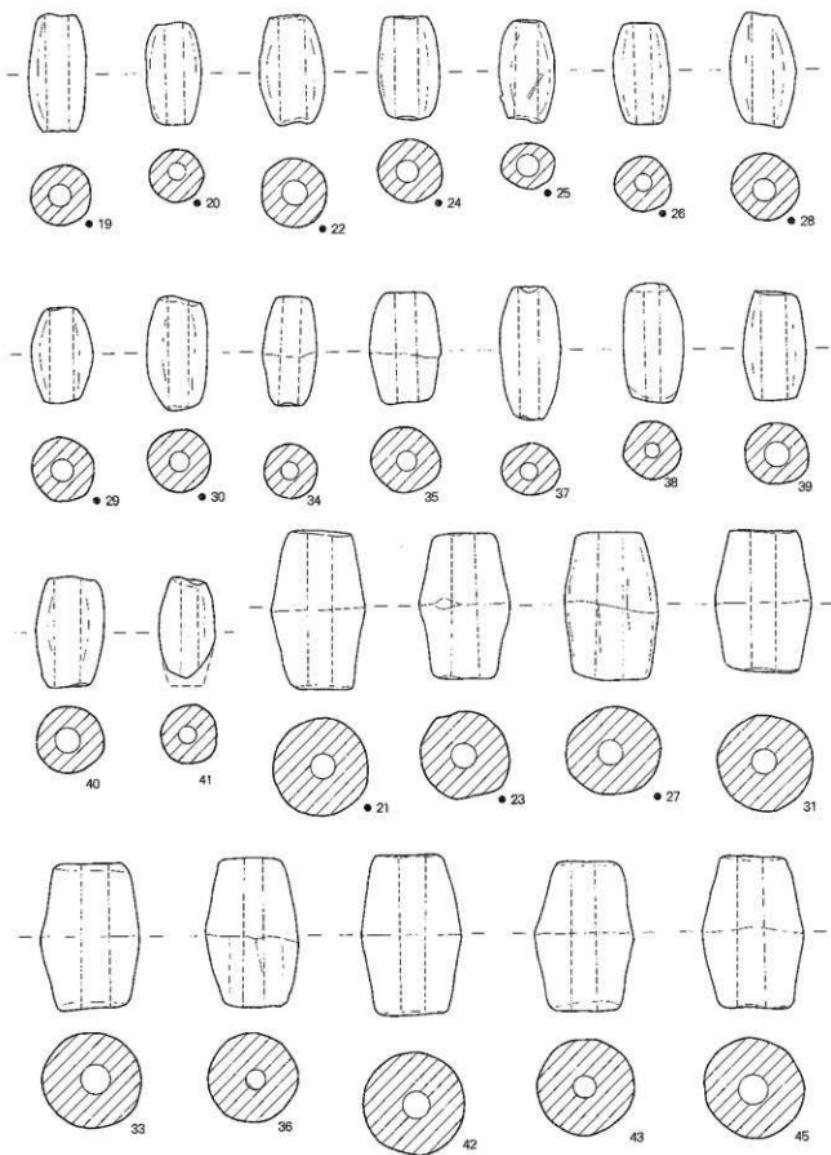
曲輪2全体遺構図

- ① 暗色粘土に黄白色山地山ブロック(径1～3cm)が点在し、微細炭化物あり。します。
 ② 暗色粘土に黄白色山地山微細炭化物混じり、ややしまる。
 ③ 黄褐色粘土に多量の黄白色紫色の粘土ブロック(径1cm未満)の混合土で、やや多い。
 ④ 少量の黄白色粘土に茶色地山ブロックの混合土で、しまる。(ビット土)
 ⑤ 黄白色地山に粘土点在し、妙川ブロック(径1～3cm)とやや大きい。(ビット妙川)
 ⑥ 黄白色、茶色地山に粘土点在し、しまる。(底二)
 ⑦ 黄色地山に粘土点在し、しまる。
 ⑧ 黄色地山に粘土点在し、しまる。
 ⑨ 少量の黄白色地山に粘土が混じり、しまる。(底上)
 ⑩ 黄褐色粘土に粘土点在し、ややしまる。(底二)
 ⑪ 各色粘土質土で、微細炭化物、鉄錆斑点有り。黄褐色地山に粘土点在し、もろい。(ビット妙川)
 ⑫ 黄白色地山に粘土点在し、しまる。
 ⑬ 黄色粘土ブロック(径1～3cm)少量と多量の黄白色妙川ブロック(径0.5～8cm)の混合土で、しまる。
 ⑭ 黄色粘土地山で、しまる。
 ⑮ 黄色粘土に黄白色山地山ブロック(径5～8cm)の混合土で、しまる。
 ⑯ 黄褐色粘土(径5～8cm)と黄白色妙川ブロック(径5～8cm)の混合土で、ややしまる。
 ⑰ 黄褐色粘土に妙川地山ブロック、根がよく入り、しまる。
 ⑱ 黄褐色粘土に黄褐色地山地化物、妙川地山ブロック点在し、しまる。
 ⑲ 黄色粘土に妙山地山地化物混じり、かたくしまる。
 ⑳ 黄色粘土に黄白色地山ブロック(径1～3cm)混じり、微細炭化物点在し、しまる。
 ㉑ 黄褐色粘土に黄色粘土地山地化物混じり、やわらかい。
 ㉒ 黄褐色粘土に黄白色地山地化物混じり、しまる。
 ㉓ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。(底二)
 ㉔ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉕ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉖ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉗ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉘ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉙ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉚ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉛ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉜ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉝ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。
 ㉞ 黄褐色粘土に妙山地山地化物混じり、しまる。



挿図 14

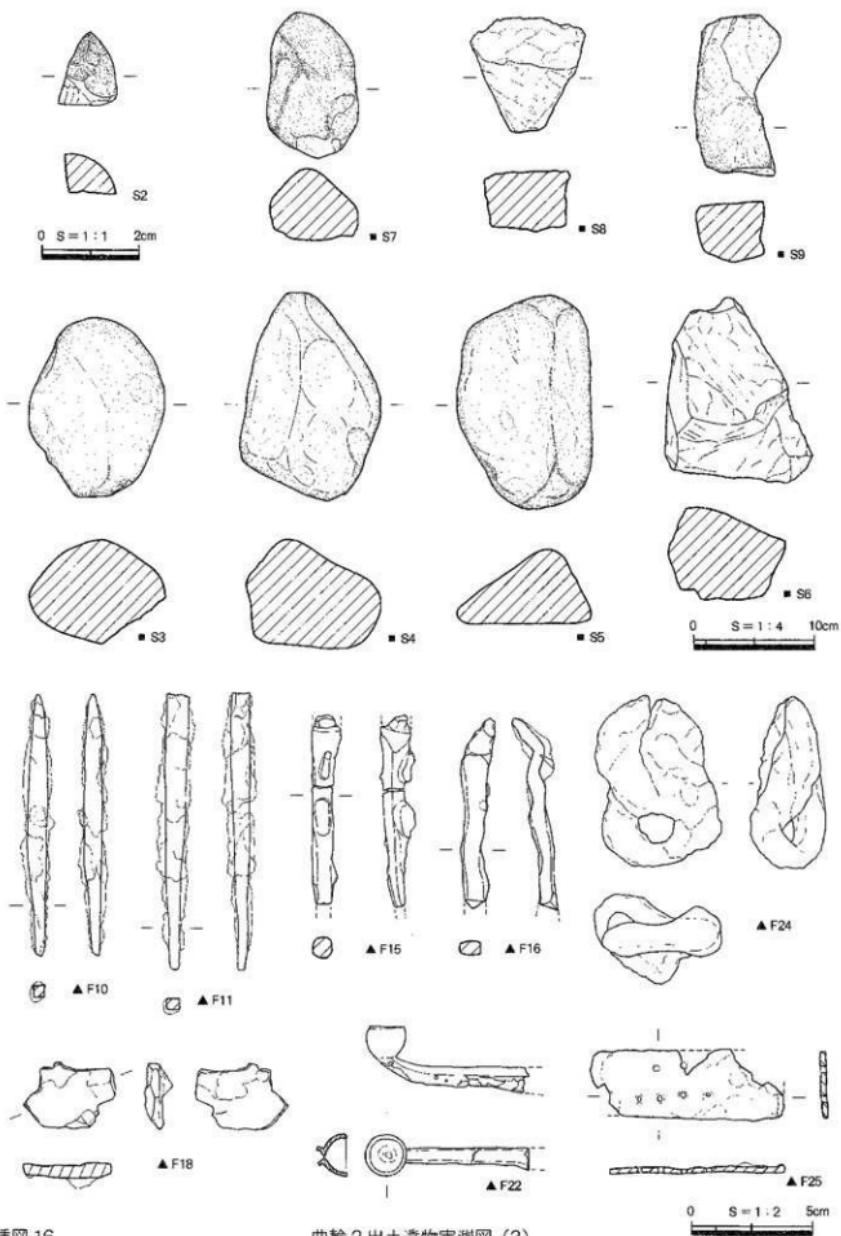
曲輪 2 出土遺物実測図 (1)



挿図 15

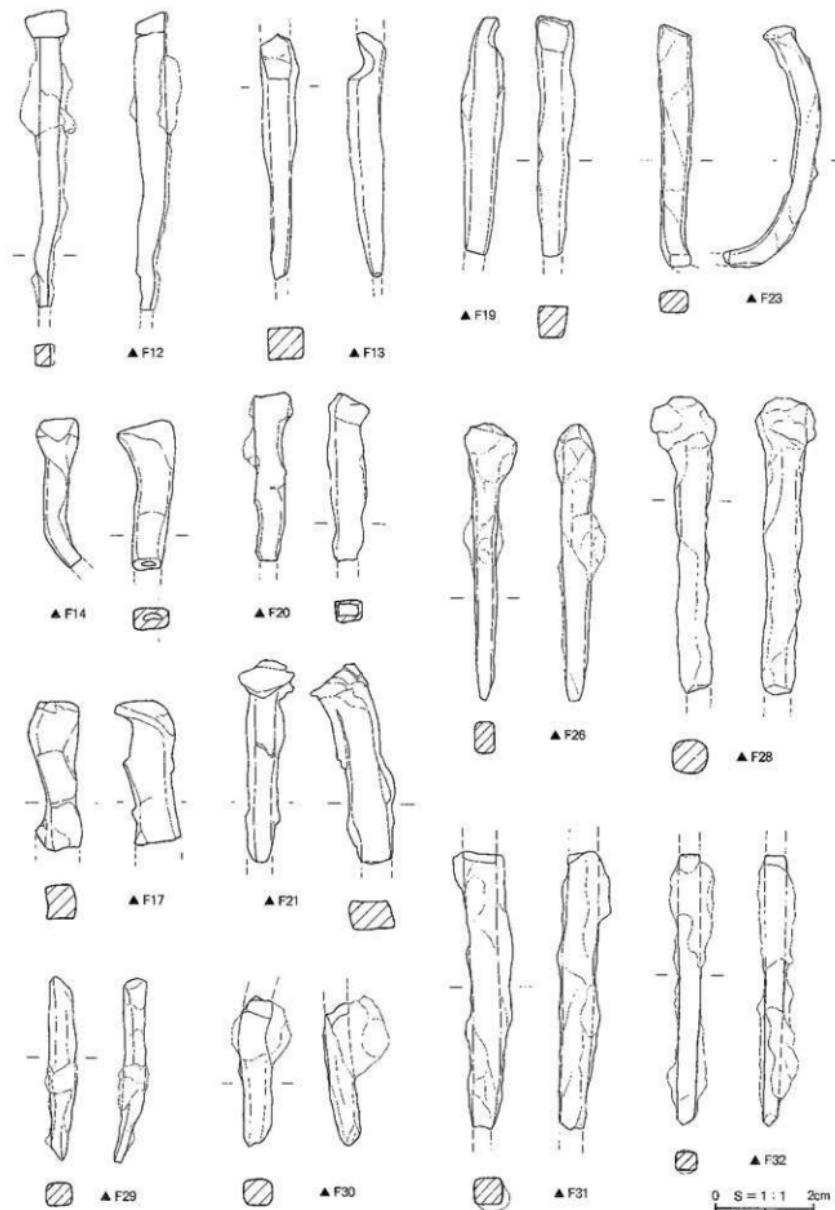
曲輪 2 出土遺物実測図 (2)

0 S = 1 : 1 2cm



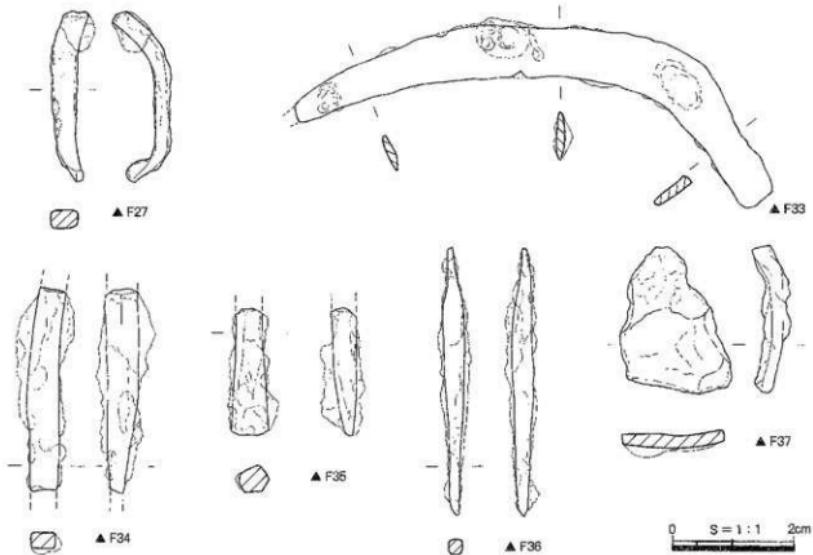
挿図 16

曲輪2出土遺物実測図(3)



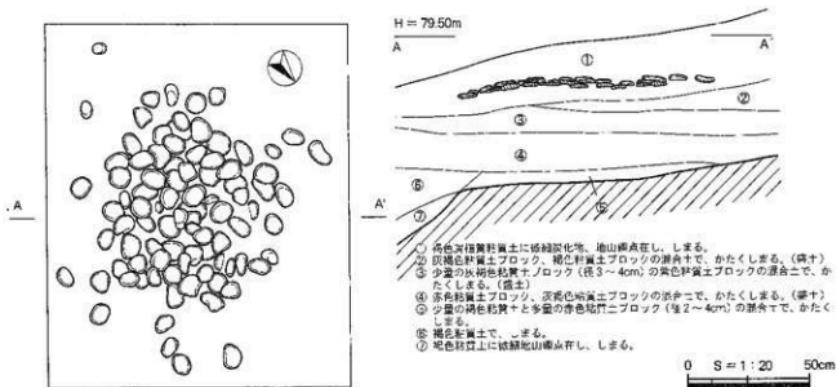
挿図 17

曲輪 2 出土遺物実測図 (4)



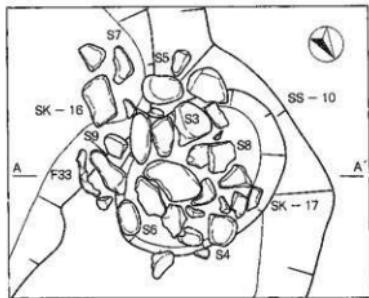
挿図 18

曲輪 2 出土遺物実測図 (5)

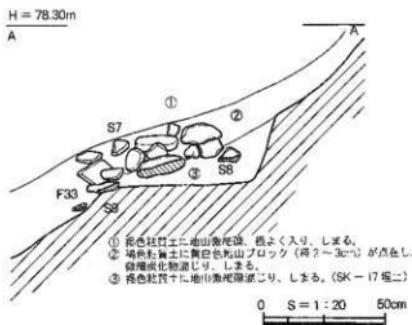


挿図 19

玉砂利出土状況図



挿図 20



第 17 土坑内集石状況図

第3節 段状遺構、柵列

段状遺構は曲輪1の北西側で1基、北側で2基、東側で3基。曲輪2に11基と多数みられ、他に横堀状遺構の内方に1基、第2堀切の北東側で1基、計19基が確認された。なお、ここでは便宜上、曲輪2を構成する帯状の平坦面をもつ大規模な段についても一括して段状遺構と呼称することにした。そのため、曲輪2と名称が重複するものもある。また、トレンチ調査で確認した段状遺構の中には立地、形態等から連続する同一のものと推定されるものもあるが、便宜上分類して取り扱うこととした。

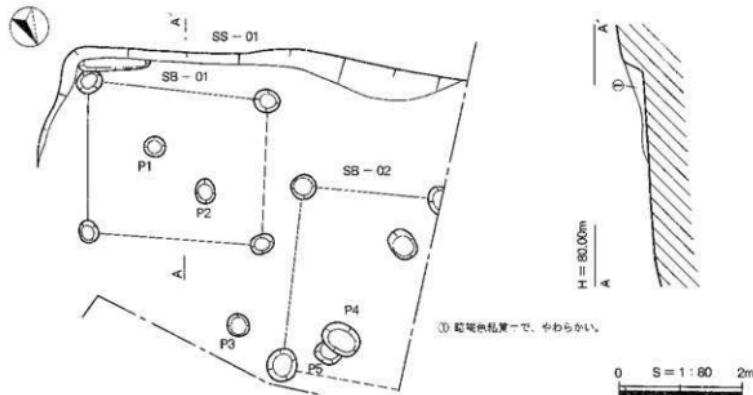
柵列は曲輪1の東側に1本、曲輪2の南側に1本が検出された。

第1段状遺構 (SS-01・挿図21)

位 置 調査区北西側、曲輪1北西端に位置し、底面の南東側でSS-11を切り込んでいる。底面の平均標高は78.20mを測る。

形 態 等高線に沿うような形で、緩斜面の上側をJ字状に掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.35mを残し、造成面の規模は現況で長辺(東西長)6.60m、短辺(南北長)約5.00mを測る。南東側の壁際で長さ2.20m、幅0.18m、深さ0.05mを測る側溝が1本検出された。平坦面には壁面に平行してSB-01、SB-02と2棟の掘立柱建物跡が造られており、関連施設と思われる。埋土はやわらかい褐色粘質土の上層である。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。



挿図21

第1段状遺構図

第2段状遺構 (SS-02・挿図5)

位 置 調査区の北西側に位置し、第8トレンチ内で確認された。底面の平均標高は78.60mを測る。

形 態 等高線に沿う形で、緩斜面の上側を掘り込んで二段掘りとし、それぞれに平坦面を造成している。掘り込み壁高は上段が0.45m、下段が0.32mを残す。規模は東西長がそれぞれ1.50m、1.10mを測り、後者には盛土を施し、底面を平坦に整えている。また、上段の底面にはP1(42×41-32)cmが掘り込まれている。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第3段状遺構 (SS-03・挿図7、11)

- 位 置 調査区の北側に位置し、第7トレンチ内で確認された。底面の平均標高は77.60mを測る。上側にSS-01が隣接する。
- 形 態 等高線に沿う形で、緩斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.30mを残し、造成面の規模は南北長5.20mを測る。底面は北側約2/3の範囲で盛土を施し、北端のいわゆる石切部には4層の盛土を小さく重層状に積み上げている。また、盛土下からは、さらにも深く掘り込まれた段が検出された。掘り込み壁高は最大で1.02mを残し、平坦に造成された底面の規模は南北長3.80mを測る。この底面には中央からやや北寄りのところに盛土(⑩・⑪)を台形状(上面0.60m、底面0.90m、厚さ0.32m)に積み上げ、断面形で見る限りでは十星状に敷えている。埋土は⑫～⑯の5層が自然堆積の様相でみられ、⑬・⑭・⑮・⑯層南側には1.15m×1.00mの範囲で大小様々な亜円礫や角礫(大きいもので55cm、小さいもので7cm)が集石した状態で検出されている。
- 時 期 造物が全く山上しなかったため、時期は不明である。なお、築造過程をみると、当初谷側に深く段状に掘り込み、これが廃棄された後、山側に向かって大きく造成面の規模を拡大している様子が窺える。

第4段状遺構 (SS-04・挿図12・図版7、17)

- 位 置 調査区の北東側、曲輪1の北東側に位置し、底面の平均標高は79.70mを測る。南端にS-K-06が、東側にSS-06がそれぞれ切り込んだ状態で造られている。
- 形 態 等高線に沿う形で、緩斜面の上側日次1号墳の東側填丘部を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.36mを残し、造成面の規模は長辺(南北長)約7.00m、短辺(東西長)3.30mを測る。北西端の壁際で長さ1.40m(検出面)、幅0.36m、深さ0.07mを測る側溝が残存する。平坦面にはSB-03、SB-04と2棟の掘立柱建物跡が造られており、関連施設と思われる。また、平坦面にはSD-02、SD-03の2本の構状遺構も掘り込まれているが、関連性については現況では言及し得ない。
- 時 期 埋土中からは鉄釘(F1、F2)、板状鉄製品(F3)が出土しているが、時期決定を行う土器類は上師器細片数点のみであり、時期については不明である。

第5段状遺構 (SS-05・挿図12・図版7)

- 位 置 曲輪1の北東側に位置し、底面の平均標高は79.60mを測る。西側のSS-04を切り込み、北側はSS-01により切られている。
- 形 態 等高線に沿うような形で、緩斜面の上側SS-04の底面を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.08mを残し、造成面の規模は長辺(南北長、検出面)7.10m、短辺(東西長)2.20mを測る。側溝下には長さ4.25m(検出面)、最大幅0.45m、深さ0.30mを測る逆台形状の側溝を巡らす。平坦面にはSB-05、SB-06の2棟が重複して造られている。なお、土層断面観察(A-A')をみると、側溝は重複しており、本遺構の側溝は上方に向かって造り直された可能性が高い。
- 時 期 埋土中からは不明鉄(F4)が出土している。時期は不明である。

第6段状遺構（SS-06・挿図12・図版7）

位 置 曲輪1の北東側に位置し、底面の平均標高は79.60mを測る。南西側のSS-04を切り込み、北側はSS-01により切られている。

形 態 等高線に沿うような形で、緩斜面の上側とSS-04の底面を掘り込んで平坦面を造成している。なお、側壁下を巡る側溝の土層断面観察（B-B'）をみると、SS-05側溝と重複しており、本遺構の側溝を付設後、余り時を経ずに、側溝内に盛土をし、やや内方に向かってSS-05の側溝を巡らしている。側溝の規模は最大幅0.35m、深さ0.30mで断面逆梯形を呈す。造成面の規模は長辺（南北長）5.40m、短辺（東西長）2.50mを測る。また、平坦面にはSB-07、1棟が造られており、関連施設と思われる。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第7段状遺構（SS-07・挿図13・図版15）

位 置 曲輪1の北側から東側にかけての東側部分に位置し、曲輪2の一部として取り扱う。底面の平均標高は77.30mを測る。SD-04及びSK-19、SK-20は本遺構の東端に掘り込まれている。

形 態 曲輪1の辺縁部から一段下つて曲輪1の形態に沿う形で、弧状に掘り込んで、平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で1.50mを残し、平坦面の規模は長さ14.80m、幅4.50～1.25mを測る帶曲輪の様相を呈している。

時 期 北側平坦面（第10トレンチ内）で亀山焼（2）が出土している。その他に埋土中から弥生土器（13）、底部（14）が出土している。鎌倉時代（13世紀代）のものと考えられる。

第8段状遺構（SS-08・挿図22・図版15）

位 置 調査区北端、曲輪2北西側にあたり、底面の平均標高は77.10mを測る。

形 態 調査区の関係から全容は不明であるが、上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.38mを残し、下側はSS-09により切り込まれている。検出規模は長辺（南北長）1.20m、短辺（東西長）0.60mを測る。

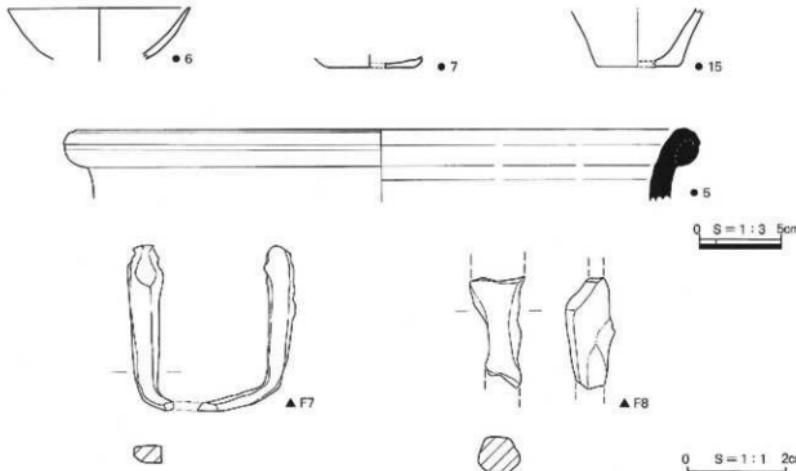
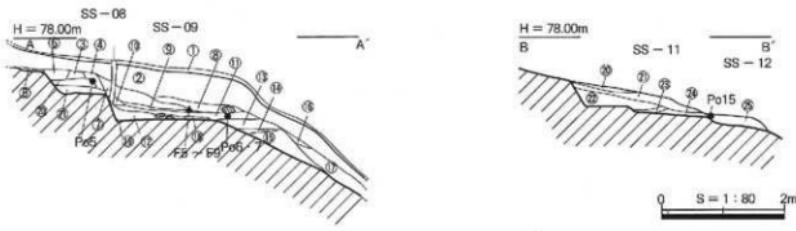
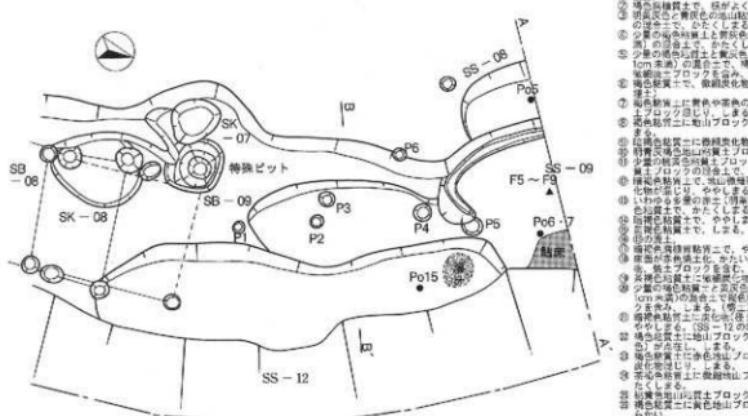
時 期 埋土（鄧脇）中からは備前焼大甕口縁部（5）が出土しており、13世紀代のものと推定される。

第9段状遺構（SS-09・挿図22、23・図版8、15、17、18）

位 置 曲輪2北西端に位置し、底面の平均標高は76.60mを測る。南側にSS-11が接する。

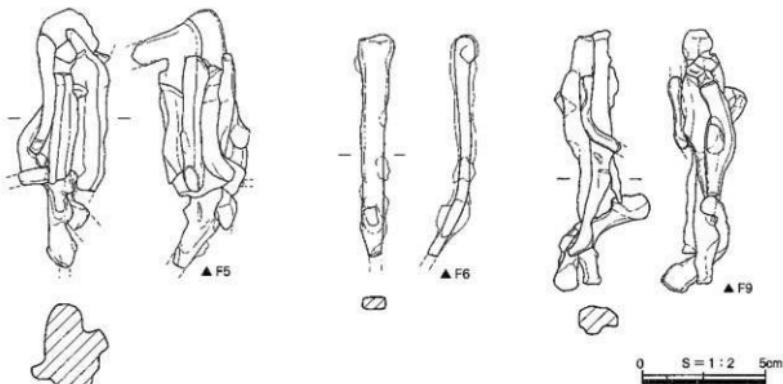
形 態 調査区の関係から全容は不明であるが、上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.90mを残す。側壁下を側溝が検出面L字状に巡り、規模は最大幅0.24m、深さ0.04mを測り、埋土には多量の微細炭化物を含む。底面東端は盛土を施し、平坦に整えている。平坦面の検出規模は長辺（東西長）2.75m、短辺（南北長）2.00mを測る。

時 期 東側底面直上から土師器碗（6）、土師器皿底部（7）、埋土中より鉄釘、棒状鉄製品などの鉄製品（F5～F9）が出土している。直上遺物から14世紀代に入るものと思われる。



挿図 22

第8・9・11・12段状遺構遺構図・出土遺物実測図(1)



挿図 23

第9段状遺構出土遺物実測図(2)

第10段状遺構 (SS-10・挿図13・図版15、16、17、18)

位 置 調査区の北東側から東側に位置し、SS-07に沿う形で下側に一段下って接している帶状の曲輪(曲輪2の一部分)でここでは便宜上第10段状遺構と呼称する。底面の平均標高は北東側で76.70m、東側で77.20mを測る。

形 態 SS-07に沿う形に上側を掘り込んでやや弧状を呈す平坦面を造成している。掘り込み壁高は北東側で最大0.42m、東側で0.90mを残す。平坦面の規模は長さ27.50m、幅4.20～1.05mを測る帶状曲輪の様相を呈している。底面には北東側のやや幅狭な平坦面に掘立柱建物跡SB-08、SB-09の2棟、東側のやや幅広な張り出し部でSB-10、SB-11、SB-12、SB-13の4棟、溝状遺構SD-05、1本、土坑SK-08、SK-09、SK-11、SK-12、SK-14、SK-15、SK-16の7基が造られている。また、側壁にはSK-07、SK-10、SK-13、SK-18が掘り込まれている。なお、土層断面観察A-A'、B-B'、C-C'をみると、それぞれで本遺構掘削後、盛土を施し底面を平坦に整え、造成面を外側へやや拡張している様子が窺え、少なくとも二時期に亘り、本遺構が機能していたものと考えられる。

遺 物 本遺構北東側底面直上(B-B')で土器師皿(9)、埋土中より常滑焼大甕(8)、土器器捏鉢(10・11)、弥生土器壺口縁、底部(13・14)、土錐(19～45)が出土している。鉄製品は、北東側底面直上(D-D')で棒状鉄製品(F10・F11)の他は埋土中より、鉄釘(F12～F32・F34～F36)、鐵鎌(F33)、板状鉄製品(F18・F37)、小札(F25)などが出土している。

時 期 直上遺物から、底面造成後のものは13世紀代と推定される。また、その形態、立地等から山城を構成する曲輪と考えられる。

第11段状遺構 (SS-11・挿図13、22・図版8)

位 置 調査区の北東端、曲輪2北端にあたり、SS-10内に掘り込まれている。底面の平均標高は76.65mを測る。

形 態 上側をやや弧状に掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大0.15mを残す。規模は長辺3.40m、短辺1.30mを測る。底面にはP2(22×20-12)cm、P3(26×24-8)cm、P4(30×30-8)cmがみられる。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第12段状遺構 (SS-12・挿図13、22・図版8、16、17)

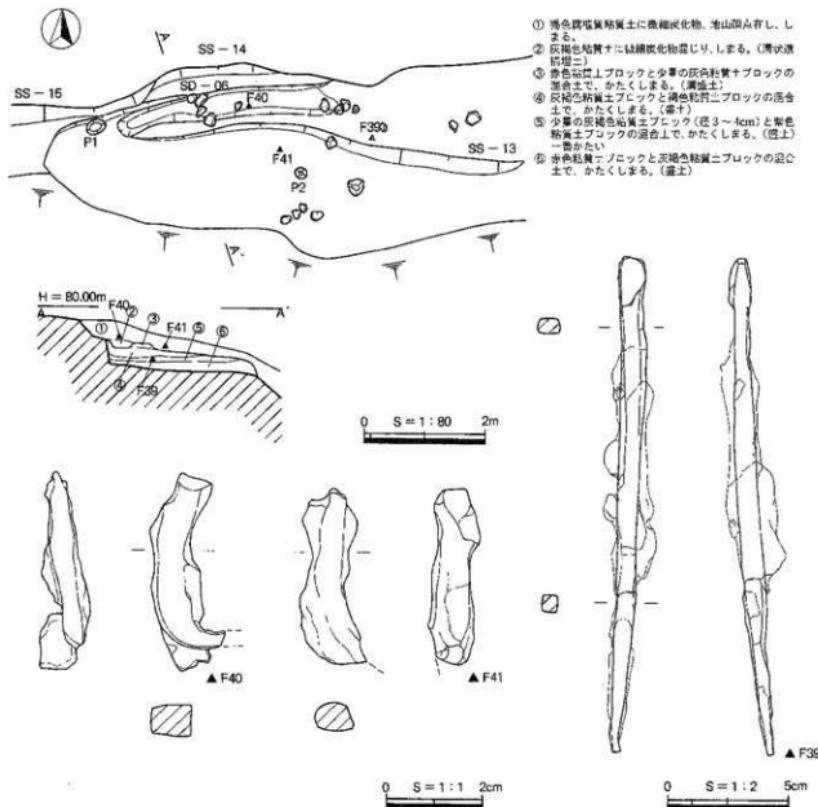
位 置 調査区の北東端、曲輪2北端に位置する。底面の平均標高は76.55 mを測る。南側にSB-09のビットが掘り込まれている。

形 様 上側をやや「コの字」状に掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.20 mを残す。規模は長辺6.70 m、短辺1.30 mを測る。底面北側には橢円形状(55×48)cmの焼土跡が認められる。

時 期 埋土中下位より弥生土器底部(15)が出土しており、弥生時代後期頃のものと推定される。

第13段状遺構 (SS-13・挿図13、24・図版18)

位 置 調査区のほぼ中央に位置し、曲輪1の東端に接する形で掘り込まれている。東側でSS-14



挿図24 第13段状遺構遺構図・出土遺物実測図、第6溝状遺構遺構図・出土遺物実測図

07、西側でSS-15が隣接する。また、下側のあたる南東側は急傾斜の崩れとなっている。底面の平均標高は79.20mを測る。

形態 上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.35mを残し、側壁よりやや外側に東西に延びる溝状構造(SD-06)を付設している。その外側には平坦面が続いており、規模は長辺(東西長)約8.00m、短辺(南北長)1.90mを測る。平坦面にはP1(35×30-15)cm、P2(24×22-10)cmが掘り込まれている。土層断面観察(A-A')をみるとSS-14構築後、盛土を施し、底面を平坦に整えている様子が窺える。

時期 底面直上より鉄製品(F41)が出土しているが、その他には全く出土しなかつたため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。

第14段状遺構(SS-14・挿図24、25・図版8)

位置 調査区のはば中央に位置し、SS-13の下で検出された。底面の平均標高は79.00mを測る。側壁下にはSA-01のP6、P7が、東側底面にはSK-21が掘り込まれている。

形態 上側を掘り込んで平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.60mを残し、側壁よりやや外側に東西に延びる溝状構造(SD-07)を付設している。平坦面の規模は長辺(東西長)4.40m、短辺(南北長)1.40mを測り、P1(28×24-8)cm、P2(26×25-8)cm、P3(26×24-7)cm、P4(21×20-7)cmが掘り込まれている。

時期 塗土中より棒状鉄製品(F39)が出土している。形態、立地条件、土層断面観察から本遺構廃棄後、余り時を経ずにSS-13を構築したものと推定される。中世の山城を構成する施設の可能性が高い。



挿図25

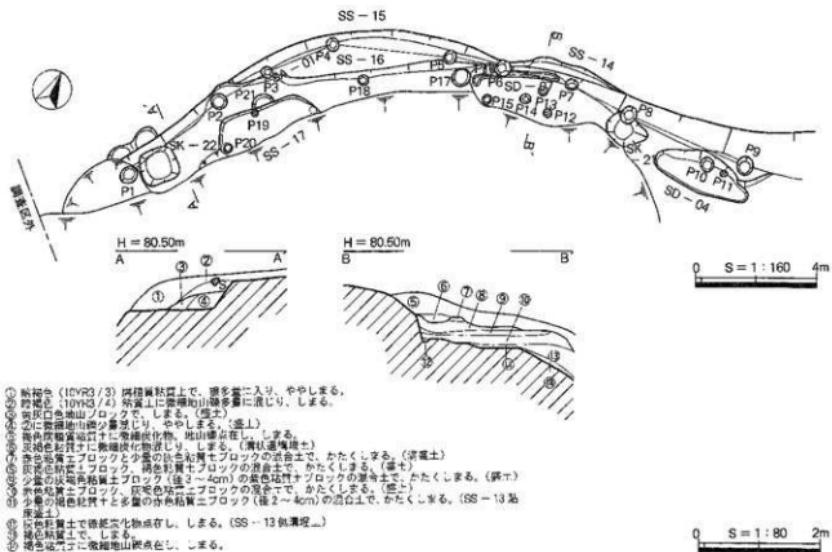
第14段状遺構構造図、第7溝状遺構構造図

第15段状遺構(SS-15・挿図26)

位置 調査区中央やや南西寄りに位置し、曲輪1の東端に接する形で掘り込まれている。北側でSS-14、東側～南側でSS-16が隣接する。底面の平均標高は79.70mを測る。

形態 上側を弧状に掘り込み平坦面を造成している。掘り込み壁高は0.30mを残す。平坦面の規模は長辺(南西-北東長)6.40m、短辺(北西-南東長)1.20mを測る。なお、壁際にはSA-01のピットが掘り込まれている。

時期 遺物が出土しなかつたため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。



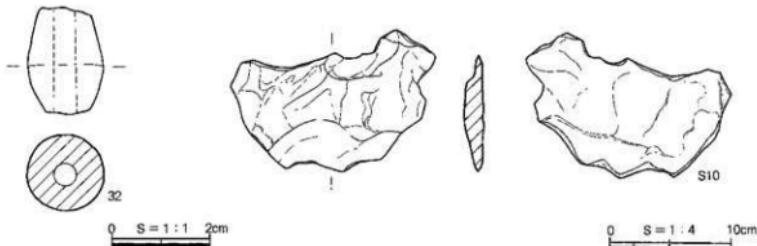
挿図 26

第 15 段状遺構遺構図

第 16 段状遺構 (SS-16・挿図 27, 28・図版 16, 17, 18)

位 置 調査区中央から南西寄りに位置し、曲輪 1 の東～南東端に一部分が接する形で掘り込まれている。北東側で SS-14、北側で SS-15 が隣接する。底面の平均標高は 79.55 m を測る。

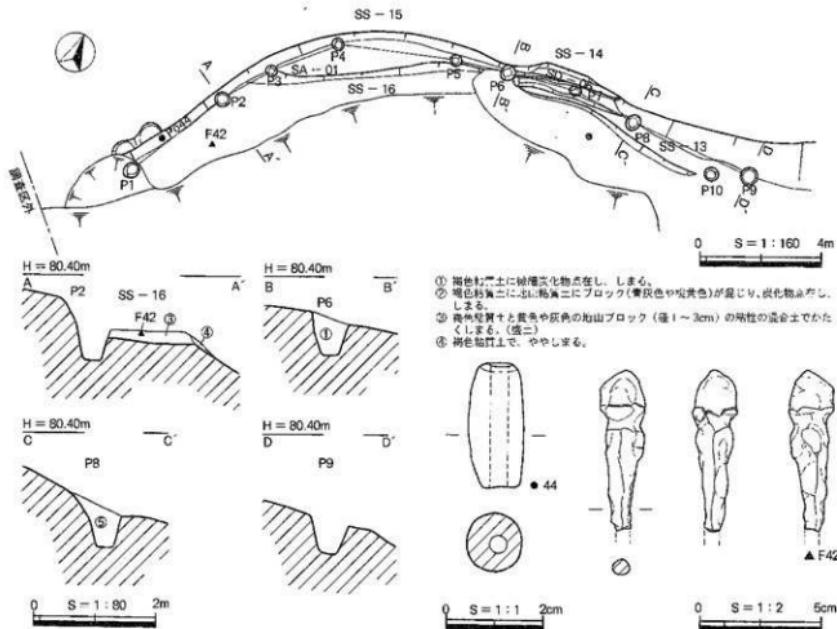
形 態 上側を掘り込み、平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で 0.50 m を残す。平坦面の規模は長辺（南西～北東長）11.20 m、短辺（北西～南東長）1.80 m を測る。この平坦面には南端に SK-22、中央から南側にかけて SS-17 の他に P 17(57 × 56 - 32)cm、P 18(30 × 28 - 20)cm、P 21(55 × 32 - 10)cm が掘り込まれている。また、壁際には SA-01 のピットが掘り込まれている。土層断面観察 (A-A') をみると本遺構掘削後、底面には盛土を施している様子が窺え、少なくとも 2 回に亘り本遺構が営まれていたものと考えられる。



挿図 28

第 16 段状遺構出土遺物実測図 (2)

・ 時期 埋土中から土師器細片や土錐(44)、石匙状石器(S 10)、盛土中から鉄釘(F 42)が出上している。形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設の可能性が高い。

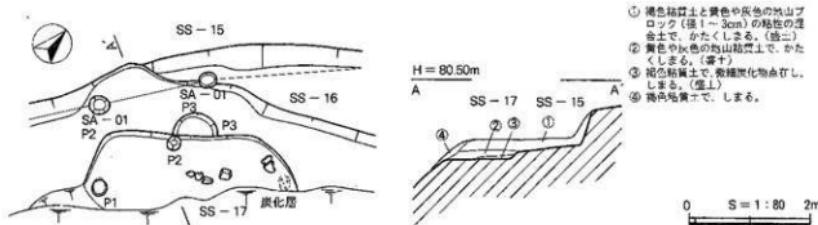


挿図 27 第1柵列遺構図、第16段状遺構構造図・出土遺物実測図(1)

第17段状遺構 (SS-17・挿図 26, 29・図版 10)

位 置 調査区中央から南西寄りに位置し、SS-16の底面に掘り込まれている。底面の平均標高は79.20 mを測る。

形 態 上側を「コの字」状に掘り込み平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大で0.18 mを残す。平坦面の規模は長辺(南西-北東長)3.20 m、短辺(北西-南東長)1.15 mを測り、P 19 (22×22-8) cm、P 20 (28×26-10) cmが掘り込まれている。なお、平坦面中央



挿図 29

第17段状遺構構造図

から北東端にかけて大小合わせて5個の角礎（大きいもので24×12cm、小さいもので6×5cm）が底面に密着した状態で検出されている。また、焼土跡は平坦面北東端で横凹形状(30×25cm)に認められる。埋土をみると②層は埋め戻された可能性が高い。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第18段状造構（SS-18・図版16、17、18）

位 置 調査区東端から南側に位置し、横堀状造構の上側に隣接する。底面の平均標高は73.90mを測る。便宜上、段状造構と呼称する。

形 態 下側に隣接する横堀状造構の形態に沿う形で急斜面の上側をS字形に掘り込み、いわゆる武者走り状の帯状の幅狭な平坦面を造成している。規模は長さ(検出面)41.00m、最大幅1.40mを測る。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から、中世の山城を構成する施設と推定される。

第19段状造構（SS-19・挿図64）

位 置 調査区南端に位置し、第2堀切東側に隣接する。底面の平均標高は74.80mを測る。便宜上、段状造構と呼称する。

形 態 等高線に沿う形で、斜面上側を掘り込んで幅狭な平坦面を造成している。規模は長さ(検出面)10.80m、最大幅1.05mを測る。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。

第1樁列（SA-01・挿図27）

位 置 調査区中央からやや南西寄りに位置し、SS-14、SS-15、SS-16の側壁面に掘り込まれている。検出面の平均標高は79.30mを測る。

形 態 曲輪1の東端から南東側にかけて地形に沿う形で弧状に掘り込まれた9本の柱穴である。規模はそれぞれP1(54×50-55)cm、P2(52×50-60)cm、P3(36×36-40)cm、P4(42×42-45)cm、P5(40×38-40)cm、P6(54×48-70)cm、P7(42×36-43)cm、P8(52×48-58)cm、P9(56×56-62)cmと深めに掘り込まれ、柱穴間距離はP1よりそれぞれ3.32m、2.44m、2.00m、3.52m、1.36m、1.84m、1.70m、3.72mを測る。なお、段状造構掘削後、底面側に盛土を施し、柱穴のうちP1、P2、P4では地がためをした後に掘り込まれている。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、立地条件等から中世の山城を構成する施設と推定される。

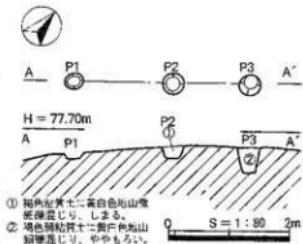
第2柵列 (S A - 02・挿図 30)

位 置 調査区東側、SS-10の南端平坦面に立地する。

検出面の平均標高は77.45mを測る。

形 態 SS-10南端のやや張り出した平坦面の東端に掘り込まれた3本の柱穴である。規模はそれぞれP1 (30×26-12) cm、P2 (36×34-20) cm、P3 (36×32-32) cmを測り、柱穴間距離はP1から1.66m、1.30mである。主軸はN-53°-Eをとる。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。



挿図 30

第2柵列遺構図

第4節 挖立柱建物跡

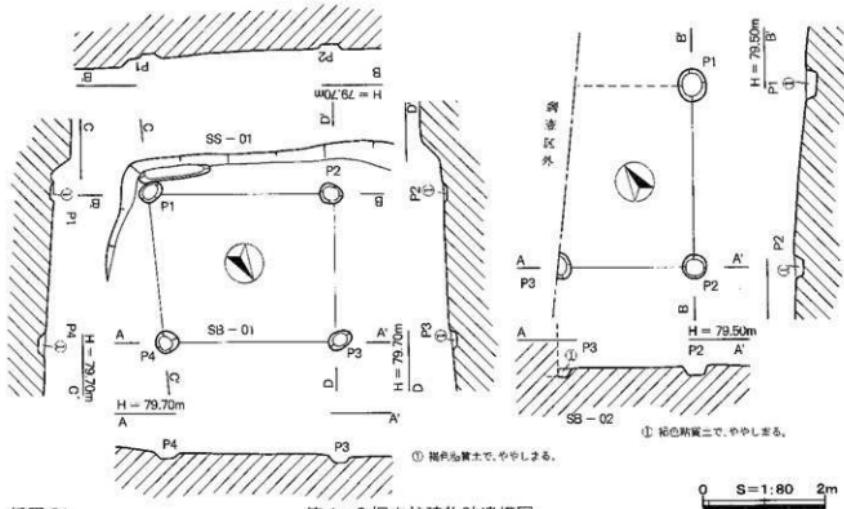
シアケ遺跡において検出された掘立柱建物跡は、曲輪1の北西側の調査区境界付近に2棟と、南東側に5棟、曲輪2の北東側に2棟、中央南東よりに6棟の合計15棟である。

第1 挖立柱建物跡 (SB-01・挿図31・図版7)

位 置 調査区中央より北東側のSS-01の平坦面、標高79.08mに立地する。北東側に0.70m離れてSB-02がある。

形 態 柱の配置はやや歪な方形を呈し、桁行1間(3.00m)×梁間1間(2.40m)、床面積7.22m²を測り、主軸はN-59°-Wをとる掘立柱建物跡である。柱穴は4本で規模はP1(40×32-9)、P2(40×33-6)、P3(40×28-9)、P4(37×36-11)cm、柱穴間距離はP1より3.00、2.40、2.90、2.50mを測る。柱穴内埋土は褐色粘質土である。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



挿図31

第1・2 挖立柱建物跡遺構図

第2 挖立柱建物跡 (SB-02・挿図31)

位 置 調査区中央より北東側のSS-01の平坦面、標高79.04mに立地し、SB-01の南東側に0.70m離れて位置する。南東側の柱穴は調査区外へと続く。

形 態 柱の配置は方形を呈し、桁行1間(3.00m)×梁間1間(2.30m)、床面積は推定で6.82m²を測り、主軸はN-32°-Eをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は3本で規模はP1(54×46-20)、P2(39×38-14)、P3(推定44×34-14)cm、柱穴間距離はP1より3.00、2.30mを測る。柱穴内の埋土は褐色粘質土である。

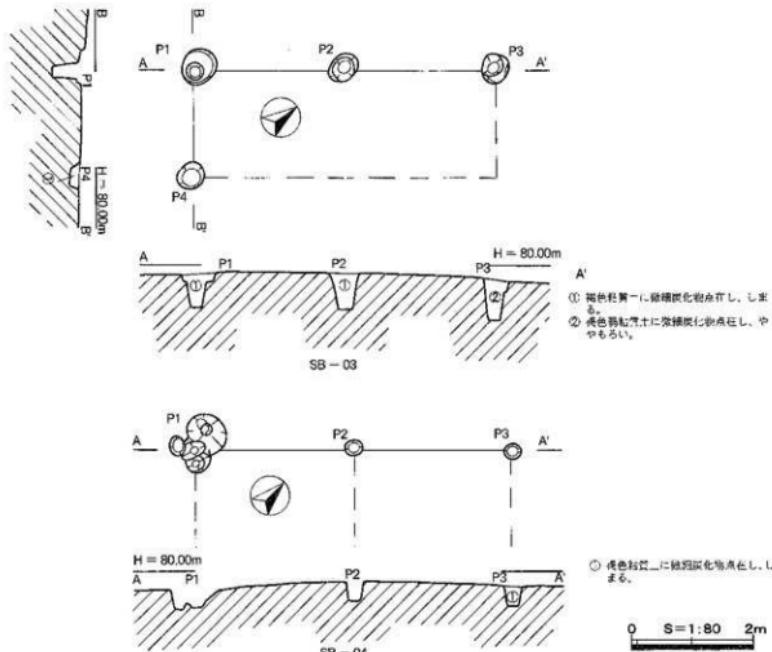
時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第3 挖立柱建物跡 (SB-03・挿図32)

- 位 置** 調査区中央より北東側の S S - 04 の平坦面、標高 79.76 m に立地し、S D - 02, 03 を切り込み、S B - 04 と重複する。
- 形 態** P 2, P 3 に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。桁行 2 間 (5.00 m) × 梁間 1 間 (1.76 m)、床面積は推定 8.00m² を測り、主軸は N - 36° - E をとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は 4 本で、規模は P 1 (64 × 54 - 56)、P 2 (56 × 40 - 60)、P 3 (48 × 43 - 68)、P 4 (47 × 40 - 16) cm、柱穴間距離は P 1 より 2.50, 2.50, 1.76 m を測る。柱穴内には褐色粘質土に微細炭化物が点在する埋土がみられた。
- 時 期** 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

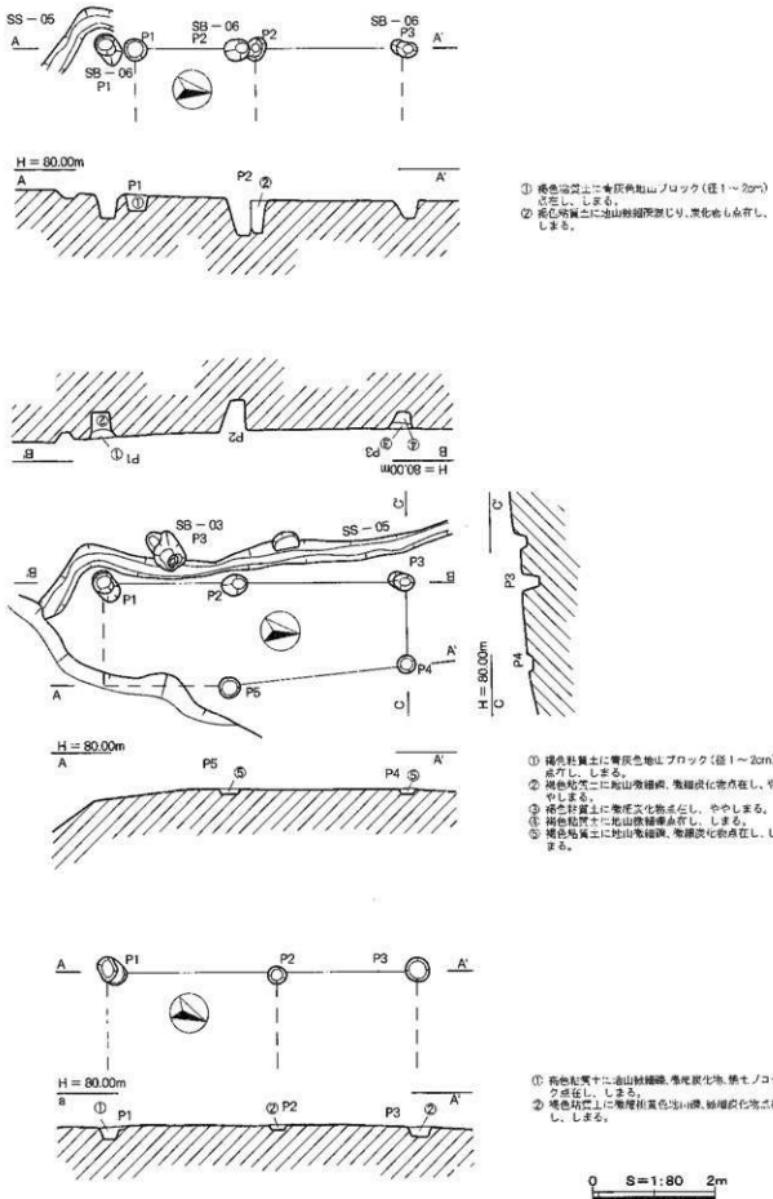
第4 挖立柱建物跡 (S B - 04・挿図 32)

- 位 置** 調査区中央より北西側の S S - 04 の平坦面、標高 79.80 m に立地し、S D - 02 を切り込み、S B - 03 と重複する。
- 形 態** P 1, P 2, P 3 に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。桁行 2 間 (5.20 m)、梁間及び床面積は不明で、主軸は N - 43° - E をとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は 3 本で、規模は P 1 (40 × 21 - 38)、P 2 (30 × 26 - 33)、P 3 (36 × 34 - 34) cm、柱穴間距離は P 1 から 2.64, 2.56 m を測る。柱穴内には褐色質土に微細炭化物が点在する埋土がみられた。
- 時 期** 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



挿図 32

第3・4 挖立柱建物跡遺構図



挿図 33

第 5・6・7 堀立柱建物跡遺構図

第5掘立柱建物跡（SB-05・挿図33）

位 置 調査区中央より北東側のSS-05の平坦面、標高79.50mに立地し、SB-06によって切られる。

形 態 P1、P2、P3に対応する柱穴は確認されなかつたが、柱の配置は長方形を呈すると推定される。P3の柱穴はSB-06の柱穴と共有する。桁行2間(4.40m)、梁間及び床面積は不明であるが、主軸はN-9°-Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は3本で、規模はP1(40×36-26)、P2(残存40×32-54)cm、P3(SB-06と共有)、柱穴間距離はP1から2.00、2.40mを測る。柱穴内には褐色粘質土に地山微細礫、炭化物、焼上の点在する埋土がみられた。

時 期 遺物は出土しなかつた。時期は不明である。

第6掘立柱建物跡（SB-06・挿図33）

位 置 調査区中央より北東側のSS-05の平坦面、標高79.48mに立地し、SB-06を切り込む。

形 態 P1に対応する柱穴は確認されなかつたが、柱の配置は亞な長方形を呈すると考えられる。桁行2間(5.00m)×梁間1間(1.70m)、床面積は推定で7.94m²を測り、主軸はN-8°-Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は5本で、規模はP1(54×36-44)、P2(44×32-52)、P3(42×26-30)、P4(30×28-10)、P5(34×34-9)cm、柱穴間距離はP1から2.26、2.74、1.38、2.94mを測る。柱穴内には褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物などが含まれる埋土がみられた。

時 期 遺物は出土しなかつた。時期は不明である。

第7掘立柱建物跡（SB-07・挿図33）

位 置 調査区中央より北東側のSS-06の平坦面、標高79.48mに立地し、SB-07と重複する。

形 態 P1、P2、P3に対応する柱穴は確認されなかつたが、柱の配置は長方形を呈すると考えられる。桁行2間(5.10m)、梁間及び床面積は不明であるが、主軸はN-26°-Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は3本で、規模はP1(50×36-22)、P2(30×28-8)、P3(40×37-18)cm、柱穴間距離はP1から2.80、2.30mを測る。柱穴内には褐色粘質土に地山微細礫、微細炭化物、焼土ブロックが含まれる埋土がみられた。

時 期 遺物は出土しなかつた。時期は不明である。

第8掘立柱建物跡（SB-08・挿図34・図版15）

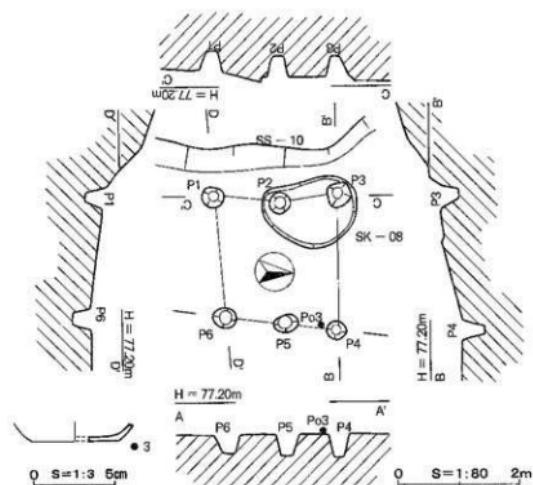
位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高76.82mに立地し、SB-09、SK-08と重複し、SK-08に切り込まれている。

形 態 柱の配置は直角な方形を呈し、桁行1間(2.24m)×梁間2間(2.00m)、床面積5.04m²を測り、主軸はN-85°-Eをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は6本で、規模は

P 1 (37 × 34 - 34),
 P 2 (35 × 34 - 34),
 P 3 (40 × 40 - 34),
 P 4 (31 × 31 - 38),
 P 5 (40 × 27 - 36),
 P 6 (40 × 32 - 32)
 cm. 柱穴間距離は P
 1 から 1.10, 0.95,
 2.25, 0.85, 1.00,
 2.00 m を測る。

遺物 遺物は P 4 の北側
 上面部の肩付近から
 上飾器の皿の底部
 (3) が出土してい
 る。

時期 出土遺物から本掘
 立柱建物跡の時期は
 中世と思われる。



挿図 34 第 8 掘立柱建物跡遺構図・出土土器実測図

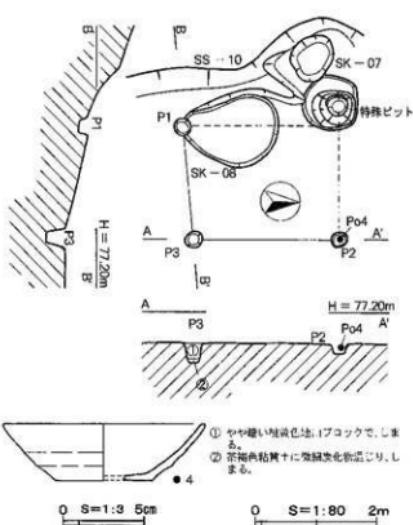
第 9 掘立柱建物跡 (SB-09・挿図 35・図版 15)

位置 調査区中央より北東側の SS-10
 の平坦面、標高 76.70 m に立地し、S
 B-08, SK-08 と重複する。

形態 柱の配置は長方形を呈し、平行 1 間
 (2.40 m) × 梁間 1 間 (1.90 m)、床
 面積は推定 4.64m² 測り、主軸は N
 1° - E をとる掘立柱建物跡である。
 検出された柱穴は 3 本で、規模は P 1
 (27 × 26 - 15)、P 2 (26 × 24 -
 16)、P 3 (29 × 26 - 31) cm. 柱穴
 間距離は P 1 から 2.40, 1.90 m を測
 る。P 3 の柱穴内埋土には上位に桃黃
 色地山ブロック、下位に茶褐色粘質土
 の堆積がみられた。

遺物 P 4 内から上飾器の坏 (4) が出土
 している。

時期 出土遺物から本掘立柱建物跡の時期
 は 14 世紀ごろと思われる。



挿図 35 第 9 掘立柱建物跡遺構図・出土土器実測図

第10掘立柱建物跡（SB-10・挿図36）

位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高77.40mに立地し、SB-11、SB-12、SB-13と重複する。

形 態 P1に対応する柱穴は確認されなかったが、柱の配置は長方形を呈すると考えられる。桁行2間(4.16m)×梁間1間(1.70m)、床面積は6.51m²を測り、主軸方向はN-32°-Eをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は5本で、規模はP1(33×33-22)、P2(50×43-22)、P3(37×32-30)、P4(42×40-9)、P5(62×56-8)cm、柱穴間距離はP1から2.00、2.16、1.70、2.30mを測る。柱穴内には褐色粘質土、茶褐色粘質土の埋土がみられた。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第11掘立柱建物跡（SB-11・挿図36）

位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高77.67mに立地し、SB-10、SB-12、SB-13と重複する。

形 態 柱の配置は歪な長方形を呈し、桁行1間(2.46m)×梁間1間(1.80m)、床面積3.93m²を測り、主軸はN-31°-Eをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は4本で、規模はP1(33×26-11)、P2(33×30-14)、P3(68×49-11)、P4(44×38-9)cm、柱穴間距離はP1から2.20、1.80、2.46、1.60mを測る。柱穴内には茶褐色粘質土、褐色粘質土に地山微細纖維、微細炭化物が点在する埋土がみられた。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第12掘立柱建物跡（SB-12・挿図36）

位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高77.44mに立地し、SB-10、SB-11、SB-13と重複する。

形 態 柱の配置は歪な方形を呈し、桁行1間(2.46m)×梁間1間(2.05m)、床面積4.89m²を測り、主軸はN-35°-Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は4本で、規模はP1(40×38-20)、P2(34×34-22)、P3(46×38-17)、P4(41×36-14)cm、柱穴間距離はP1より2.10、2.46、2.28、2.05mを測る。柱穴内には褐色粘質土の埋土がみられた。

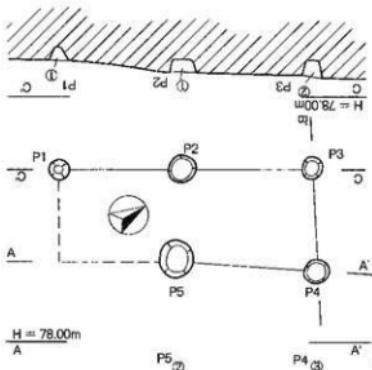
時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第13掘立柱建物跡（SB-13・挿図36）

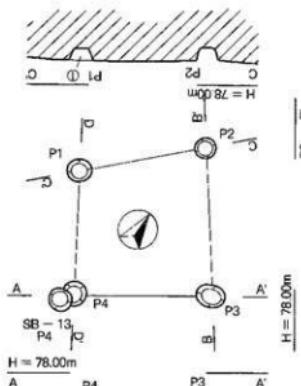
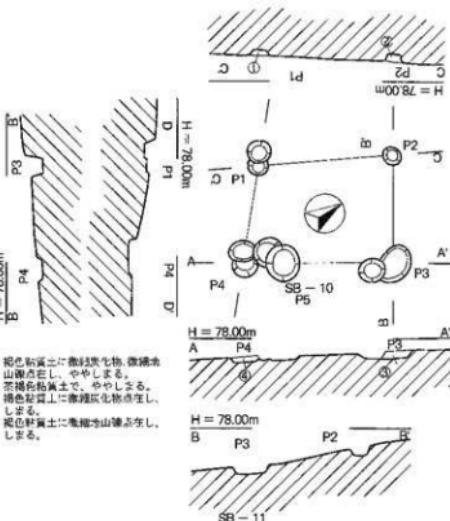
位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高77.41mに立地し、SB-10、SB-11、SB-12と重複する。

形 態 柱の配置は歪な方形を呈し、桁行1間(2.50m)×梁間1間(2.42m)、床面積5.60m²を測り、主軸はN-49°-Eをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は4本で、規模はP1(32×31-24)、P2(34×34-21)、P3(48×40-11)、P4(40×38-9)cm、柱穴間距離はP1より2.50、2.42、2.50、2.07mを測る。柱穴内には褐色粘質土、茶褐色粘質土に地山礫、微細炭化物が点在する埋土が見られた。

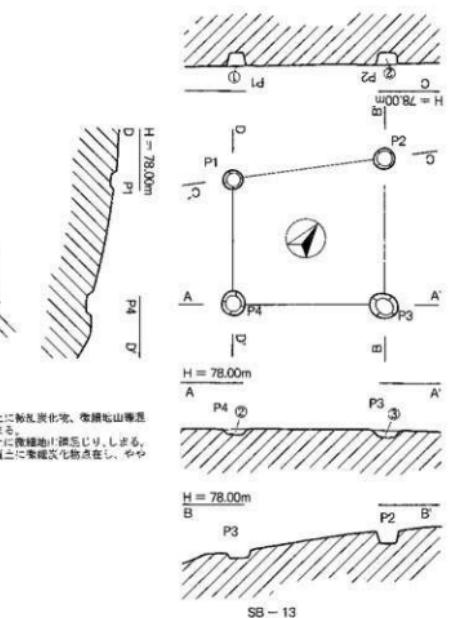
時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



- ① 深色粘質土に微細炭化物、微細地山巣点在し、ややしまる。
- ② 茶褐色粘質土に微細炭化物点在し、ややしまる。
- ③ 基岩色粘質土で、ややしまる。



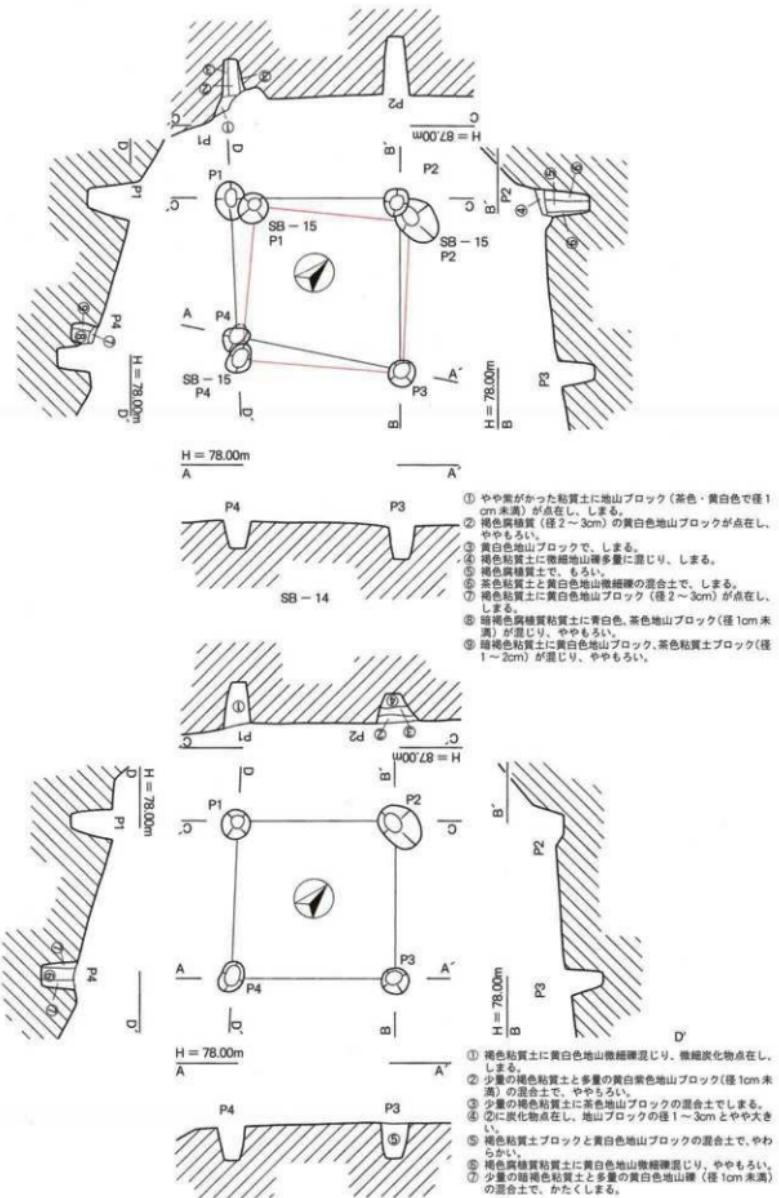
- ① 深色粘質土に微細炭化物、微細地山巣点在り、しまる。
- ② 黄色粘質土に微細地山巣点在り、しまる。
- ③ 黄褐色粘質土に微細炭化物点在し、ややしまる。



- ① 深色粘質土に微細炭化物、微細地山巣点在し、ややしまる。
- ② 黄褐色粘質土で、ややしまる。

插図 36
第 10・11・12・13 掘立柱建物跡遺構図

0 S=1 80 2m



挿図 37

第14・15 堀立柱建物跡遺構図

0 S=1:80 2m

第14 挖立柱建物跡 (SB-14・挿図37・図版9)

位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高77.24mに立地し、SB-15に切り込まれる。

形 態 柱の配置は正方形を呈し、桁行1間(2.84m)×梁間1間(2.78m)、床面積6.93m²を測り、主軸はN-46°-Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は4本で、規模はP1(63×50-100)、P2(44×40-100)、P3(47×42-66)、P4(45×36-57)cm、柱穴間距離はP1より2.78、2.84、2.73、2.28mを測る。柱穴内埋土の観察から柱痕跡を確認しており、掘り方の埋土は、黄白色地山ブロック、茶色粘質土系、暗褐色粘質土系が主体となっている。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第15 挖立柱建物跡 (SB-15・挿図37・図版9)

位 置 調査区中央より東側のSS-10の平坦面、標高77.24に立地し、SB-14を切り込まれている。

形 態 柱の配置は方形を呈し、桁行1間(2.70m)×梁間1間(2.60m)、床面積6.83m²を測り、主軸はN-39°-Wをとる掘立柱建物跡である。検出された柱穴は4本で、規模はP1(48×48-78)、P2(78×60-48)、P3(44×43-58)、P4(50×36-54)cm、柱穴間距離はP1より2.58、2.60、2.70、2.60mを測る。P4の柱穴内埋土の観察から柱痕跡を確認しており、掘り方埋土は暗褐色粘質土と黄褐色地山礫との混合土がみられた。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。なお、SB-10~15の6棟はSS-10との関連性から、中世の山城跡に伴うものと推測される。

遺構名	桁行×梁間	桁行長(m)	梁間(m)	床面積(m ²)	長軸方向
SB-01	1間×1間	3.00	2.40	7.22	N-59°-W
SB-02	1間×1間	3.00	2.30	(推) 6.82	N-32°-E
SB-03	2間×1間	5.00	1.76	(推) 8.80	N-36°-E
SB-04	2間×不明	5.20	-	-	N-43°-E
SB-05	2間×不明	4.40	-	-	N-9°-W
SB-06	2間×1間	5.00	1.70	(推) 7.94	N-8°-W
SB-07	2間×不明	5.10	-	-	N-26°-W
SB-08	1間×2間	2.00	2.24	5.04	N-85°-E
SB-09	1間×1間	2.40	1.90	(推) 4.64	N-1°-W
SB-10	2間×1間	4.16	1.70	6.51	N-32°-E
SB-11	1間×1間	2.46	1.80	3.93	N-31°-E
SB-12	1間×1間	2.46	2.05	4.89	N-35°-W
SB-13	1間×1間	2.50	2.42	5.60	N-49°-E
SB-14	1間×1間	2.84	2.72	6.93	N-46°-W
SB-15	1間×1間	2.70	2.60	6.83	N-39°-W

挿表3 挖立柱建物跡計測表

第5節 溝状遺構

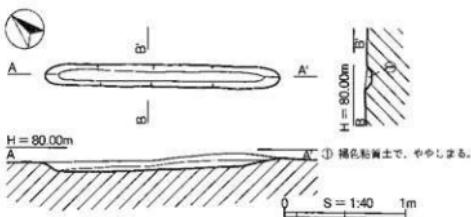
シアケ遺跡において検出された溝状遺構は、曲輪1の南西側に1条、南東側に2条、曲輪2の西側に3条、北東側に1条の合計7条である。

第1溝状遺構 (SD-01・挿図38)

位 置 調査区中央より西側の平坦面に立地し、標高 79.80 m に立地する。北西側から南西側に延びる。

形 態 平面形は直線状を呈す。規模は長さ 1.94 m、幅 0.17 ~ 0.19 m、深さ 0.04 m を測り、断面形は逆梯形を呈す。埋土は褐色粘質土でしまり、自然堆積であると考えられる。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



挿図 38

第1溝状遺構遺構図

第2溝状遺構 (SD-02・挿図12)

位 置 調査区中央よりやや北西側の SS-04 平坦面に立地し、標高 79.80 m に立地する。等高線に沿うような形で北東から南西方向に延びる。

形 態 平面形は直線状を呈す。規模は長さ 3.61 m、幅 0.16 ~ 0.26 m、深さ 0.18 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。SS-04 の P2 と切りあい関係にあるが、溝が古い遺構である。埋土は褐色粘質土でしまり、自然堆積であると考えられる。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第3溝状遺構 (SD-03・挿図12)

位 置 調査区中央より北東側の SS-03 の平坦面、SS-03 のテラス面、標高 79.85 m に立地する。等高線に沿うような形で南北方向に延びる。

形 態 平面形はやや直線状を呈する。規模は長さ 3.28 m、幅 0.35 ~ 0.45 m、深さ 0.20 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。SS-03 の平坦面と切りあい関係にあるが、SD-03 のほうが新しい。埋土は褐色粘質土で、自然堆積であると考えられる。

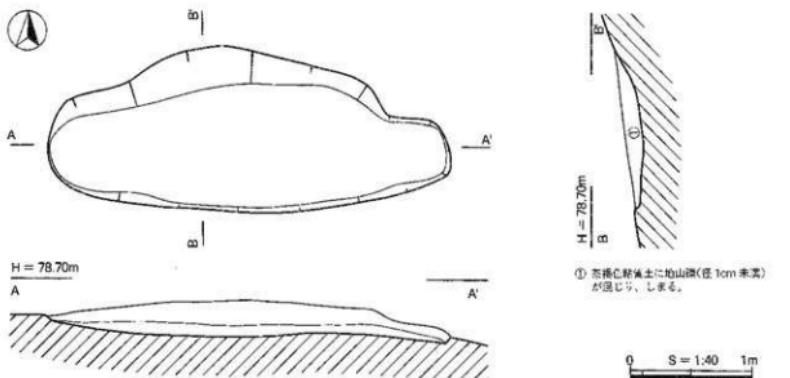
時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第4溝状遺構 (SD-04・挿図39・図版10)

位 置 調査区中央より、やや南西側の SS-07 の平坦面、標高 78.40 m に立地する。幅の広い溝で、等高線に沿うように東西方向に延びる。

形 態 平面形は紡錘形を呈する。規模は長さ 3.30 m、幅 0.52 ~ 1.35 m、深さ 0.19 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で山礫を含み、自然堆積であると考えられる。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、立地条件等から山城跡に伴う施設と推定される。



挿図 39

第4溝状遺構遺構図

第5溝状遺構 (SD-05・挿図40・図版10)

位 置 調査区中央より北東側の SS-10 の平坦面、標高 77.28 m に立地する。SK-09 を切り込み、等高線に沿うように東西方向に延びる。

形 態 平面形は直線状を呈する。規模は長さ 22.0 m、幅 0.42 ~ 0.52 m、深さ 0.11 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は褐色粘質土に地山礫、微細炭化物混じりで、自然堆積であると考えられる。

時 期 遺物は出土しなかった。切り合い関係から、時期は SK-09 より新しく、立地条件等から山城跡に伴う施設と推定される。

第6溝状遺構 (SD-06・挿図24・図版9)

位 置 調査区中央より、やや西側の SS-13 の平坦面、標高 79.51 m に立地する。東西方向に等高線に沿うように延びる。

形 態 平面形は直線状を呈する。規模は長さ 3.70 m、幅 0.31 ~ 0.48 m、深さ 0.14 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は灰褐色粘質土に微細炭化物混じりで、自然堆積と考えられる。

遺 物 埋土上位より、鉄製品の釘 (F 40) が出土している。

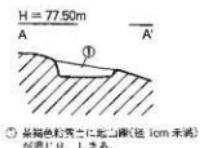
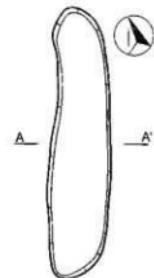
時 期 SS-13 に付設されたものと考えられ、時期は中世の山城跡に伴うものと推定される。

第7溝状遺構 (SD-07・挿図25)

位 置 調査区中央より、やや西側の SS-14 の側境際平坦面に立地する。標高 79.11 m に立地する。東西方向に等高線に沿うように延びる。

形 態 平面形は緩やかな弧状を呈する。規模は 2.91 m、幅 0.12 ~ 0.18 m、深さ 0.06 m を測り、断面形は逆梯形を呈する。埋土は灰色粘質土に微細炭化物が点在するものがみられた。

時 期 SS-14 に付設されたものと考えられ、時期は中世の山城跡に伴うものと推定される。



挿図 40 第5溝状遺構遺構図

遺構名	平面形	規模 (m)	遺構名	平面形	規模 (m)
S D - 01	直線状	1.94 × 0.19 - 0.04	S D - 05	直線状	2.20 × 0.52 - 0.11
S D - 02	直線状	3.61 × 0.26 - 0.18	S D - 06	直線状	3.70 × 0.48 - 0.14
S D - 03	歪な直線状	3.28 × 0.45 - 0.20	S D - 07	緩やかな弧状	2.91 × 0.18 - 0.06
S D - 04	紡錘形	3.30 × 1.35 - 0.19			

插表 4 溝状遺構計測表

第6節 土坑

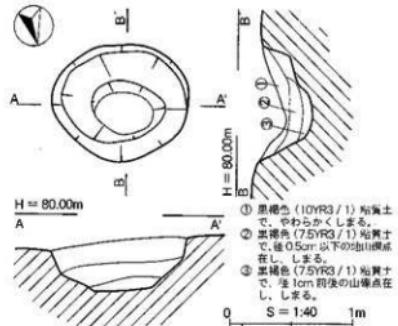
シアケ遺跡において検出された土坑は、曲輪1の西側から7基、曲輪2の南西側から2基、中央から13基、北東側から1基の合計23基である。

第1土坑 (SK-01・挿図41・図版3、10)

位 置 調査区中央より南東側、SK-01南側の平坦面で検出された。SK-05の西側1.30mに位置する。検出面での標高は79.82mを測る。

形 態 平面形は円形をなし、主軸はN-77°-Wをとる。上縁部の長径は1.11m、短径は0.96mで、深さは0.44mを測る。断面形は段をもつて碗形で、底面形は梢円形を呈する。長径0.47m、短径は0.39mを測る。埋土は3層に分層され黒褐色土系の粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



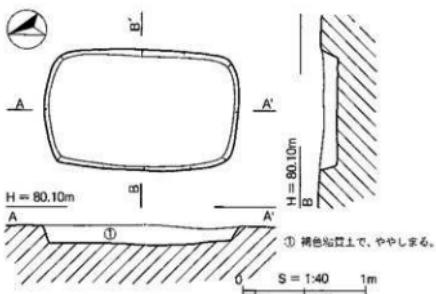
挿図41 第1土坑遺構図

第2土坑 (SK-02・挿図42)

位 置 調査区中央より北西側、暖斜面部で検出された。SK-03の南西側3.50mに位置する。検出面での標高は79.95mを測る。

形 態 平面形は隅丸長方形をなし、主軸はN-17°-Eをとる。上縁部の長径は1.59m、短径は1.00mで、深さは0.15mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は長方形を呈し、平坦である。長径は1.52m、短径は0.89mを測る。埋土は1層で褐色粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



挿図42 第2土坑遺構図

第3土坑 (SK-03・挿図43)

位 置 調査区中央より北側、斜面部で検出された。SK-02の北側3.50mに位置する。検出面での標高は80.05mを測る。

形 態 平面形は長方形をなし、主軸はN-69°-Eをとる。上縁部長径は2.00m、短径は1.77mで、深さ0.11mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な方形形状を呈し、平坦である。長径は19.20m、短径は16.70mを測る。埋土は1層で褐色粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第4土坑 (SK-04・挿図44・図版10)

位 置 調査区中央より北側、SX-01の前方部を掘り込んで造られた平坦面で検出された。SX-01の第1埋葬施設の北側4.80mに位置する。検出面での標高は79.92mを測る。

形 態 平面形は長方形をなし、主軸はN-35°-Eをとる。上縁部の長径は1.73m、短径は0.61mで、深さは0.07mを測る。断面形は皿形で、底面形は歪な方形を呈し、平坦である。長径は1.58m、短径は0.48mを測る。埋土は1層で、炭化物、焼土ブロックが混じる褐色粘質土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



挿図43 第3土坑遺構図

第5土坑 (SK-05・挿図45・図版11)

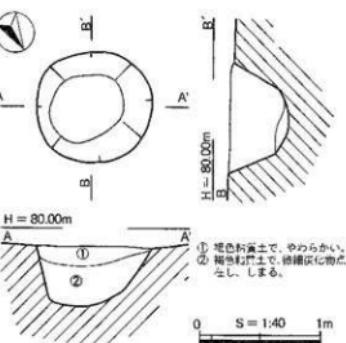
位 置 調査区中央より北側、平坦面にて検出され

た。SK-01の西側1.30mに位置する。検出面での標高は79.88mを測る。

形 態 平面形は円形をなし、主軸はN-71°-Wをとる。上縁部の長径は0.95m、短径0.91m、深さは0.50mを測る。断面形は歪な逆梯形で、底面形は歪な橢円形を呈し、長径は0.85m、短径は0.78mを測る。埋土は2層に分層され、下層の褐色粘質土には微細炭化物が含まれていた。遺構の性格は不明である。

時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

挿図44 第4土坑遺構図



挿図45

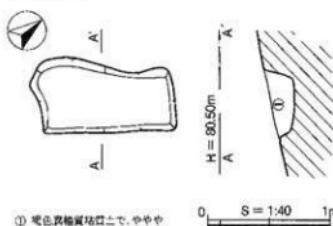
第5土坑遺構図

第6土坑 (SK-06・挿図46・図版11)

位置 調査区中央より北東側、緩斜面において検出された。SK-01の北側1.70mに位置し、SS-04を切り込む。検出面での標高は80.13mを測る。

形態 平面形は長方形をなし、主軸はN-39°-Eをとる。上縁部は長径1.03m、短径0.61m、深さ0.25mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な長方形を呈し、平坦である。径は1.07m、短径は0.46mを測る。埋土は1層で褐色腐植質粘土の堆積していた。遺構の性格は不明である。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、SS-04との切り合い関係から中世以降である。



① 暗色糞便質粘土で、ややわらかい。

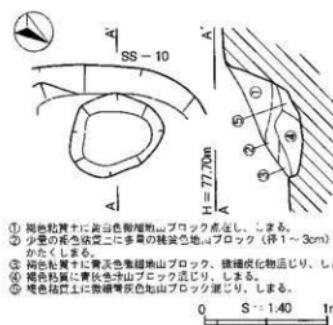
挿図46 第6土坑遺構図

第7土坑 (SK-07・挿図47・図版11)

位置 調査区中央より北東側において検出された。SS-10を切り込み、SK-08の北西側0.60mに位置する。検出面での標高は77.10mである。

形態 平面形は不整円形をなし、主軸はN-52°-Wをとる。上縁部の長径0.81m、短径0.65m、深さは0.13mを測る。断面形は皿状で、底面形は歪な梢円形を呈し、長径は0.60m、短径は0.44mを測る。埋土は5層に分層され、下層には褐色粘質土に微細青灰色地山ブロック、微細炭化物が混じる層がみられた。遺構の性格は不明である。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、SS-10との切り合い関係から中世以降のものである。



① 褐色糞便質粘土に、暗白色新緑地山ブロックが混じり、しまる。

② 少量の糞便土に多少の新緑地山ブロック(径1~3cm)が混じり、くしゃくしゃする。

③ 暗色糞便土に、褐色糞便質粘土ブロック、焼成化物混じり、しまる。

④ 褐色糞便土に、青灰色地山ブロック混じり、しまる。

⑤ 褐色糞便土に、青灰色地山ブロック混じり、しまる。

⑥ 褐色糞便土に、青灰色地山ブロック混じり、しまる。

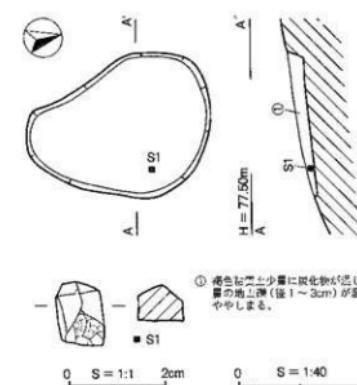
⑦ 暗色糞便土に、青灰色地山ブロック混じり、しまる。

挿図47 第7土坑遺構図

第8土坑 (SK-08・挿図48・図版11, 16)

位置 調査区中央より北東側において検出された。SK-07の南東側0.60mに位置し、SB-08・09の西側を切り込む。検出面での標高は77.20mである。

形態 平面形は不整梢円形をなし、上軸はN-6°-Eをとる。上縁部長径1.54m、短径1.10m、深さは0.14mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は歪な梢円形を呈し、平坦である。長径は2.93m、短径2.10m、を測る。埋土は1層で、褐色粘質土に炭化物、地山礫が混じる層が堆積していた。



挿図48 第8土坑遺構図・出土遺物実測図

遺物 土坑内の底面からは水晶片（S 46）が出土している。遺構の性格は不明である。
時期 時期は不明であるが、S B - 08・09との切り合い関係から中世以降のものである。

第9土坑（SK-09・挿図50・図版11）

位置 調査区中央より東側、S

S - 10 の平坦面で検出された。SD - 05 を切り込み、東側は急斜面部にかかり、SK - 10 の西側 3.10 m に位置する。検山面での標高は 77.02 m である。

形態 平面形は不整形をなし、主軸は N - 82° - W をとる。上縁部の長径は 1.90 m、短径 1.39 m、深さは 1.28 m を測る。断面形は袋状で、底面形はやや歪な円形を呈し、平坦である。長径 7.50 m、短径 5.80 m を測る。埋土は 8 層に分層され、最下層には褐色腐植質土に地山細礫、微細炭化物の点在する層が堆積していた。遺構の性格は不明であるが、人工的加工とは判断し難く、小動物による搅乱穴の可能性が高い。

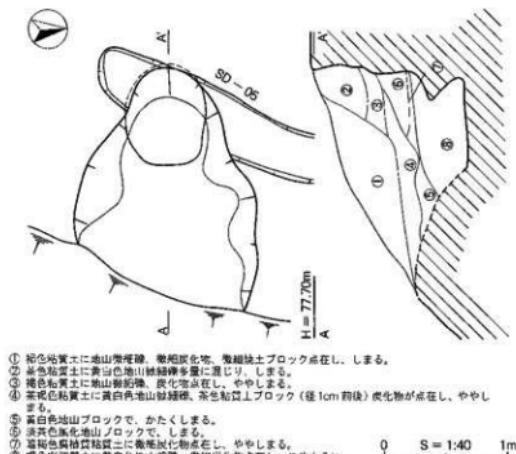
時期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第10土坑（SK-10・挿図49・図版11）

位置 調査区中央より東側、S S - 07 の平坦面で検出された。SK - 11 の南側 1.30 m に位置する。検山面での標高は 78.37 m を測る。

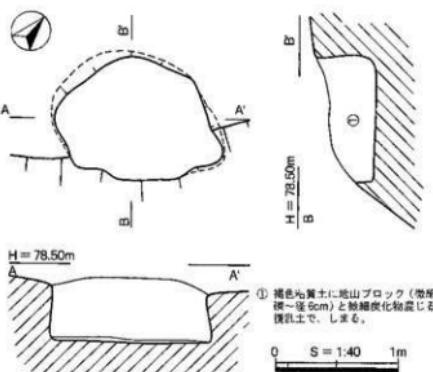
形態 平面形は不整形をなし、主軸は N - 65° - E をとる。上縁部の長径は 1.40 m、短径 1.00 m、深さは 0.49 m を測る。断面形は袋状で、底面形は歪な橢円形を呈し、平坦である。長径 1.48 m、短径 10.05 m を測る。埋土は 1 層で褐色粘質土に地山ブロック、微細炭化物が混じる搅乱層が堆積していた。遺構は形態から上縁部を S S - 07 により削平されているもの貯蔵穴であると考えられる。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、S S - 07 との切り合い



挿図 50

第9土坑遺構図



挿図 49

第10土坑遺構図

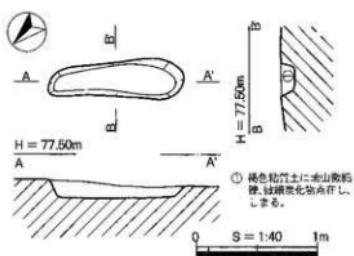
関係から、中世以前で形態や周辺の出土遺物等から弥生時代の可能性がある。

第11土坑（SK-11・挿図51・図版11、12）

位置 調査区中央より東側において検出された。SK-12の北西側0.20mに位置する。検出面での標高は77.29mである。

形態 平面形は椭円形をなし、主軸はN-41°-Eをとる。上縁部の長径は1.10m、短径0.27m、深さ0.12mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は細長い壺形を呈し、平坦である。長径9.98m、短径2.70mを測る。埋土は1層で褐色粘質土に微細な地山細礫、炭化物の点在する層が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



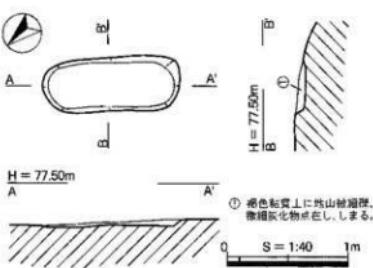
挿図51 第11土坑遺構図

第12土坑（SK-12・挿図52・図版11、12）

位置 調査区中央より東側、SS-10の底面で検出された。SK-11の南東側0.20mに位置する。検出面での標高は77.23mを測る。

形態 平面形は橢円形をなし、主軸はN-37°-Eをとる。上縁部は長径1.13m、短径0.44m、深さは0.07mを測る。断面形は皿状で、底面形は細長い橢円形を呈し、平坦である。長径10.05m、短径3.05mを測る。埋土は1層で褐色粘質土に微細な地山細礫、炭化物の点在する層が堆積していた。遺構の性格は不明である。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



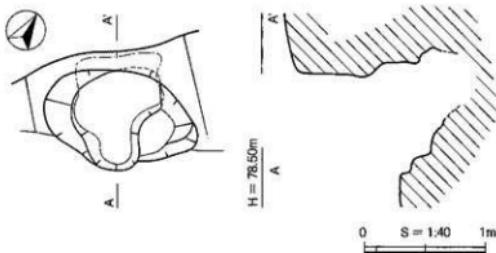
挿図52 第12土坑遺構図

第13土坑（SK-13・挿図53・図版12）

位置 調査区中央より東側、SS-10の側壁面で検出された。SK-14の北西側に接する形で位置する。検出面での標高は78.21mである。

形態 平面形は不整形をなし、主軸はN-76°-Eをとる。上縁部の長径は1.31m、短径0.82m、深さは1.18mを測る。断面形は袋状を呈する。 挿図53

底部は深く斜め方向に掘り込まれている。埋土は擾乱土が堆積していた。遺構の性格は小動物による擾乱穴と考えられる。



挿図53 第13土坑遺構図

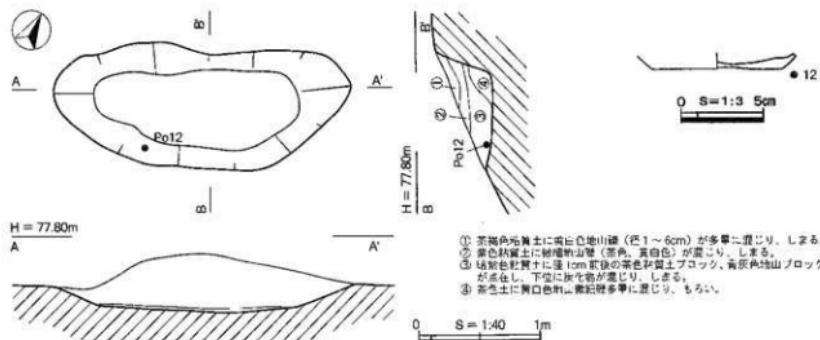
第14土坑 (SK-14・挿図54・図版12、15)

位置 調査区中央より東側、SS-10の側壁際で検出された。SK-14の南東側に接する形で位置する。検出面での標高は77.64mを測る。

形態 平面形は不整橢円形をなし、主軸はN-60°-Eをとる。上縁部の長径は2.45m、短径0.96m、深さ0.45mを測る。断面形は主軸方向においては逆梯形で、底面形は歪な長方形を呈し、平坦である。長径は1.67m、短径0.63mを測る。埋土は4層で、下層の③層である暗紫褐色粘質土に茶色粘質土ブロック・青灰色地山ブロックが点在し、炭化物が混じる層の堆積が厚くみられた。遺構の性格は不明である。

遺物 土坑内からは土師器の皿の底部(12)が出土している。

時期 時期は中世と思われる。



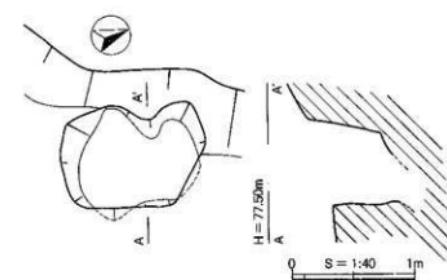
挿図54

第14土坑遺構図・出土土器実測図

第15土坑 (SK-15・挿図55・図版12)

位置 調査区中央より東側において検出された。SK-14の西側0.50mに位置する。検出面での標高77.17mを測る。

形態 平面形は不整橢円形をなし、主軸はN-24°-Eをとる。上縁部の長径は1.14m、短径は0.79m、深さは0.67mを測る。断面形は逆梯形で、底部は斜め方向に深く掘り込まれている。埋土は擾乱土が堆積していた。遺構の性格は小動物による擾乱穴と思われる。



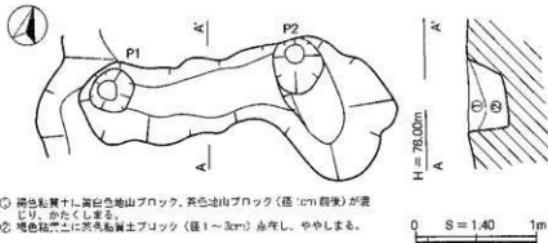
挿図55

第15土坑遺構図

第16土坑 (SK-16・挿図56)

位置 調査区中央より東側、SS-10の平坦面で検出された。SK-17を切り込み、SK-18の南東側0.20mに位置する。検出面での標高は77.57mを測る。

形態 平面形はややL字状を呈し、主軸はN-74°-Eをとる。上縁部の長径は2.63m、短径0.55m、深さは0.77mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は不整形を呈し、中央は平坦である。長



第16 土坑遺構図

径は1.77m、短径0.22mを測る。底面西側にP1(78×70-35)cm、東側にP2(88×80-42)cmの2本の柱穴が掘り込まれている。埋土は2層に分層され褐色粘質土系の層が堆積していた。造構の性格は不明である。

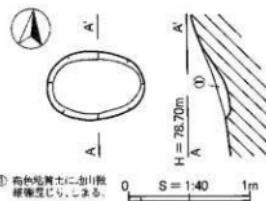
時期 遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、中世の山城跡に関連するものと推測される。

第17 土坑(SK-17・挿図20、57・図版17)

位置 調査区中央より東側、SS-10の平坦面で検出された。SK-13の南側1.30mに位置する。検出面での標高77.37mを測る。

形態 平面形は楕円形をなし、主軸はN-83°-Eをとる。上縁部の長径は0.80m、短径0.56m、深さは0.19mを測る。断面形は皿状で、底面形は楕円形を呈し、平坦である。長径は0.72m、短径4.50mを測る。埋土は1層で褐色粘質土に地山微細混じりの層が堆積していた。造構の性格は不明である。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



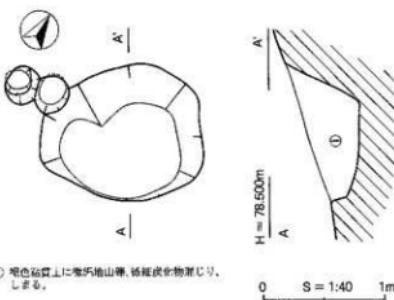
第17 土坑遺構図

第18 土坑(SK-18・挿図58・図版12)

位置 調査区中央より東側において検出された。SK-19を切り込み、SD-04の南東1.40mに位置する。検出面での標高は78.36mを測る。

形態 平面形は楕円形をなし、主軸はN-40°-Eをとる。上縁部の長径は1.33m、短径1.09m、深さ0.61mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は亞な楕円形を呈し、やや平坦である。長径0.99m、短径0.72mを測る。埋土は1層で褐色粘質土に地山微細纖維、微細炭化物混じりの層が堆積していた。造構の性格は不明である。

時期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第18 土坑遺構図

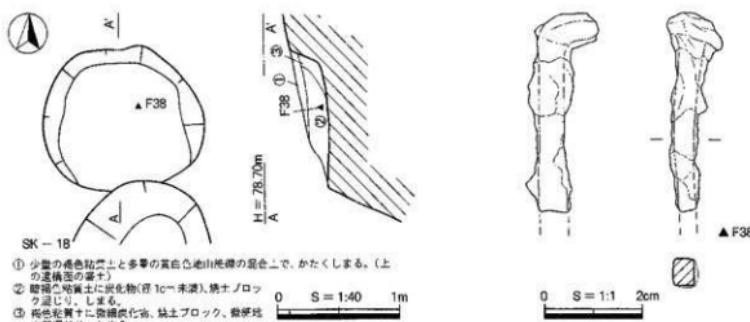
第19土坑 (SK-19・挿図59・図版18)

位 置 調査区中央より東側、SS-07の平坦面で検出された。SK-18に切り込まれ、SD-04の南東側0.40mに位置する。検出面での標高は78.48mを測る。

形 態 平面形は円形をなし、主軸はN-82°-Eをとる。上縁部の長径は1.33m、短径は1.15m、深さは0.32mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は円形を呈し、平坦である。長径は1.02m、短径0.98mを測る。埋土は3層に分層され下層の②層の暗褐色粘質土に炭化物、焼土ブロック混じりの厚い堆積がみられた。造構の性格は不明である。

遺 物 遺物は釘F(38)が出土している。

時 期 時期は不明である。



挿図 59

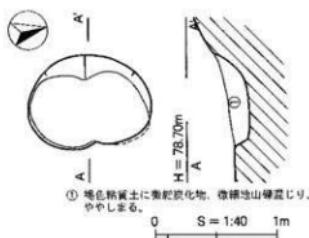
第19 土坑遺構図・出土遺物実測図

第20土坑 (SK-20・挿図60・図版12)

位 置 調査区中央より東側、SS-07の平坦面で検出された。SK-19と重複し、SD-04の西側1.00mに位置する。検出面での標高は78.45mを測る。

形 態 平面形は梢円形をなし、主軸はN-4°-Eをとる。上縁部の長径1.02m、短径0.76m、深さ0.31mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は梢円形を呈し、やや平坦である。長径は0.97m、短径0.52mを測る。埋土は1層で褐色粘質土に微細炭化物、微細地山塊が混じる層が堆積していた。造構の性格は不明である。

遺 物 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



挿図 60

第20 土坑遺構図

第21土坑 (SK-21・挿図61・図版12)

位 置 調査区中央より、やや北東側、SS-07の南端平坦面で検出された。SD-04の西側0.60mに位置する。検出面での標高は78.86mを測る。

形 態 平面形は不整梢円形をなし、主軸はN-83°-Eをとる。上縁部の長径は1.48m、短径1.17m、深さ0.47mを測る。断面形は逆梯形で、底面形は円形を呈し、やや平坦である。

長径は 3.00 m、短径は 2.90 m を測る。埋土は 1 層で混合土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

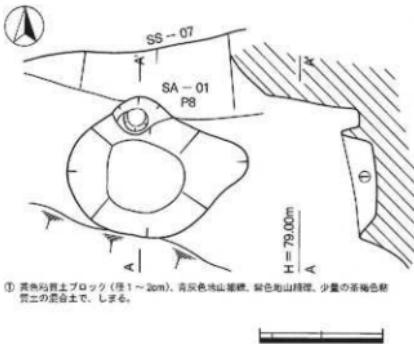
時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第 22 土坑 (SK-22・図版 62・図版 13)

位 置 調査区中央より南西側、S S - 16 の平坦面で検出された。S S - 17 の南西側 1.50 m に位置する。検出面での標高は 79.35 m を測る。

形 態 平面形は隅丸方形をなし、主軸は N - 44° - E をとる。上縁部の長径は 1.25 m、短径 1.17 m、深さ 0.50 m を測る。断面形は逆梯形で、底面形は隅丸方形を呈し、やや平坦である。長径は 0.85 m、短径 0.75 m を測る。底面から南西側の壁面にかけて、少し浮いた状態で 8 個の拳大の礫が検出された。これらの石は上面に火を受けた痕跡がみられ、赤く変色したり、煤が付着した痕跡がみられた。埋土は 4 層に分けられ、①層、②層の堆積層中に多量の炭化物、焼土を含むことから、この中で火を焚いたと考えられる。

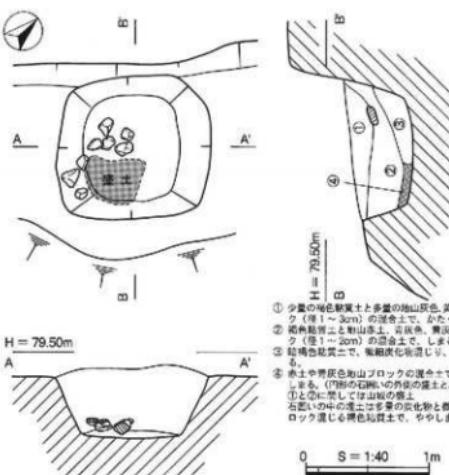
時 期 時期は不明である。



① 黄色均質土ブロック(径 1 ~ 20cm)、青灰色地山岩塊、褐色地山岩塊、少量の茶褐色粘土の混合土で、しまる。

図版 61

第 21 土坑遺構図



① 少量の褐色粘土と多量の地山灰土、黄色ブロック(径 1 ~ 3cm)の混合土で、かたくしまる。
② 青灰色地山岩塊、褐色地山岩塊、少量の灰黑色ブロック(径 1 ~ 20cm)の混合土で、かたくしまる。
③ 褐色地山岩塊で、柔軟度化粧混じり、やわらぎ。
④ 赤土や青灰色地山岩ブロックの混合土で、かたくしまる。(左側に開いていて、その中の土と想われる)
右端の中央に埋土ごとを多く含む化粧土と燒土混じりブロック混じる褐色粘土で、やわらぎ。

図版 62

第 22 土坑遺構図

第 23 土坑 (SK-23・図版 63・図版 5、6)

位 置 調査区中央より南西側において検出された。第 1 堀切内に位置する。検出面での標高は 74.70 m を測る。

形 態 平面形は不整椭円形を呈し、主軸は N - 61° - W をとる。上縁部の長径は 5.20 m、短径 2.80 m、深さ 1.50 m を測る。断面形は皿状で、底面形は歪な楕円形を呈する。長径は 2.10 m、短径は 1.18 m を測る。底面には細長い溝が北西から南東方向に向かって直線状に走り、にぎりこぶし大の礫が溝幅一杯に底面密着した状態で検出された。遺構の性格は第 1 堀切に付設するものと考えられる。

時 期 時期は中世と考えられる。

造構名	平面形	断面形	検出面標高	規模	長軸方向
SK - 01	円形	お椀形	79.82	1.11 × 0.96 - 0.44	N - 77° - W
SK - 02	隅丸長方形	逆梯形	79.95	1.59 × 1.00 - 0.15	N - 17° - E
SK - 03	長方形	逆梯形	80.05	2.00 × 1.77 - 0.11	N - 69° - E
SK - 04	長方形	皿状	79.92	1.73 × 0.61 - 0.07	N - 35° - E
SK - 05	円形	逆梯形	79.88	0.95 × 0.91 - 0.50	N - 71° - W
SK - 06	長方形	逆梯形	80.13	1.03 × 0.61 - 0.25	N - 39° - E
SK - 07	不整円形	皿状	77.10	0.81 × 0.65 - 0.13	N - 52° - W
SK - 08	不整楕円形	逆梯形	77.20	1.54 × 1.10 - 0.14	N - 6° - E
SK - 09	不整形	袋状	77.02	1.90 × 1.39 - 1.28	N - 82° - W
SK - 10	不整形	袋状	78.37	1.40 × 1.00 - 0.49	N - 65° - E
SK - 11	楕円形	逆梯形	77.29	1.10 × 0.27 - 0.12	N - 41° - E
SK - 12	楕円形	皿状	77.23	1.13 × 0.44 - 0.07	N - 37° - E
SK - 13	不整形	袋状	77.21	1.31 × 0.82 - 1.18	N - 76° - E
SK - 14	不整楕円形	逆梯形	77.64	2.45 × 0.95 - 0.45	N - 60° - E
SK - 15	不整楕円形	逆梯形	77.17	1.14 × 0.76 - 0.67	N - 24° - E
SK - 16	不整形	逆梯形	77.57	2.63 × 0.55 - 0.77	N - 74° - E
SK - 17	楕円形	皿状	77.37	0.80 × 0.56 - 0.19	N - 83° - E
SK - 18	楕円形	逆梯形	78.36	1.33 × 1.09 - 0.61	N - 40° - E
SK - 19	円形	逆梯形	78.48	1.33 × 1.15 - 0.32	N - 82° - E
SK - 20	楕円形	逆梯形	78.45	1.02 × 0.76 - 0.31	N - 4° - E
SK - 21	不整楕円形	逆梯形	78.86	1.48 × 1.17 - 0.47	N - 83° - E
SK - 22	隅丸楕円形	逆梯形	79.35	1.25 × 1.17 - 0.50	N - 44° - E
SK - 23	不整楕円形	皿状	74.70	5.20 × 2.80 - 1.50	N - 61° - W

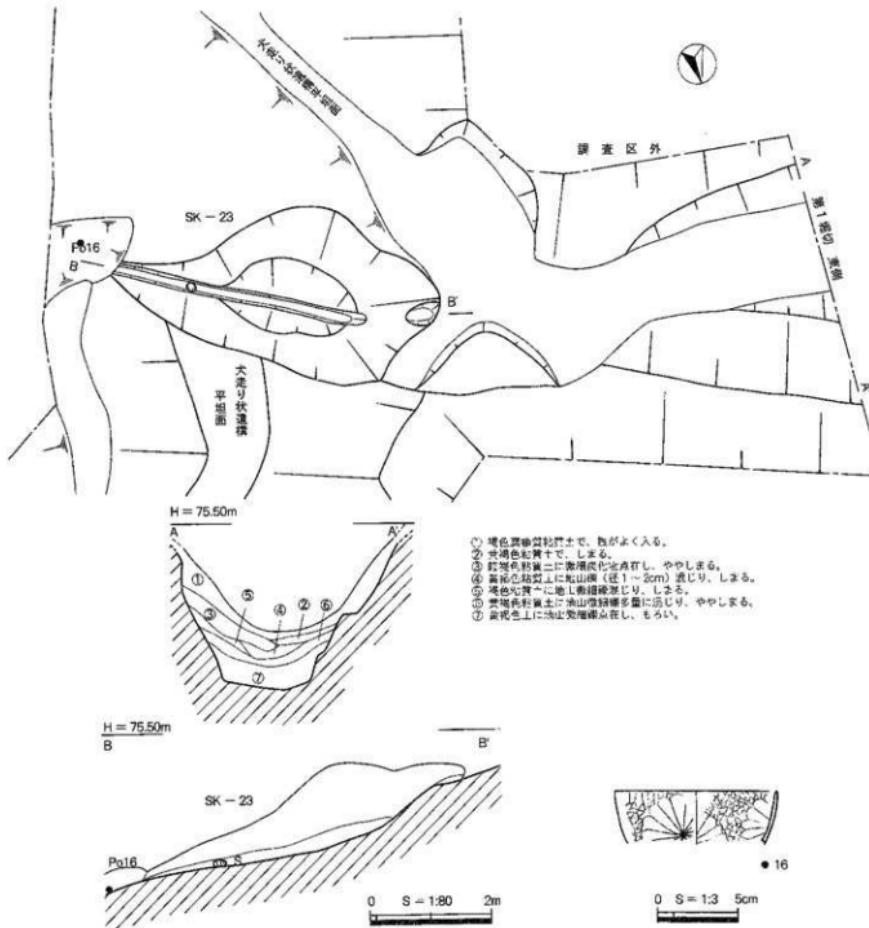
挿表 5 土坑計測表

第7節 堀切

堀切は2条検出され、それぞれ調査区の南側でやせ尾根鞍部を断ち切るように東西方向に設けられている。南端のものを第2堀切、これから約7m北方向に造られ、曲輪1に接したもの第1堀切と呼称する。いずれも空堀である。

第1堀切（挿図63・図版5・16）

位 置 調査区の南側に位置し、北側に曲輪1、南側に第2堀切がある。底面の平均標高は72.90mを測る。



挿図 63

第1堀切 東側造構図・出土土器実測図、第23土坑造構図

形態 調査区の関係から全容は不明であるが、断面形をみると、いわゆる箱堀の逆台形を呈す。底面は削平され、底幅は1.50 mを測る。検出面での規模は長さ（東西方向）6.30 mである。山輪1の土壘からの最大比高差は8.10 mを測る。なお、底面は東方向に傾斜しており、水流すと東側に接して掘り込まれたSK-23に流れ込むことになる。また、南東側には犬走り状の幅狭な平坦面（幅0.55 m）が続いている。

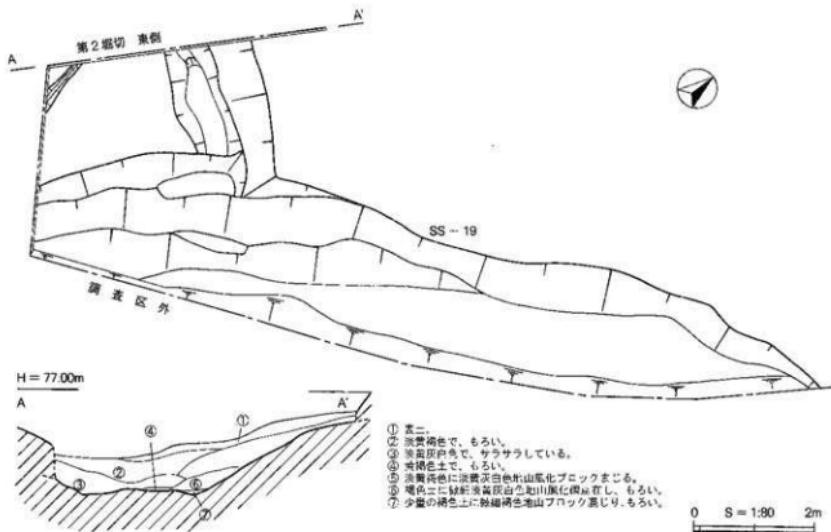
時期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、立地条件等から中世の山城に關連するものと考えられる。

第2堀切（挿図10、64・図版6）

位置 調査区南端に位置し、東側にSS-19が隣接する。底面の平均標高は75.90 mを測る。

形態 調査区の関係から全容は不明であるが、断面形をみると、いわゆる箱堀の逆台形を呈す。底面は削平され、底幅は1.20 mを測る。本遺構の南側にある尾根上削平地（挿図5、第13トレンチ図）からの最大比高差は4.10 mを測る。なお、底面両端には平面に沿う形で側溝が認められる。南側のものが、幅20cm、深さ4 cm、北側のものが幅40cm、深さ8 cmを測る。

時期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、立地条件等から中世の山城に關連するものと考えられる。



挿図64

第2堀切 東側遺構図、第19段状遺構遺構図

第8節 横堀状遺構

横堀状遺構は調査区東端で1基（第1横堀状遺構）、トレンチ調査（第7トレンチ）で1基（第2横堀状遺構）が確認された。

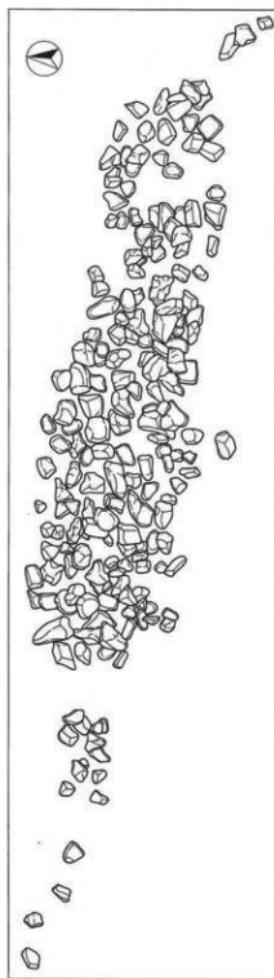
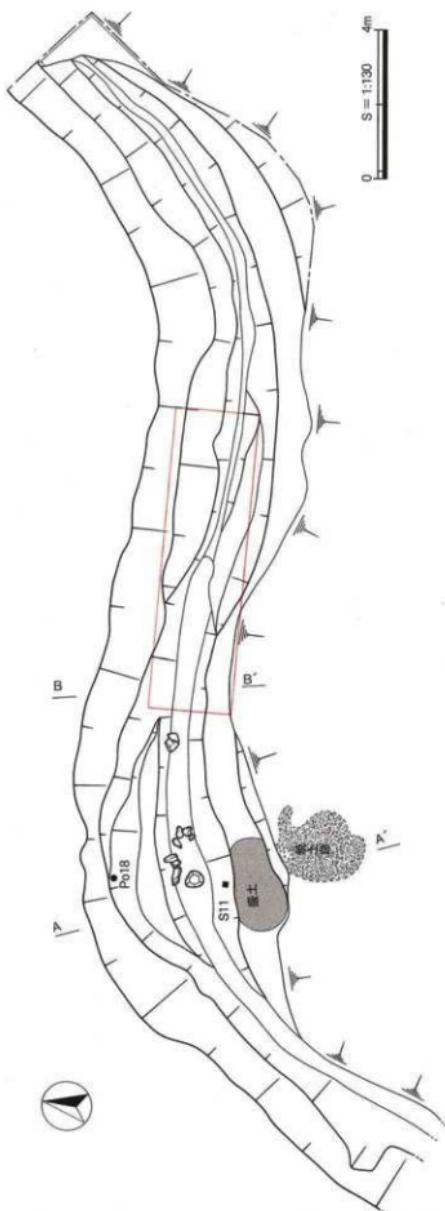
第1横堀状遺構（挿図65、66・図版13、14）

位 置 調査区の東端から南東側の急斜面下に立地する。底面の平均標高は南東側で72.95m、東端で72.65mを測り、曲輪1との最大比高差は7.40mである。上側にSS-18が並行した形で隣接し、南東端は第1堀切東側に造られたSK-23の下側に接している。下側は斜面部が続いている。

形 態 地形に沿う形で緩くS字状に曲折し、東側で終焉している。規模は長さ36.00mを測る。断面形をみると土層断面（A-A'）では逆台形を呈し、規模は上幅1.80m、底幅0.90m、深さ0.28mを測る。上層断面（B-B'）ではやや歪な逆台形を呈し、規模は上幅1.80m、底幅0.55m、深さ0.40mを測る。東端部では断面逆台形をとるもの規模は上幅1.80m、底幅0.20mと極端に幅狭となり、深さは0.30mを測る。したがって、第1堀切内のSK-23付近から派生する本遺構の底面形をみると、途中、中程までは底幅0.90～0.55mと比較的幅をとりながら移行するものの、ここから終焉する北側に向かって底幅は最大で0.20mと足幅にも満たないものとなっている。また、底面は北側に向かって傾斜が付いており、西側から水を流すと東側の外方に流れ落ちる結果となる。その為、雨水等が滯水することなく、空堀の様相を呈している。埋土は自然堆積の様相を呈し、しまりが強い。また、本遺構中程の埋土上には多量の角礫が集石した状態で検出されている。横堀状遺構を構成する外側は上層断面（A-A'）周辺では、地山掘削で断面台形、土壘状（上幅1.20m×高さ0.40m）に掘り残し、一部分厚さ15cm程の盛土を施す所もみられるが、中程から東端にかけては地山掘削で断面や山形に掘り残している。これは西側の基盤層が固い粘質土の堆積であるのに対して、東側半分は硬い角礫層であり、西側ほどの整美な断面台形状の成形が掘削上出来なかった事に起因するものと思われる。なお、十層断面（A-A'）周辺上側には段が付いている。また、土層断面（A-A'）周辺にある土壘状盛土の範囲は東西2.40m、南北は上幅一杯の1.20mであり、その下側緩斜面には、接する形で不整形の炭層とその下の焼土跡（長辺2.20m×短辺1.60m、厚さ：炭層25cm、焼土層13cm）が検出された。のろし等の機能が想定され、上側に接する盛土はこれに関連して積み上げられた可能性が考えられる。

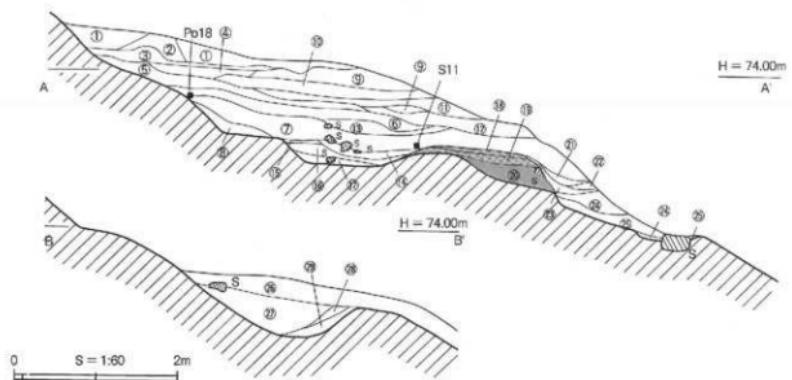
遺 物 段の肩部直上から14世紀頃の土師器捏鉢（18）、その他に埋土中より須恵器小壺（17）、鉄釘（F43）、黒耀石製石鏃（S11）が出土している。

時 期 出土遺物（18）は出土位置等から混入したものと思われる。形態、立地条件等から中世の山城を構成するものと推定される。



挿図 65

第 1 横堀状遺構図 (1)・集石状況図



- ① 灰褐色粘質土で角錐化物混じり。しまる。
 ② 灰色粘質土のブロックで、かたくしまる。
 ③ 灰色粘質土のブロックに黃白色地山巣縫層が混じり、かたくしまる。
 ④ 灰色粘質土で、かたくしまる。
 ⑤ 黄褐色粘質土に地山巣縫層、微細炭化物混じり。しまる。
 ⑥ 黄褐色粘質土に地山巣縫層、微細炭化物混じり。しまる。
 ⑦ 黄褐色粘質土で、かたくしまる。
 ⑧ 黄褐色粘質土で、かたくしまる。
 ⑨ 黄褐色粘質土に地山巣縫層、微細炭化物混じり。しまる。
 ⑩ 黄褐色粘質土で、かたくしまる。
 ⑪ 黄褐色粘質土に青色地山巣縫層多量に混じり、かたくしまる。
 ⑫ 黄褐色粘質土に青色地山巣縫層多量に混じり、黄白色、淡茶色地山巣縫層（厚1cm未満）の混合で、かたくしまる。
 ⑬ 黄褐色粘質土に青色地山巣縫層多量に混じり、しまる。
 ⑭ 黄褐色粘質土に青色地山巣縫層多量に混じり、青色地山巣縫層を少量含む。
 ⑮ 黄褐色粘質土に地山巣縫層（厚3~5cm）点在し。しまる。
 ⑯ 黄褐色粘質土で、わたくしまる。
 ⑰ 少量の茶褐色地質土に多量の黃白色地山巣縫層が混じり、かたくしまる。

- ⑲ 純褐色粘質土に黃白色地山巣縫層が混じり、かたくしまる。
 ⑳ 花色粘質土に地山巣縫層（茶色、黄白色、青色）が多量に混じり、かたくしまる。
 ㉑ 鈍褐色粘質土に地山巣縫層が多量に混じり、かたくしまる。
 ㉒ 鈍褐色粘質土と黃白色地山巣縫層（厚1cm未満）が均質的に混じり、かたくしまる。（混合二重層）
 ㉓ 鈍褐色粘質土に地山巣縫層（茶色、黄白色）が少量混じり、かたくしまる。（混合二重層）
 ㉔ 鈍褐色粘質土に鈍褐色（厚1cm前後）が混じり、混合土でしまる。
 ㉕ 鈍褐色粘質土に地山巣縫層点在し。しまる。
 ㉖ 鈍褐色粘質土で、かたくしまる。
 ㉗ 青灰色粘質土ブロックで、かたくしまる。
 ㉘ 純褐色粘質土ブロック、（茎図）
 ㉙ 鋸歯状粘質土で、しまる。
 ㉚ 花色粘質土に純褐色地質物、地山巣縫層点在し。しまる。
 ㉛ 鈍褐色粘質土に茶褐色地山巣縫層が混じり、かたくしまる。
 ㉜ 純褐色粘質土に黃白色地山巣縫層（厚1cm前後）が混じり、かたくしまる。

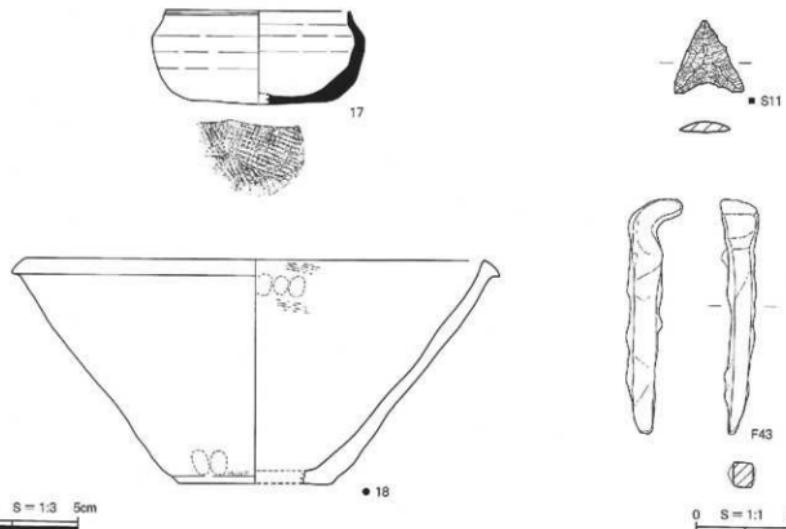


図66

第1横堀状造構造構図(2)・出土遺物実測図

第2横堀状遺構（挿図8・図版4）

位 置 調査区北端の第7トレンチ内に位置する。

形 態 調査区の関係から一部分しか判明していないが、現況では調査区外に北東から北方向に明顯な土壘状の高まりが認められる。第1横堀状遺構が終焉する東側から、やや距離をおくものの、同レベルでさらに規模を拡大した本遺構が急斜面下を地形に沿う形で弧状に巡らされているものと考えられる。断面形をみると、U字形を呈し、規模は上幅1.60m、深さ0.60mを測り、外方の土壘盛土も上幅1.80mが認められる。なお、上側の曲輪2との最大比高差は6.10mを測る。

時 期 遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、形態、立地条件等から中世の山城を構成するものと推定される。

第9節 古墳

日次1号墳（SX-01・挿図67、68、69・図版7、18）

位 置 シアケ遺跡の調査区の北側において、前方後円墳が1基検出された。調査前から地形に若干の高まりがみられ、表土を掘下げたところ前方後円墳の痕跡が認められた。これを日次1号墳と呼ぶ。日次1号墳は横屋集落の北東側、伯太川が大きく蛇行する部分の東側丘陵に位置する。この丘陵は横屋集落の東側にある標高161.40mの丘陵から、南東から北東方向に向かって緩やかに下る丘陵の先端部に位置し、先端部の北西側は伯太川の浸食により、急斜面となっている。日次1号墳の墳頂部で80.65mを測る。

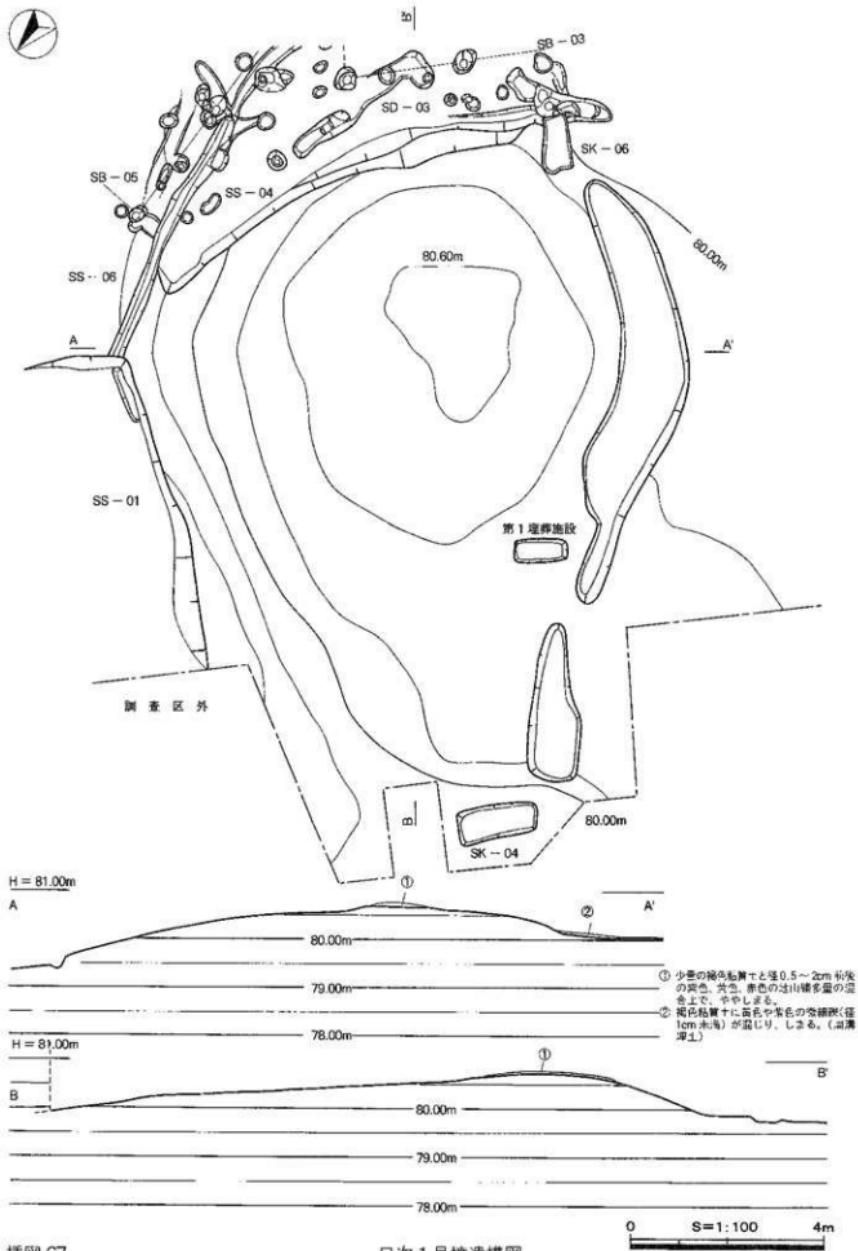
周 溝 地山が山城の曲輪1造成時に大きく削平を受けており、本来の周溝は調査において検出された規模よりも大きいものであったと考えられる。前方後円墳の後円部の周溝が南西側において、前方部の周溝が西側にかけて、両周溝は途切れる形で検出されたが、本来は続いていたと考えられる。検出面での周溝の規模は、後円部の南西側の周溝で、長さ8.81m、幅1.41～0.45m、深さ0.11mを測り、平面形は後円部に沿った弧状を呈する。前方部の西側の周溝は長さ3.25m、幅1.07～0.45m、深さ0.12mを測り、平面形は直線状を呈する。周溝内埋土は褐色粘質土に地山微細礫混じり、しまりのある堆積がみられた。

墳 丘 後円部の墳丘の墳裾部分において、南側から東側にかけてSS-04によって大きく切られている。また、北側から北東側にかけてもSS-01によって切られている。墳丘盛土は山城造成時に大きく削平を受けたと考えられ、後円部の中央の地山直上に2.90×1.10mの範囲で薄く、楕円形に8cmから10cmの厚さで、少量の褐色粘質土と地山礫（径0.5～2cm）多量に含む墳丘盛土が残存していた（①層）。前方部において残存する墳丘盛土は確認されなかつたが、前方部の盛土についても後円部同様に墳丘盛土があつたと考えられる。前方後円墳全体の長さは周溝が全周する形で検出されていないので、南西側に検出された周溝から全体をみると、前方部の墳裾から後方部の墳裾までが14m前後の前方後円墳と推定される。後円部の径は9m前後、前方部は5m前後と推定される。周溝底面から①層（残存する墳丘盛土）までの比高差は南西側で（A-A'）0.98mを測る。主軸方向については北西→南東方向をとる。なお、主体埋葬部の痕跡は認められなかつた。

第1 墓葬施設 第1墓葬施設は後円部中央より西側の周溝から東側に0.35m離れた位置において検出された。前方後円墳の主軸方向にはほぼ直交する形で地山面に掘り込まれ、検出面での標高は80.32mを測る。形態は上面、底面ともに長方形を呈し、規模は上面で長軸2.19m、短軸1.05m、深さ0.11m、底面は長軸2.11m、短軸0.96mを測り、断面形は逆梯形、主軸方向はN-41°-Wをとる。埋土は①のしまりのある黄灰褐色粘質土がみられた。掘り方の平面形が明瞭な長方形を呈することから、木棺が使用されたと推定される。

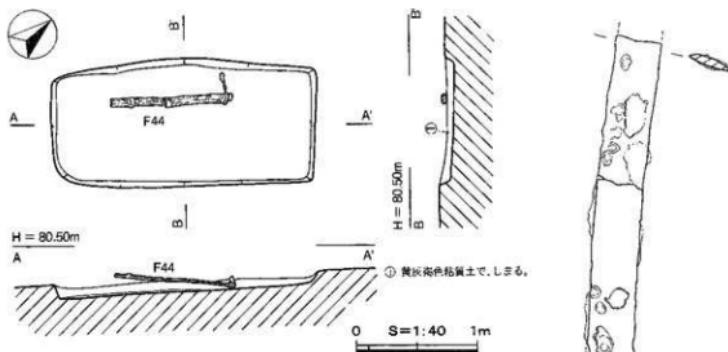
遺 物 第1墓葬施設の中央より、鉄製の鉄剣（F44）が検出された。出土状況は主軸方向に平行に置かれ、刀身の柄が北東側、先端が南西側に向く状態で出土している。鉄剣の先端部は折れており若干移動していることから、山城の曲輪1を造成するときに使用された道具が当たつたか、或いは後世の削平時のものによるもの、いずれかと推測される。頭位は鉄剣の柄部分の北東方向と考えられる。第1墓葬施設から検出された副葬品はこの鉄剣のみで、他には検出されなかつた。

時 期 出土遺物は鉄製品の鉄剣（F44）のみであり、時期を決定する資料に欠けるが、古墳時代中期頃と推定される。

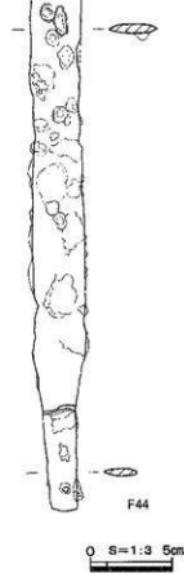


挿図 67

日次 1号墳造構図



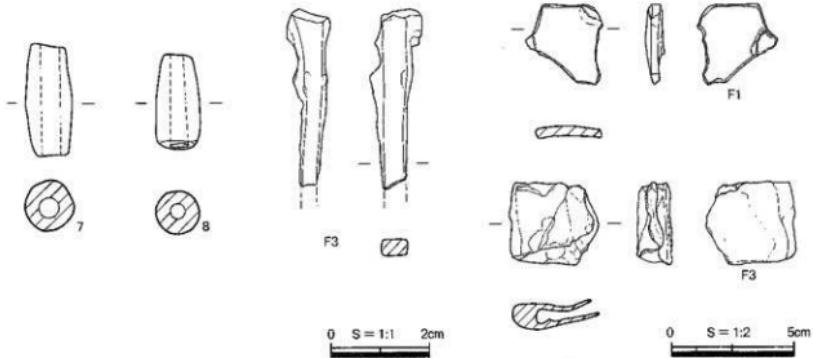
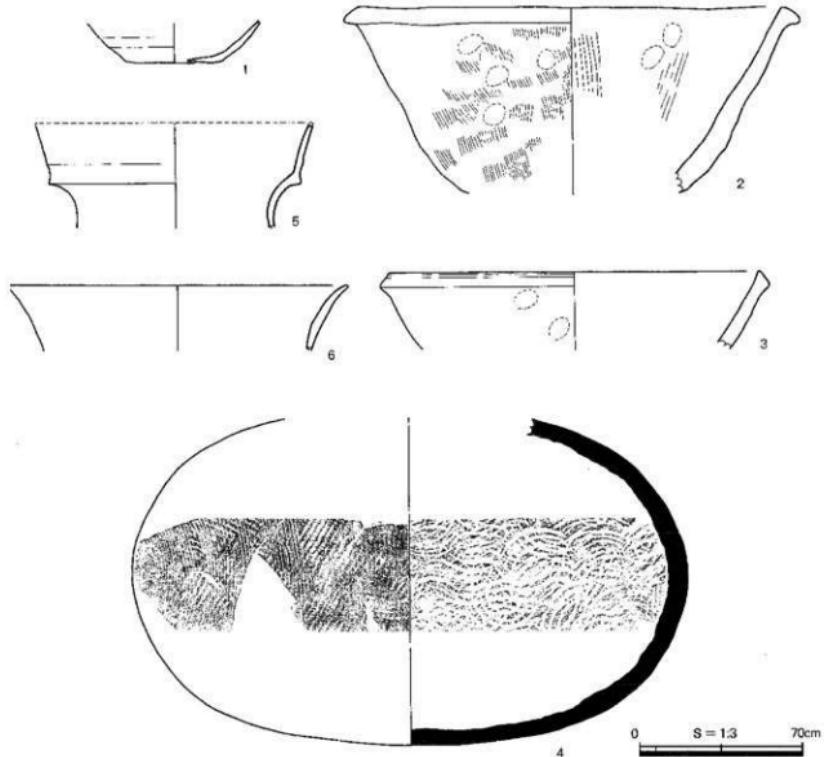
挿図 68 日次 1号墳第 1 埋葬施設遺構図・遺物出土状況図



挿図 69 日次 1号墳
第 1 埋葬施設
出土遺物実測図

第10節 その他の遺構外遺物（挿図70・図版19）

シアケ遺跡では遺構に伴わない遺物が出土している。個々の遺物の詳細は観察表に譲り、ここでは概略について述べる。(1)は土師器の底部で接地面は平坦であるが、外面が磨滅しているために底部の糸切痕の有無については確認できない。時期は中世と考えられる。(2)、(3)の土師器は底部を欠くがいずれも口縁部が肥厚するタイプで器壁は厚い。(3)は磨滅しているが、わずかに指頭圧痕が認められる。(2)は内外面にハケメ、指頭圧痕が認められる。器種は捏鉢になると考えられる。(4)は頸部から上を欠く須恵器の横瓶の胸部で精円形の丸みを持ち、外面には叩き、カキ目調、内面には同心円状叩きがみられる。(5)の上器は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の時期で、壺口縁部から頸部にかけて、(6)は同時期の口縁部上位で、器壁は薄く外反し、壺あるいは壺と考えられる。(5)は口縁下端部があまく外方に突出する。(7)、(8)は土錐で胎上も細かい。(F 1)は板状の鉄片である。(F 2)は釘の頭部が扁平上に肥厚するタイプのもので、先端部の約1/3を欠損する。(F 3)は横U字形を呈する鉄製品で1枚の鉄板を折り曲げて造られている。



挿図 70

遺構外出土遺物実測図

第4章 まとめ

第1節 遺構

シアケ遺跡では弥生時代に始まり中世に至るまでの様々な遺構が確認されているが、ここでは主に中世の山城跡について概観し、若干の考察を試みたい。山城跡シアケ遺跡は直下に伯太川上流域を望む交通上の要衝である。これを押さえ、見張るという点については絶好の立地条件を備えている。陸上交通の未発達な中世においては伯太川下流域にあたる意宇地方と上流域、さらに後方の隅岡伯耆地方とを結ぶネットワークの場所として軍事上あるいは政治、経済面での本地域の役割は非常に重要であった。このような時代背景が想像できるなか、城壁は伯太川右岸に突き出す形をとる尾根突端部にあたり、ややV字峠をなす伯太川上流域を往来する人々を間近に監視する上で最適の場所を占めている。伯太川に面した西～北側は絕壁となっており、自然の要害を呈している。全体の構造は尾根上最高所（標高約80m）に主郭を配し、北側から東側にかけて一段下った帯曲輪を付設したまとまりをもつ城郭空間を構成しており、南側に2条の堀切で遮断し、帯曲輪下には横堀状遺構を巡らせ、さらに下側を急斜面が取り巻くという視覚的にも防衛の堅固さを強調している。主郭は長さ40m、幅7～20mのひょうたん形を呈し、面積520m²程の複郭構造をもつ小規模城郭と言える。遺構配置からみると防衛面では曲輪内の櫓列、堀切、横堀状遺構などがあり、それぞれ曲輪の要所に配されている。見張り、伝達面では主郭は見張り、伝達といった主要機能を兼ね備え、他には、横堀状遺構際のろし場などが挙げられる。

個々の遺構をみると、主郭ではやぐらなどの見張りに利用されたと判断できる遺構は検出されなかつたが、台状部東側に崩開する段状遺構を伴う掘立柱建物跡群は切り合い関係からSB-03・04からSB-05・06・07、さらにSB-01・02へと南側から北側へと台状部の下側をやや取り巻く形で検出された。掘立柱建物跡はいずれも小規模でやや簡素である点は否めない。時期については出土遺物が乏しいため明確には判断しがたいが、本山城跡に伴う曲輪内部施設と推測される。

帯曲輪では少なくとも2回の小規模な改修が認められる。最終面では、底面に盛土を施し、造成面を外方へ拡張している。ここに、SB-08～13の少なくとも6棟の掘立柱建物跡が認められる。これらのうちSB-10～13の4棟は東側のやや張り出し部に重複して造られており、この地点が防御上本山城跡東側の重要な拠点であった事が推測できる。重複するSB-14・15は他がいずれも小規模でやや簡素であるのに対して、特にSB-14は1間×1間で深い柱穴（深さ最高1.00m）をもち上部構造は一定の高さがある見張り機能を具备していた可能性が考えられる。また、同所に所在するL字状のSK-16は底面に2本の深い柱穴をもつ、形態が特異なものであるが、遺物がなく用途は不明であるものの、立地条件等を考慮すると、伝達上、或いは防衛上必要な何かの施設であった可能性も考えられる。虎口については、本調査区内では確認されていないが、帯曲輪南側に隣接する大規模な崩れが立地条件等から推測される。以上、本山城跡で確認された遺構を概観してきたが、出土遺物も少なく、城跡の面積も小規模であることから、恒常的生活の場ではなく、臨時的に少人数の滞在を示す場（詰めの城）であったと考えられる。いずれにしても、自然地形を巧みに利用しながら、機能に応じた施設の配置を行っていた様子が窺える。時期については鎌倉時代（13世紀代）のものと考えられる。なお、その他の時代のものとしては、弥生時代の段状遺構、古墳時代中期の前方後円墳などがみられた。

第2節 遺物

シアケ遺跡においては各遺構から、遺物は出土しているが、全体の個体数は少ない。土器類の出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器（中世）、陶器が、土製品については土鍬、石製品は石鑿、石匙、水晶、

礎が出土している。鉄製品については鎌、釘、直刀、板状鉄製品、棒状鉄製品、鏡などである。銅製品はキセル雁首が出土している。これらの遺物の特徴のあるものについて時期について考察してみる。弥生土器（14）は弥生時代後期中葉の器台の口縁部で口縁端部を欠く、外面には凹線が施される。（14）は弥生土器の底部で平底である。

須恵器（17）は小壺で底部にタタキ目が施されており、焼成は硬い。

陶器は（2）は第10トレンチ内（第7段状造構造成面）からの出土で亀山焼の壺と考えられるもので、肩部から口縁部にかけての破片で、器壁は厚く、体部外面には格子状のタタキ目が施され、内面にはヘラケズリ後にハケメ調整がはいり、頸部はくの字状に屈曲し端部は厚く平坦に造られている。（5）は第8段状造構からの出土で備前焼の大壺と考えられ、口縁部の破片で、器壁は厚く、口縁部は外側に折り曲げて、丸く仕上げられている。色調は淡灰褐色胎土には白色の砂粒がみられる。（8）は常滑焼の大壺と考えられ、第10段状造構からの出土で肩部下から口縁部にかけてと底部が出土している。器壁はやや厚く肩部から頸部に向かって、大きく済すしながら外反し、口縁部には縁帯が造られている。肩部は大きく張り、内面には指痕圧痕がみられ、色調は茶灰褐色から茶褐色で内外に自然釉がかかっている。底部は平坦である。これら3点の陶器の時期は13世紀代の鎌倉時代と考えられる。

土師器はややまとまった量の山上がみられた。（10）、（11）は採鉢で口縁部端部の突出部が少ないことから、時期は13世紀代の鎌倉時代と考えられる。第10段状造構出土の捏鉢（18）は口縁部端部の突出が外方に大きく出ることから（10）、（11）の採鉢よりも新しく14世紀頃にはいるものと考えられる。土削器の坏は（4）が第4掘立柱建物跡から出土している。底部は磨滅しており、糸切り痕は確認されないが、形態から時期は鎌倉時代のものと考えられる。その他の造構から坏の底部（3）、底部を欠く坏（6）、坏の底部（7）、坏（9）が出土している。

土製品は第10段状造構から多く出土している。土錐は小型のものは丸く2cm前後の製品が多い。やや大型のものは6角を呈し、長さは3cm前後の製品が多くみられる。いずれの土錐も形態は中央が膨らみをもち、断面形は丸く、縦軸に沿って丸い穴が通じている。

石製品は第8土坑と第10段状造構（帯状曲輪的一部分）から結晶部分の残る水晶破片（S1）、（S2）が、さらに第10段状造構（帯状曲輪一部分）からは舟閃石安山岩、安山岩の亜円礫、角礫（S3～S9）などが集石した状態で出土しているが、投弾と考えられるものである。その他に第1横堀状造構出土の黒曜石製の無茎石鐵（S11）には細かい剝離加工がみられる。形態から弥生時代のものと考えられる。第16段状造構からは安山岩の石匙状石器（S10）が出土している。

鉄製品は造構内から多く出土しており総数43個を数える。鉄製品の種類の内訳は鉄劍1、釘26、鍔3、錐2、棒状鉄製品1、鎌1、鉄輪1、小札1（鎧の一部）、板状鉄製品1、製品の不明鉄6である。日次1号墳出土の鉄劍は長さ54.3cm以上、幅3.0cmで先端部を欠く。釘は第10段状造構（帯状曲輪的一部分）から多く出土している。頭部あるいは先端部を欠損する釘もみられるが、頭部の残っている釘（F12）、（F14）、（F17）、（F21）、（F19）、（F23）、（F26）、（F28）を観察すると釘の形状は扁平で、断面は4角形の角柱状を呈している。釘（F5）、（F9）は釘が3本以上絡まって銷びついたものと推測される。鉗（F11）は柄の部分と推定される。錐（F10）、（F36）は両先端部が尖っている。棒状鉄製品の（F6）は断面がやや扁平な製品である。鎌（F33）は長さが20cm以上と、やや大型で先端部を少し欠く。鉄輪（F24）はリング状の鉄製品で何かの留め金と考えられるものである。小札（F25）は薄い鉄版状の製品で鎧の一部で紐を通して穴が6ヶ所みられる。

銅製品はキセル雁首（F22）が出土している。筒部は円錐形で、先端には皿状になっている時期は近世と考えられる。

以上、遺物は若干の弥生土器に始まり、古墳時代極少。そして鎌倉時代（13世紀代）のものが多く、大半を占め、14世紀代のものは少ない。

遺 物 觀 察 表

法量 (cm) 復は復元値 残は残存値

遺物番号 検査番号 同族番号	出土遺構	種類	器種	法量			色調	特徴
				口径	底径	器高		
1 4 15	第1トレンチ	弥生土器	底部		復5.0	残3.2	内：断面淡黒褐色 外：黄茶色～桃黄茶色	(内)ヘラケズリ (外)ナデ・ミガキ (胎土)緻密
2 10 15	第10トレンチ	陶器 龟山焼	甕 口縁部	復30.0		残6.8	内・外：灰色	(内)ヘラケズリ後ハケメ (外)格子状タタキ目 (胎土)緻密
3 34 15	S B - 08	土師器	皿		復5.4	残1.2	内：黄橙灰褐色 外：淡黄褐色	(内・外)ナデ (胎土)密。1mm径程度の白色砂粒を含む
4 35 15	S B - 09	土師器	坏	復12.4	復6.0	残3.5	内・外：淡棕黃色	(内・外)風化の為調整不明 (胎土)密。微細砂粒を含む
5 22 15	S S - 08	陶器 備前	甕 口縁部	復37.0		残4.5	内・外：淡灰茶色	(内・外)ヨコナデ (胎土)密。微細砂粒を多く含む
6 22 15	S S - 09	土師器	坏	復11.0		残3.2	内・外：棕黄色	(内・外)ナデ (胎土)密。1mm径以下の白色砂粒を少量含む
7 22 15	S S - 09	土師器	底部		復5.0	残0.8	内・外：棕黄色	(内・外)ナデ (胎土)密。1mm径以下の白色砂粒を少量含む
8 14 15	S S - 10	陶器 常滑	甕 口縁部	復44.0	復23.0	残22.7	内：茶灰褐色 外：茶褐色 内外面自然釉がかかる。	(内)ヘラケズリ後ナデ・指痕直痕 (外)ナデ (胎土)密。1～3mmの長石、石英、雲母を含む
9 14 15	S S - 10	土師器	坏	復13.0	復6.0	残3.7	内：黄橙灰色 外：黄橙色	(内・外)ナデ (胎土)密。1～2mm径の白色砂粒を少量含む
10 14 15	S S - 10	土師器	捏鉢	復25.0		残6.5	内・外：黄橙灰褐色	(内)ナデ・タテハケメ (外)ナデ・指頭圧痕 (胎土)密。1～2mm径の白色砂粒を少量含む
11 14 15	S S - 10	土師器	捏鉢	復26.0		残2.8	内・外：淡乳黄褐色	(内・外)ナデ (胎土)1mm径以下の白色砂粒を含む
12 54 15	S K - 14	土師器	皿		復6.0	残1.0	内・外：濃棕黄色	(内・外)ナデ (胎土)密。1～2mm径以下の白色砂粒を少量含む
13 14 15	S S - 07	弥生土器	口縁部			残2.4	内・外：濃棕黄色	(内・外)風化の為調整不明 (胎土)雲母が多く含み、長石、石英を少量含む
14 14 15	S S - 07	弥生土器	底部		3.6	残1.7	内：淡褐色 外：黄茶色	(内)指ナデ (外)ナデ (胎土)密。砂粒を含む
15 22 16	S S - 12	弥生土器	底部		復5.0	残3.6	内・外：淡桃黄茶色	(内・外)風化の為調整不明 (胎土)密。微細砂粒を含む
16 63 16	第1掘切	磁器	染付碗	復10.0		残3.3	灰白色	内外面花・網目文様
17 66 16	S S - 18	須恵器	小壺	復11.0	復8.4	残5.8	内・外：淡灰色	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ・底部タタキ目 (胎土)密

シアケ遺跡土器・陶磁器・土製品観察表(1)

遺物番号 測定番号 回収番号	出土遺構	種類	器種	法量			色調	特徴
				口径	底径	器高		
18 66 16	S S - 18	土師器	捏鉢	復 28.0	復 9.6	復 12.8	内・外：淡黄褐色	(内)ヨコナダ・ハケメ・指頭圧痕 (外)ヨコナダ・底部指頭圧痕 (底土)1mm 径以下の長石・石英を多く含む
19 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.3	2.4	褐灰色	4 g
20 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.1	2.1	明赤褐色	3 g
21 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.9	3.3	にぶい黄橙色	13 g 6角形
22 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.3	2.2	淡橙色	4 g
23 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.8	3.0	淡黄色	10 g 6角形
24 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.3	2.1	淡橙褐色	5 g
25 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.2	2.0	淡橙黄褐色	3 g
26 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.2	2.1	淡橙黄褐色	3.5 g
27 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.9	3.1	淡黄色	13 g 6角形
28 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.3	2.3	淡黄灰黑色	4 g
29 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.3	2.0	淡橙色	3 g
30 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.3	2.4	淡橙黄灰色	4 g
31 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 2.0	2.9	淡黄色	12 g 6角形
32 28 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.6	2.2	淡橙黄色	5 g
33 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 2.0	3.0	にぶい黄橙色	12 g 6角形
34 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.4	2.3	にぶい黄橙色	4 g
35 15 16	S S - 10	土製品	土鍤		径 1.4	2.3	暗灰色	5 g

シアケ遺跡土器・陶磁器・土製品観察表 (2)

遺物番号 P.M.番号 回収番号	出土遺構	種類	器種	法量			色調	特徴
				口径	底径	器高		
36 15 16	SS-10	土製品	土錐		径1.9	3.1	淡黄褐色	12 g 6角形
37 15 16	SS-10	土製品	土錐		径1.2	2.8	にぶい赤褐色	4 g
38 15 16	SS-10	土製品	土錐		径1.2	2.5	淡黄橙色	4 g
39 15 16	SS-10	土製品	土錐		径1.3	2.3	淡橙黄色	4 g
40 15 16	SS-10	土製品	土錐		径1.4	2.3	淡橙褐色	4 g
41 15 16	SS-10	土製品	土錐			残2.1	淡橙色	2 g
42 15 16	SS-10	土製品	土錐			3.3	淡黄色	15 g 6角形
43 15 16	SS-10	土製品	土錐			3.1	淡黄色	12 g 6角形
44 27 16	SS-16	土製品	土錐			2.6	にぶい黄橙色	5 g
45 15 16	SS-10	土製品	土錐			3.1	淡黄色	13 g 6角形
1 70 19	遺構外	土師器	底部		復6.0	残2.4	内・外: 淡桜黃茶色 断面: 淡黒灰色	(内・外)ナデ (胎土)緻密。微細砂粒わずかに含む
2 70 19	遺構外	土師器	捏鉢	復26.0		残11.4	内・外: 淡黄茶色	(内・外)ナデ・タテハケメ・ 指頭圧痕 (胎土)1~3mm径の白色砂粒を均質的に含む
3 70 19	遺構外	土師器	捏鉢	復23.0		残4.8	内・外: 淡黄茶色 断面: 灰褐色	(内)ナデ (外)ナデ・指頭圧痕 (胎土)密。1~3mm径の白色砂粒を少量含む
4 70 19	遺構外	須恵器	横瓶 体部			残19.8	内・外: 灰色	(内)同心円文 (外)タキ痕、カキ目痕 (胎土)密。微細砂粒含む
5 70 19	遺構外	赤生土器	壺 口縁部			残6.4	内・外: 淡茶褐色	(内・外)風化の為調査不明 (胎土)1~2mm径の長石、 石英を少量含む
6 70 19	遺構外	赤生土器	口縁部	復21.0		残4.0	内・外: 淡茶褐色	(内・外)風化の為調査不明(胎土) 1~2mm径の白色砂粒を多く含む
7 70 19	遺構外	土製品	土錐		径1.0	2.3	にぶい黄橙色	3 g
8 70 19	遺構外	土製品	土錐		径0.9	2.0	赤褐色	2 g

シアケ遺跡土器・陶磁器・土製品観察表 (3)

法量(cm)

遺物番号 部品番号 回収番号	出土遺構	石 材	分 類	法 量			色 調	備 考
				長さ	幅	厚さ		
S1 48 16	S K - 08	水晶	水晶破片	1.2	0.9	0.7	無色透明	2 g
S2 16 16	S S - 10	水晶	水晶破片	1.5	1.2	0.8	無色透明	2 g
S3 16 17	S S - 10	角閃石安山岩	自然礫	14.8	11.3	8.6	灰色	
S4 16 17	S S - 10	角閃石安山岩	自然礫	17.2	11.2	9.0	灰色	
S5 16 17	S S - 10	花崗岩	自然礫	17.6	11.1	6.2	黃灰色	
S6 16 17	S S - 10	角閃石安山岩	自然礫	14.8	12.2	7.7	灰色	
S7 16 17	S S - 10	安山岩	自然礫	11.5	7.5	5.9	乳灰色	
S8 16 17	S S - 10	安山岩	自然礫	9.4	9.2	5.1	淡灰色	
S9 16 17	S S - 10	安山岩	自然礫	12.8	5.6	4.6	淡灰色	
S10 28 17	S S - 16	安山岩	石匙状石器	7.9	4.9	0.8	灰色	34 g 剥離 痕
S11 66 17	S S - 18	黒曜石	石礫	1.5	1.4	0.2	黑色	1 g 細か い剥離痕

シアケ遺跡石製品観察表(1)

法量(cm) 残は残存値

遺物番号 形態番号 個数番号	出土遺構	種類	法量			断面	備考
			長さ	幅	厚さ		
F1 12 17	S S - 04	釘	残3.8	0.8	0.5	方形	両端を欠く
F2 12 17	S S - 04	釘	残2.6	0.4	0.3	方形	両端を欠く
F3 12 17	S S - 04	板状鉄製品	2.2	4.2	0.8	長方形	
F4 12 17	S S - 06	不明鉄	残5.2	1.1	0.7	方形	頭部を欠く
F5 23 17	S S - 09	釘	残10.7	2.8	3.5	1個体は方形	釘(固まり) F 1 ~ F 9 個体
F6 23 17	S S - 09	棒状鉄製品	残9.1	1.5	0.5	長方形	頭部は折り返す
F7 22 17	S S - 09	釘	残4.8	0.6	0.3	長方形	先端部を欠く
F8 22 17	S S - 09	不明鉄	残2.3	1.1	0.8	五角形	角柱状の鉄片
F9 23 17	S S - 09	釘	残10.5	1.6	1.2	1個体は方形	釘(固まり) F 1 ~ F 7 個体
F10 16 17	S S - 10	錐	10.8	0.5	0.5	方形	先端は尖る
F11 16 17	S S - 10	鉗	残11.3	0.5	0.5	方形	先端部を欠く
F12 17 17	S S - 10	釘	残6.1	0.4	0.4	方形	先端部と頭部は扁平
F13 17 17	S S - 10	釘	残5.0	0.7	0.6	方形	先端部と頭部を欠く
F14 17 17	S S - 10	釘	残3.1	1.2	0.4	長方形	先端部を欠き、頭部は扁平
F15 16 17	S S - 10	釘	残7.8	1.2	0.9	方形	先端部と頭部を欠く
F16 16 17	S S - 10	鉗	残7.8	0.9	0.6	長方形	柄の部分を欠き、刃部は反る
F17 17 17	S S - 10	釘	残3.1	0.7	0.7	方形	先端部を欠き、頭部は扁平

シアケ遺跡金属製品観察表(1)

遺物番号 体部番号 裏板番号	出土構造	種類	法量			断面	備考
			長さ	幅	厚さ		
F18 16 17	SS-10	不明鉄	2.7	3.7	0.6	長方形	鉄板状の破片
F19 17 17	SS-10	釘	残4.9	0.8	0.65	方形	先端部を欠き、頭部は湾曲する
F20 17 18	SS-10	釘	残3.5	0.6	0.5	方形	先端部を欠き、頭部はやや扁平
F21 17 18	SS-10	釘	残4.1	0.9	0.6	長方形	先端部を欠き、頭部は扁平
F22 16 18	SS-10	キセル雁首(銅)	残6.8	1.7	0.15		
F23 17 18	SS-10	釘	残5.0	0.6	0.4	長方形	先端部を欠き、頭部はやや扁平
F24 16 18	SS-10	鉄輪	5.0	5.0	1.1		2連のリング状
F25 16 18	SS-10	小札	残7.9	残2.8	0.2		径1~2mmの円孔が4つ 綫に約6mm間隔で、列に並ぶ
F26 17 17	SS-10	釘	5.7	0.4	0.7	長方形	頭部は扁平
F27 18 18	SS-10	釘	7.0	1.1	0.7	長方形	先端部を欠く
F28 17 18	SS-10	釘	残6.1	0.8	0.7	方形	先端部を欠き、頭部は扁平
F29 17 18	SS-10	釘	残3.7	0.55	0.5	方形	
F30 17 18	SS-10	釘	残3.1	0.6	0.55	方形	頭部を欠く
F31 17 18	SS-10	釘	残5.6	0.6	0.5	方形	頭部と先端部を欠く
F32 17 18	SS-10	釘	残5.5	0.5	0.5	方形	頭部を欠く
F33 18 18	SS-10	鎌	20.0	2.0	0.3	紡錘形	弓状の形状を持つ
F34 18 18	SS-10	不明鉄	残8.4	1.0	0.7	長方形	
F35 18 18	SS-10	不明鉄	残5.2	1.2	1.1	不整六角形	

シアケ遺跡金属製品観察表(2)

遺物番号 埋蔵基号 回収番号	出土遺構	種類	法量			断面	備考
			長さ	幅	厚さ		
F36 18 18	S S - 10	錐	11.1	0.6	0.6	方形	柄の部分、先端共に尖る
F37 18 18	S S - 10	不明鉄	5.9	4.3	0.6	扁平	鉄板状の破片
F38 59 18	S K - 19	釘	残4.1	0.5	0.5	方形	先端部を欠き、頭部は扁平
F39 24 18	S S - 13	鉗	20.3	1.2	0.7	方形長方形	
F40 24 18	S S - 13	釘	残4.1	0.8	0.6	長方形	先端部を欠く
F41 24 18	S S - 13	釘?	残3.6	0.8	0.6	長方形状	先端部を欠く
F42 27 18	S S - 16	釘?	残6.6	0.75	0.7	円形	先端部は丸みをもつ
F43 66 18	S S - 18	釘	4.8	0.4	0.5	方形	先端部は湾曲する
F44 69 18	S X - 01	鉄劍	残54.3	3.0	0.5	レンズ状	先端部を欠損、目釘穴は一箇所確認される。
F1 70 19	遺構外	不明鉄	3.3	2.8	0.4	扁平	鉄板状の破片
F2 70 19	遺構外	釘	残3.5	0.5	0.3	長方形	先端は扁平状
F3 70 19	遺構外	不明鉄	3.4	3.7	1.1	横U字形	1枚の鉄板を折り曲げる



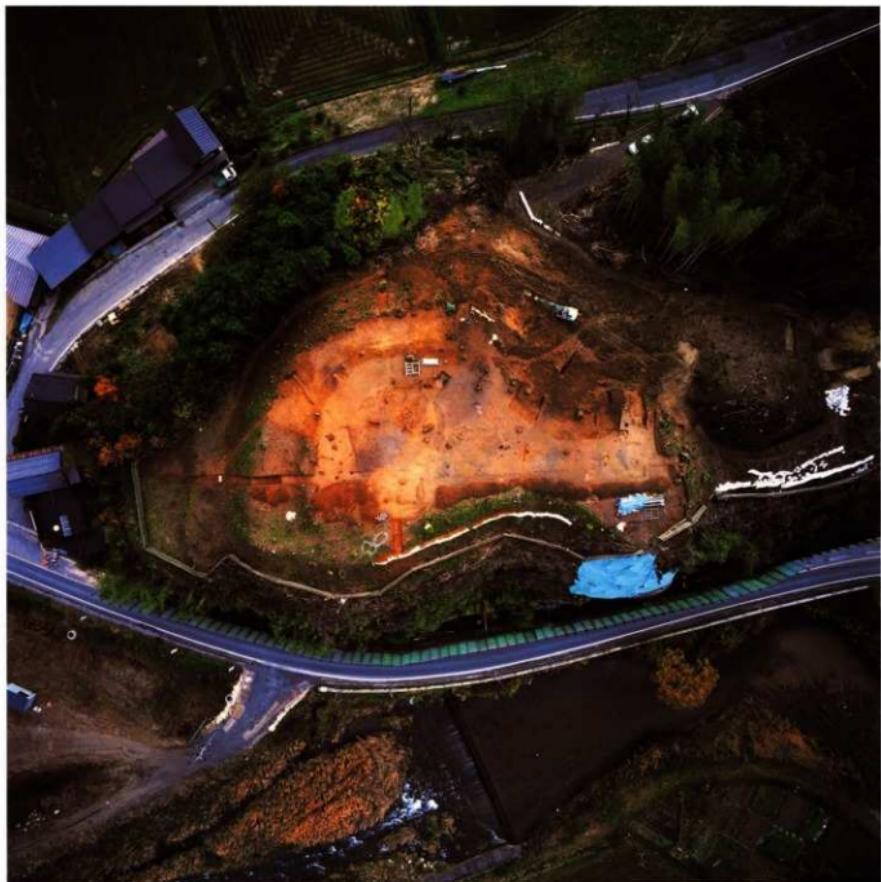
写 真 図 版





シアケ遺跡調査前全景（北西から）

図版2



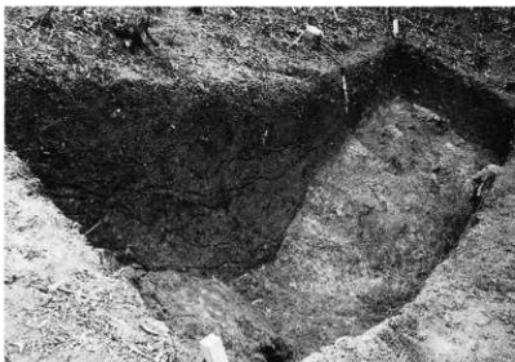
シアケ遺跡調査地全景（鳥取西部地震直後）



調査前曲輪1南側（南東から）



第3トレンチ検出状況（南から）



第1トレンチ完掘状況（西から）



第3トレンチ内SK-01土層断面（東から）



第2トレンチ完掘状況（南から）



第6トレンチ完掘状況（東から）

図版4



第6トレンチ土壌検出状況（北から）



第6トレンチ土壌土層断面（北西から）



第6・7・8・9トレンチ状況（南東から）



第8トレンチ完掘状況（北から）



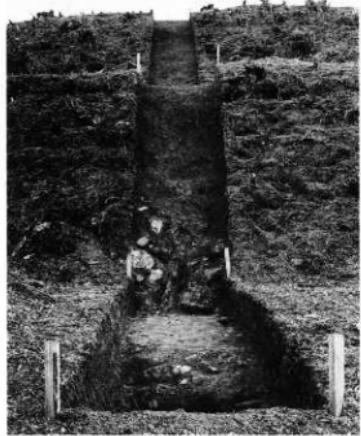
第7トレンチ内集石状況（北東から）



第7トレンチ北東側(横堀)完掘状況（南西から）



第7トレンチ内横堀土層断面（北西から）



第7トレンチ北東側完掘状況（北東から）



第11トレンチ完掘状況（南西から）



第11トレンチ内第2堀切完掘状況（南東から）



第13トレンチ完掘状況（南西から）



第1堀切検出状況（東から）



第1堀切(上)・SK-23(下)検出状況（東から）



SK-23完掘状況（南から）

図版6



SK-23状況（東から）



第2堀切検出状況（南東から）



調査区南側完掘状況（北東から）



曲輪1南側検出状況（北東から）



調査区南側完掘状況（南から）



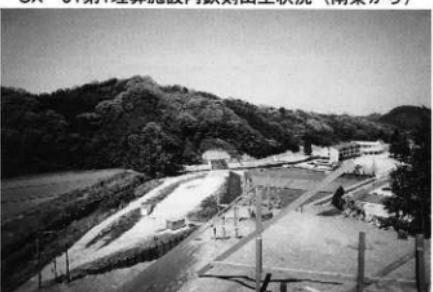
曲輪1北側SX-01完掘状況（南から）



SX-01第1埋葬施設内鉄剣出土状況（南東から）



調査区南東側緊急防災工事施工状況（北東から）



調査区北西側緊急防災工事施工状況（南から）



曲輪1北東側SS-06検出状況（北西から）



SS-06側溝土層断面（北西から）



SS-04・05・06・ピット群完掘状況（北から）



SB-01検出状況（北から）

図版8



曲輪2北側SS-09土層断面（南東から）



SS-09(上)・SS-11(下)・SS-12(右)検出状況(南東から)



曲輪2北東側完掘状況（北から）



曲輪2東側完掘状況（北から）



曲輪2南側第1次ピット群検出状況（北東から）



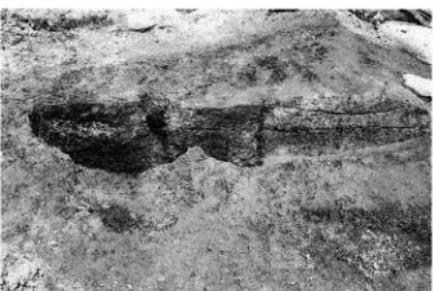
曲輪2南側第1次ピット群検出状況（北西から）



曲輪2南側集石・鉄鎌出土状況（東から）



曲輪2南側特殊ビット半截状況（南西から）



SB-14P4・SB-15P4土層断面（南西から）



曲輪2第2次ピット群完掘状況（北西から）



曲輪2第2次ピット群完掘状況（南西から）



曲輪2南東側検出状況（南から）



曲輪2南側SD-06完掘状況（南西から）



曲輪2南側SD-06土層断面（南西から）



曲輪2南側埋土中玉砂利（北から）

図版10



曲輪2南西側SS-17完掘状況（南西から）



調査区東側崩れ土層断面（西から）



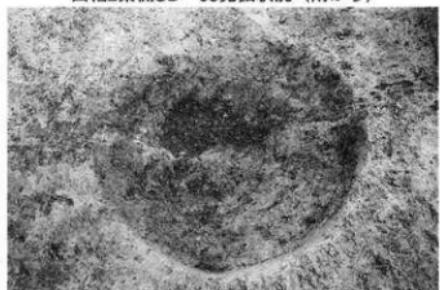
曲輪2南側SD-04検出状況（北から）



曲輪2東側SD-05検出状況（南から）



曲輪2東側SD-05完掘状況（南から）

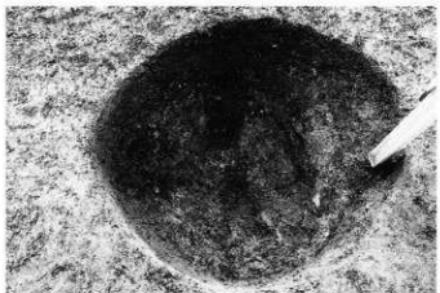


SK-01完掘状況（西から）



SK-04完掘状況（南東から）

図版11



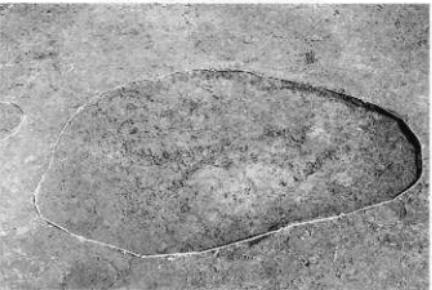
SK-05完掘状況（東から）



SK-06完掘状況（南から）



SK-07完掘状況（西から）



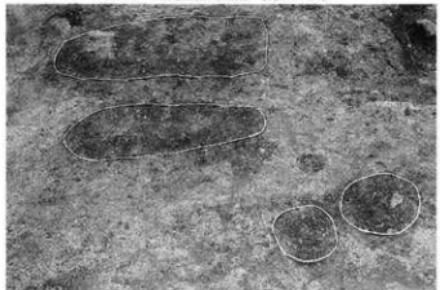
SK-08完掘状況（西から）



SK-09完掘状況（東から）



SK-10完掘状況（北西から）

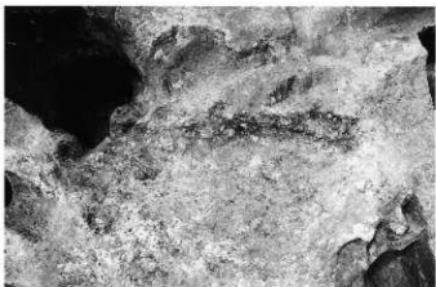


SK-11(上)・SK-12(下)検出状況（東から）



SK-11(左)・SK-12(右)土層断面（南から）

図版12





SK-22土層断面（南西から）



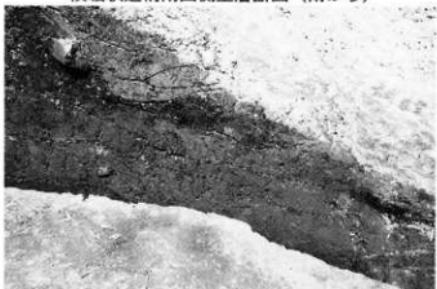
SK-22完掘状況（南西から）



横堀状遺構南西側土層断面（南から）



横堀状遺構南西側土層断面（土壘部・南西から）



横堀状遺構南西側土層断面（焼土部・南西から）



横堀状遺構南西側焼土跡検出状況（南から）



横堀状遺構南西側検出状況（北から）



横堀状遺構南側集石状況（北から）

図版14



横堀状遺構完掘状況（南西から）



横堀状遺構東側完掘状況（北東から）



横堀状遺構南側集石状況（東から）

図版15

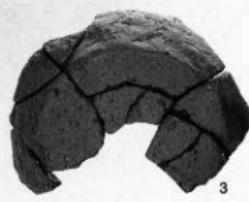
T-1



T-10



SB-08



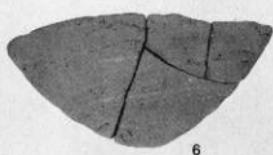
SB-09



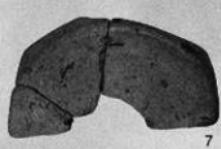
SS-08



SS-09



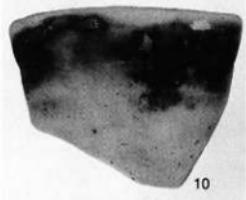
SS-09



SS-10



SS-10

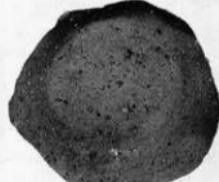


8

SK-14

SS-14

SS-07



14

11

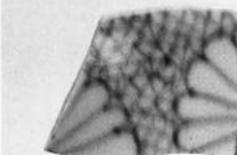
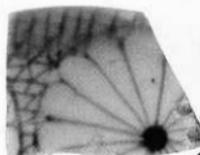
12

図版16

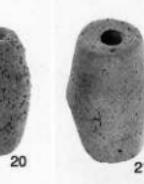
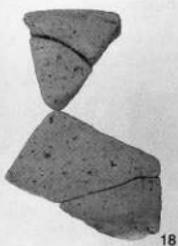
SS-12



第1堀切



SS-18



17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

SS-16



SS-10

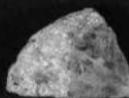


SK-08



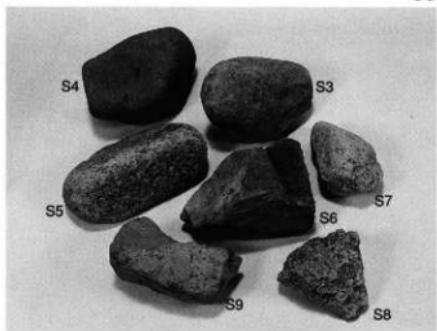
S1

SS-10

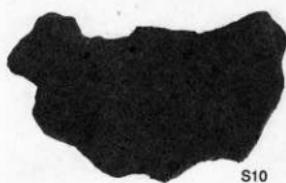


S2

SS-10



SS-16



SS-18



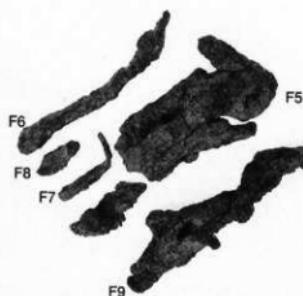
SS-04



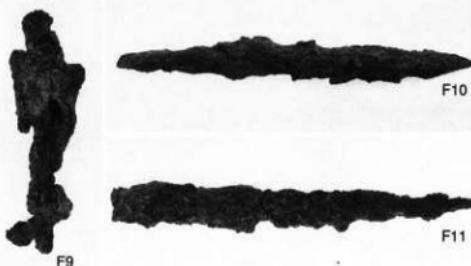
SS-04



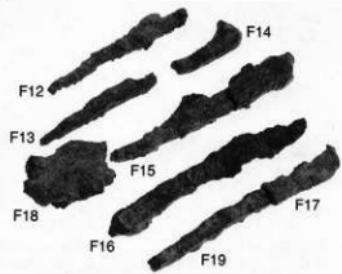
SS-09



SS-09

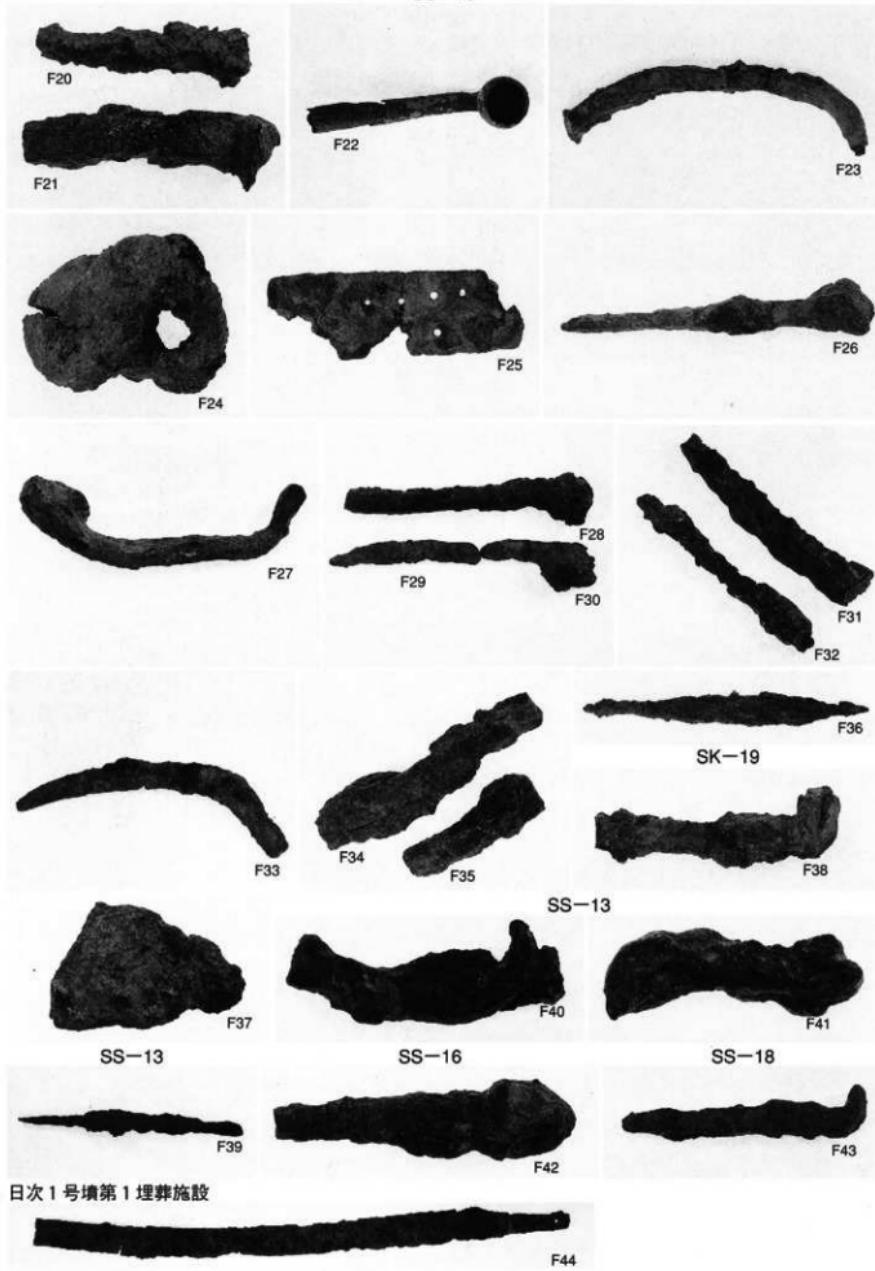


SS-10



図版18

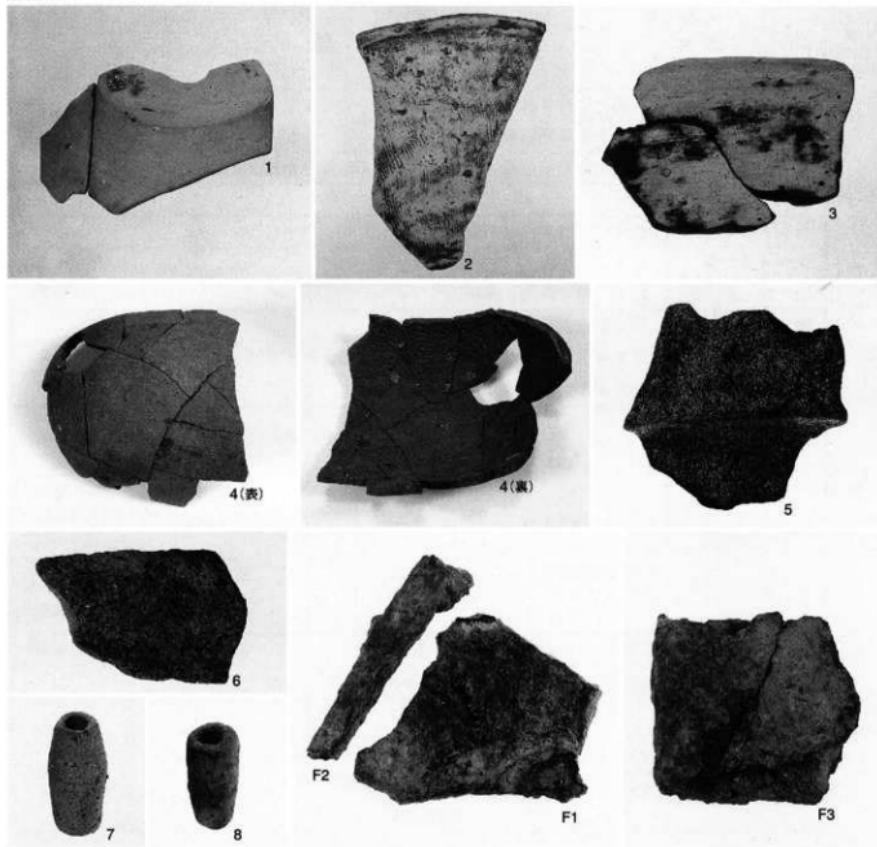
SS-10



日次1号墳第1埋葬施設

図版19

造構外



報告書抄録

ふりがな	しあけいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	シアケ遺跡発掘調査報告書							
副書名	主要地方道安米伯太日南線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	伯太町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編集者名	松本 哲・妹尾 秀樹							
編集機関	伯太町教育委員会							
所在地	〒692-0207 烏根県能義郡伯太町大字母里580番地							
発行年月日	西暦2002年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しあけいせき シアケ遺跡	しまねけんのぎぐ んはくたちょうお おあざひなみ 島根県能義郡伯 太町大字日次	32322				20000824 ～ 20011130	1,392m ²	主要地方 道安米伯 太日南線 改良工事 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物			特記事項	
シアケ遺跡	山城跡	中世	掘立柱建物跡 段状造構 溝状造構 土坑 古墳 堀切 横掘状造構	弥生土器 土師器 須恵器 陶器				

付図 1 シアケ遺跡全体遺構図

